

冬頭城跡
冬頭山崎1号古墳
冬頭山崎2号古墳
冬頭山崎1号横穴

2000

財団法人 岐阜県文化財保護センター



写真1 冬頭遺跡 全景



写真2 冬頭山崎2号古墳



写真3 半球状金銅製品

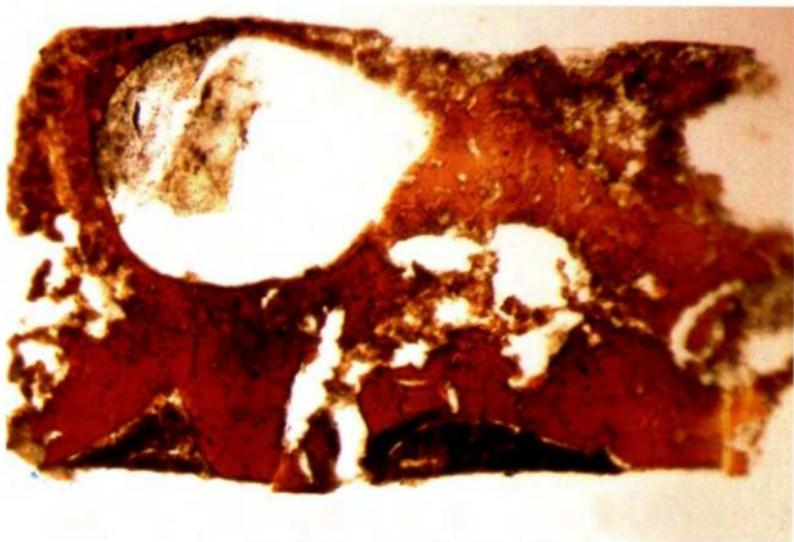


写真4 弓に塗られていた漆様膜の断面 (75倍)

序

冬頭城跡は、高山盆地北部の中山丘陵北先端部に位置しています。この中山丘陵は、高山盆地中央部を流れる宮川と西側を流れる川上川とに挟まれた南北にのびる丘陵地であります。周辺の地域より約60mの高低差があるため高山市を一望することができ、城を築造するには最適な場所だと言えます。

中世の飛驒は、三木氏や姫小路氏とともに地域豪族が割拠し市内にも幾つかの山城が所在していました。

このたび建設省中部地方建設局高山国道工事事務所が行う一般国道41号高山国府バイパス建設事業に伴い、冬頭城跡の発掘調査を行いました。飛驒の山城については発掘の調査例が少なく、高山では三枝城跡について二例目になりました。

今回の調査により冬頭城跡が、16世紀中頃の緊迫した情勢の中で築かれたことが分かりました。また、この遺跡に2基の古墳と1基の横穴墓を発見しました。この3基は年代を異にするだけでなく飛驒の古墳時代の転換期に関する遺構であることが分かり、飛驒のいにしえの解明にまた一つ貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成にあたりまして、関係諸機関各位の温かい御理解、御協力を賜り感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々の多大なる御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 村木 光男

例　　言

1. 本書は、岐阜県高山市冬頭町に所在する冬頭城跡（遺跡番号21203-00518）・冬頭山崎1号古墳（21203-09083）・冬頭山崎2号古墳（21203-09084）・冬頭山崎1号横穴（21203-09085）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、一般国道41号高山国府バイパス建設事業に伴うもので、建設省中部地方建設局高山国道工事事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成10年度に実施し、八賀晋三重大大学名誉教授の指導のもとに上出巳吉が担当した。
4. 本書の執筆は、次のように担当し、編集は上出が行った。

第2章第1節　岩田修　　(丹生川中学校)

第3章第4節　成瀬正勝・上出巳吉

第3章6節3項 佐伯哲也　　(岐阜県中世城館跡総合調査委員)

第4章　　藤根久・植田弥生 (㈱パレオ・ラボ)

その他　　上出巳吉

5. 地形測量は、株沖下測量に委託して行った。

6. 遺物の写真撮影は、フォトスタジオ サトウに委託して行った。

7. 自然科学分析は㈱パレオ・ラボに委託して行った。

8. 保存処理は、奈良文化財技術協会中西盛二に委託して行った。

9. 空中写真撮影は㈱イビソクに委託して行った。

10. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御助言・御指導をいただいた。

記して感謝の意を表す次第である。

大崎光男・金山尚志・竹田雅文・田中彰・田中秀和・辻本宗久・富井眞・西山要一・橋本勝行・

横幕大祐・吉田栄敏・吉田広

11. 本文中の方位は、国上座標第VII系の座標北を使用している。

12. 土層及び遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄 1993『新版標準土色帖』を参照した。

13. 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯 ······	1
第2節 発掘調査の経緯 ······	2

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境 ······	5
(1) 地形的特徴 ······	5
(2) 地質的特徴 ······	5

第2節 歴史的環境 ······	9
------------------	---

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要 ······	13
第2節 基本層序 ······	16
第3節 古墳時代の遺構と遺物 ······	20
(1) 冬頭山崎1号古墳 ······	20
(2) 冬頭山崎2号古墳 ······	29
(3) 石組遺構 ······	42
(4) 冬頭山崎1号横穴 ······	45

第4節 冬頭山崎古墳群に関する考察 ······	54
--------------------------	----

第1項 冬頭山崎1号古墳の構築技法にみられる特徴とその背景 ······	54
(1) 腰石の設置技法 ······	54
(2) 桁石の設置 ······	54
(3) 諸技法の背景と冬頭山崎1号古墳の位置 ······	55

第2項 冬頭山崎2号古墳にみられる特徴とその背景 ······	57
---------------------------------	----

(1) 飛驒地方における板状石材を用いた石槨及び石室 ······	57
(2) 埋葬施設底部における溝について ······	62
(3) 飛驒地方の占墳立地からみた2号古墳の位置 ······	65

第3項 「古墳群」としての冬頭山崎古墳群 ······	67
-----------------------------	----

第5節 中世の遺構（冬頭城跡） ······	69
(1) 主郭（本曲輪） ······	69
(2) 曲輪2 ······	72
(3) 曲輪3 ······	74
(4) 小曲輪 ······	76
(5) 不明遺構 ······	84

第6節 冬頭城跡について	87
第1項 冬頭について	87
第2項 戦国時代の飛驒	89
第3項 冬頭城跡の縄張りについて	92
(1) 冬頭城跡の概要	92
(2) 考察	92
(3) まとめ	96
第4章 自然科学分析	
第1節 半球状金銅製品・赤色顔料・骨質物の蛍光X線分析	98
第2節 冬頭山崎2号古墳の鉄剣及び鉄鋤付着木質部の樹種同定	102
第5章 結語	106
引用・参考文献	108

挿図目次

第1図 冬頭城跡の位置	1	第37図 底部に溝のある古墳(2)	63
第2図 川上川・宮川水系の地質略図	6	第38図 飛驒の古墳分布図	66
第3図 高山市内の古墳分布図	10	第39図 中山丘陵北部の縦断面	69
第4図 冬頭城跡全体造構図	14	第40図 主郭(木曲輪)	70
第5図 トレンチ設定図	15	第41図 主郭の断面・ピット	71
第6図 トレンチ・セクション土層図(1)	16	第42図 曲輪2のピット	72
第7図 トレンチ・セクション土層図(2)	17	第43図 曲輪2	73
第8図 トレンチ・セクション土層図(3)	18	第44図 曲輪3	74
第9図 トレンチ・セクション土層図(4)	19	第45図 曲輪3のピット	75
第10図 冬頭山崎1号古墳平面図	21	第46図 小曲輪1(断面1)	76
第11図 1号古墳土層図	22	第47図 小曲輪1~4、断面2~4	77
第12図 冬頭山崎1号古墳石室	24	第48図 小曲輪5~9・ピット	79
第13図 1号古墳石室断面図	25	第49図 小曲輪断面5~9	80
第14図 1号古墳出土状況	26	第50図 小曲輪10~12、断面10~12	82
第15図 1号古墳出土遺物	28	第51図 小曲輪13・14、断面13・14	83
第16図 冬頭山崎2号古墳平面図・北側墳丘面	30	第52図 不明造構2	84
第17図 2号古墳上層図	31	第53図 不明造構1・2	85
第18図 2号古墳石梆	33	第54図 不明造構1・3 不明造構1出土遺物	86
第19図 2号古墳石梆断面図	34	第55図 冬頭村	87
第20図 2号古墳壁面掘削痕	34	第56図 飛驒の主な城砦分布図	88
第21図 2号古墳の葺石	34	第57図 戦国時代の山城の位置図(高山市)	91
第22図 2号古墳出土遺物	35	第58図 冬頭城址	93
第23図 2号古墳遺物出土状況	35	第59図 中山城址	93
第24図 2号古墳出土遺物(1)	37	第60図 山田城址	95
第25図 2号古墳出土遺物(2)	39	第61図 畠佐城址	95
第26図 2号古墳出土遺物(3)	41	第62図 半球状金銅製品・赤色顔料・骨質物の 蛍光X線スペクトル図	99
第27図 石組造構	43	第63図 弓に塗られていた漆様膜のFT-I R チャート	101
第28図 石組造構の石材	44	第64図 漆のFT-I Rチャート	101
第29図 石組造構の遺物とピット	44	第65図 2号古墳出土木質部採取位置	105
第30図 1号横穴出土遺物	45		
第31図 冬頭山崎1号横穴	47		
第32図 飛驒の横穴式石室	56		
第33図 冬頭王塚古墳・赤保木ボタ山5号墳	58		
第34図 信包八幡神社古墳	60		
第35図 小丸山古墳	61		
第36図 底部に溝のある古墳(1)	62		

図版目次

図版1	冬頭城跡(遠景・近景)	109
図版2	冬頭山崎1・2号古墳	110
図版3	冬頭城跡主郭、小曲輪	111
図版4	冬頭城跡、作業風景、見学会	112
図版5	冬頭山崎1号古墳(1)	113
図版6	冬頭山崎1号古墳(2)	114
図版7	冬頭山崎2号古墳(1)	115
図版8	冬頭山崎2号古墳(2)	116
図版9	石組遺構	117
図版10	冬頭山崎1号横穴・不明遺構	118
図版11	冬頭城跡主郭(本曲輪)	119
図版12	曲輪2・曲輪3	120
図版13	小曲輪	121
図版14	トレンチ(1)	122
図版15	トレンチ(2)	123
図版16	1・2号古墳・石組遺構 出土遺物	124
図版17	2号古墳 出土遺物(1)	125
図版18	2号古墳 出土遺物(2)	126
図版19	2号古墳・1号横穴・不明遺構出土遺物	127
図版20	2号古墳出土遺物(鉄鎌1・2)	128
図版21	X線写真(刀装具、鉄鎌)	129
図版22	X線写真(鉄劍)	130
図版23	2号古墳出土遺物の付着木質部の電子顕微鏡写真	131
図版24	2号古墳鉄劍付着材	132
図版25	飛驒の古墳(1)(古川町)	133
図版26	飛驒の古墳(2)(古川、国府町)	134
図版27	飛驒の古墳(3)(国府町)	135
図版28	飛驒の古墳(4)(高山市)	136

表

第1表	冬頭城跡付近の河川縦岩石種	8
第2表	高山市内の古墳	11
第3表	遺物観察表(1)	38
第4表	遺物観察表(2)	41
第5表	1号古墳の石材(1)	49

第6表	1号古墳の石材(2)	50
第7表	1号古墳の石材(3)石組遺構の石材	51
第8表	2号古墳の石材(1)	52
第9表	2号古墳の石材(2)	53
第10表	冬頭王塚古墳と冬頭山崎2号古墳	59
第11表	飛驒の古墳	67
第12表	飛驒の主な城砦	88
第13表	2号古墳出土の遺物付着木質部の同定結果	102

写真

写真1	冬頭城跡全景	巻頭
写真2	冬頭山崎2号古墳	巻頭
写真3	半球状金銅製品	巻頭
写真4	弓に塗られていた漆様膜の断面	巻頭
写真5	2・3トレンチ	2
写真6	調査中の1号古墳	2
写真7	6トレンチ(墓溝)	3
写真8	2号古墳遺物出土状況	3
写真9	1号古墳前庭部	4
写真10	2号古墳底部の溝	4
写真11	2号古墳の実測	4
写真12	川上川の円礫	7
写真13	1970年の冬頭王塚	9
写真14	冬頭王塚発掘調査の様子	13
写真15	2号古墳の壁面	34
写真16	冬頭王塚古墳	58
写真17.18	信包八幡神社古墳	60
写真19.20	かうと洞2号古墳	60
写真21	小丸山古墳	61
写真22	ねずみ峠古墳	61
写真23	ウシロゴ3号古墳	61
写真24	深ノ洞古墳	61
写真25~30	高山市の城	90
写真31.32	出土遺物採取位置②③	105

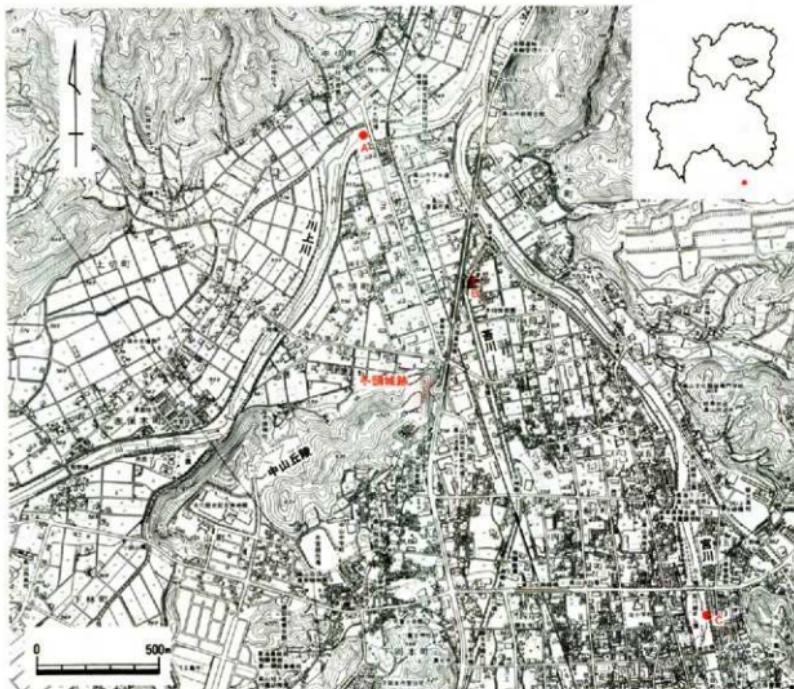
第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、建設省中部地方建設局高山国道工事事務所（以下、高山国道工事事務所）が行う一般国道41号高山国府バイパス建設事業に伴うものである。一般国道41号高山国府バイパスは、中部縦貫自動車道のアクセス道路としての利用と共に交通量の多い高山市と古川・国府両町間の朝夕の渋滞解消のため計画されたものである。

この工事に伴い高山冬頭町地内に所在する周知の遺跡冬頭城跡周辺が掘削されるため調査することとなった。当遺跡は、中山丘陵の北先端部に位置し、「斐太後風土記」や「飛騨国中案内」などにも城跡として記載されている。

発掘調査は、高山国道工事事務所から岐阜県教育委員会が委託を受け、1998年（平成10年度）財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。



第1図 冬頭城跡の位置

A～Cは河川標高観測地点
(高山市1万分の1地形図 提供：高山市教育委員会)

第2節 発掘調査の経緯

冬頭城跡における発掘調査は、1998年（平成10年）6月29日～12月25日までの約6ヶ月間に渡って実施した。調査により小瀬山山頂部に主郭となる平坦地や尾根上に削平地を検出した。また、調査中に5世紀末の竪穴式石室と思われる古墳と6世紀末～7世紀初頭の横穴式石室の古墳や石組遺構、6世紀末～7世紀初頭と思われる横穴を検出した。

4月より調査準備を進め、高山国道工事事務所による伐採終了後、6月下旬現場事務所を設営し用具の搬入を行った。

小瀬山は急斜面で麓には国道41号や民家・農協などが立ち並んでいたため、調査中にて廃土置き場の土止めを築いて掘削を開始した。調査区は小瀬山北側よりA・B・C区を設定し調査を開始した。以後、週ごとに調査経過を記述する。冬頭山崎1号古墳は1号古墳と略し、冬頭山崎2号古墳は2号古墳とした。

第1週 (6.29～7.3) 29日関係者で調査始め式を行った。伐採した木を使い廃土の土止めを各所に作る。

A区の5カ所にトレーンチ堀りを行った。

2トレーンチの斜面より人頭大の川原石が出土した。

中世の遺構として山頂に主郭と見られる削平地や尾根上に曲輪2、曲輪3と見られる削平地と小規模な削平地が數か所認められた。



写真5 2・3トレーンチ

第2週 (7. 6～7. 9) 3トレーンチの斜面からも川原石がみつかり、頂上部の盛り土の様子から古墳（2号古墳）の葺石である可能性が考えられた。また、その斜面の表土（I層）から須恵器片が見つかる。



写真6 調査中の1号古墳

第3週 (7.13～7.17) 調査前からA区の緩やかな斜面に、中央が凹んだ遺構（1号古墳）を確認したため、6トレーンチを設定し調査を進めた。3トレーンチ中央より人頭大の川原石が出土し、石組遺構として調査を開始した。

第4週 (7.21～7.23) 1号古墳周辺の表土掘削中、拳大の川原石が多量に出土する。B区北側の尾根部分の表土を掘削する。

第5週 (7.27～7.31) 1号古墳は南南東に開口する横穴式石室と思われ、該遺構の広がりを調査する。石組遺構のII層より須恵器片（鰐）が出上る。A区北側の川原石が出土した周辺

を堅穴系の古墳という予測のもと、玄室のプランを探し調査を進めた。

A区の曲輪3よりピット（穴）を確認した。B区の尾根上の曲輪の表土を掘削する。

- 第6週 (8.3~8.7) 曲輪3よりピットを24ヶ所検出する。
1号古墳側壁の裏側から1mの範囲に挙大の石が数多く出土した。
- 第7週 (8.17~8.21) C区山頂部の調査を開始し、北側から石が数多く出土した。
- 第8週 (8.24~8.28) 1号古墳石室中央部に黒褐色土が入り込み、掘り起された形跡を確認した。C区頂上の南側に箱堀のように掘削された場所を確認した。II層から川原石を検出した。
- 第9週 (8.31~9.4) C区南東側に墳丘のような膨らみを確認した。19トレンチを堀る。
- 第10週 (9.7~9.11) 1号古墳の石室内に側壁に使用したと思われる石材が落ち込んでいた。また、前庭部には有蓋高壝が破片となって出土した。2号古墳の玄室プランを確認する。
19トレンチ掘削中、表土より約80cmの深さで川原石が出土するが、遺構や遺物の確認ができなかった。C区西側に膨らみがあり16トレンチを堀る。C区山頂部東側より人頭大の石が多数出土した。
- 第11週 (9.14~9.18) 1号古墳の築造部分に閉塞石と見られる川原石を検出する。玄室内に入った石材を滑車にて取り除いた。C区山頂部の16・17トレンチより人頭大の川原石が出土した。
- 第12週 (9.21~9.25) 22日台風7号にて調査区内の木が根ごと倒れた。天候不順のため調査進まず。
- 第13週 (9.28~10.1) 1号古墳の墳丘部に6トレンチ1~4を設定し周溝を検出する。石組遺構を調査し、半円形に川原石が出土した。
- 第14週 (10.5~10.9) 石組遺構から約3m離れた場所で岩盤を掘り込んだピットを検出する。C区の山頂部より焼土や灰が確認された。15・20トレンチの断面を実測する。
- 第15週 (10.12~10.14) 1号古墳の床面が掘られており、盗掘を受けた痕跡と思われる。B区の曲輪部分の掘削を進める。天候不順のため調査進まず。
- 第16週 (10.19~10.23) 1号古墳の平面実測を行い、石室の写真撮影を行った。B区の曲輪部分の掘削を進める。C区山頂部の東側を掘削し砾の出土状況を調べる。
- 第17週 (10.26~10.31) 1号古墳の周溝を調査する。2号古墳より板状石材を使用した床面を検出する。床面中央西より幅み目状に巻かれた遺物（弓）が出土した。また、床面中央南側より鉄剣や鐵鎌を検出した。
30日ヘリコプターにて空撮を行う。31日現地説明会を実施し、約120名の参加が



写真7 6トレンチ（基溝）



写真8 2号古墳遺物出土状況

4 第1章 発掘調査の経緯

あった。

- 第18週 (11.2~11.6) 1号古墳の右側壁の裏より土師器片が出土した。

前庭部よりピットを3ヵ所検出した。2号古墳より鉄劍や金銅製の刀装具などが出土した。

- 第19週 (11.9~11.13) 乗鞍山頂が雪化粧。

1号古墳の側壁・奥壁の実測をした。石組造構の平面や断面を実測した後撮影を行った。C区の南側全面Ⅱ層まで掘削した。

- 第20週 (11.16~11.20) C区山頂部の撮影を行った。

17日作業員による掘削調査を終了。2号古墳の平面の実測を行った。

- 第21週 (11.24~11.26) 2号古墳の鉄劍や鐵鎌を砾床ごと取り上げ、保存処理の委託をした。

- 第22週 (11.30~12.4) 2号古墳の板状石材の断面や左右側壁の実測を行った。

- 第23週 (12.8~12.11) 2号古墳の溝の実測を行い、葺石の法量を測定した。A区北西部に横穴を検出し、管玉が1点出土した。

- 第24週 (12.14~12.18) 横穴の実測を行い撮影を行った。

- 第25週 (12.21~12.25) 発掘調査後の冬頭城跡を遠景・近景など、各所から撮影した。

以後、財團法人岐阜県文化財保護センター飛驒山脈所にて整理作業に入った。

調査によって新たに発見した遺跡は、平成11年1月14日付で冬頭山崎1号古墳（岐阜県遺跡番号21203-09083）、冬頭山崎2号古墳（21203-09084）、冬頭山崎1号横穴（21203-09085）となった。



写真9 1号古墳 前庭部



写真10 2号古墳底部の溝

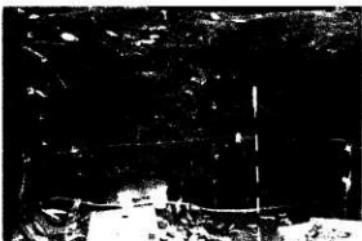


写真11 2号古墳の実測

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

(1) 地形的特徴

冬頭城跡（高山市冬頭町）は高山盆地の北部、中山丘陵の北に位置し、近く付近では川上川・宮川・芦川が合流している。中山丘陵は、高山盆地へ西方から流入している川上川と高山盆地中央部を流れる宮川との間に挟まれた、南北に伸びる丘陵地である。盆地の平坦地からの比高は80m以内の浸食からのがれた残丘であるが、急峻な崖をなしているところもある。（第1図参照）

冬頭城跡は中山丘陵の北端において東北方向に伸びる尾根がこぶ状に高まっている所に作られている。海拔約612m、周辺の平坦地から約60mの高低差（比高）があるこの位置からは西側の川上川の下流部と高山盆地平坦部のほとんどを見渡すことができる。遠くは乗鞍岳など飛騨山脈や周辺の山々、城山、鍋山、錦山、大西山なども一望できる。また、北方は国府町方面を伺うこともできる見晴らしの良いこの冬頭城跡は、軍事的にも重要な意味があったと思われる。

高山盆地は、いつ頃、どのようにしてできたのだろうか。飛騨地方は、約7000万年前に濃飛流紋岩が大噴火して大量の火碎流堆積物を放出してからは、平穏な時代を経てきた。その間、地殻変動も少なく、この地域は浸食を受けて次第に平坦化していったと考えられる。それが約3000万年前になると変動の記録が表れてくる。中山丘陵にも松原疊層が分布してくる。宮崎付近では断層運動で上昇し、分水嶺が形成される。現在のような高山盆地が作られ始めたのである。この頃から飛騨山脈の隆起、断層運動、火山活動など今まで続いている変動が現在の地形を形成している。現在の川上川・宮川の河床の海拔と松原疊層の海拔との比高は約30mであり、この300万年間で高山盆地は厚さ30mが浸食されたことになる。

また、高山盆地は河川による堆積層が非常に薄く、河床には岩盤がすぐに現れている。高山盆地は全体的に隆起をしていて、それが盆地状になったのは、相対的に周開が断層で盛り上がったと見ることができる。このような背景から冬頭城跡がある中山丘陵は、高山盆地内に残された古い地形（残丘）であると言える。

(2) 地質的特徴

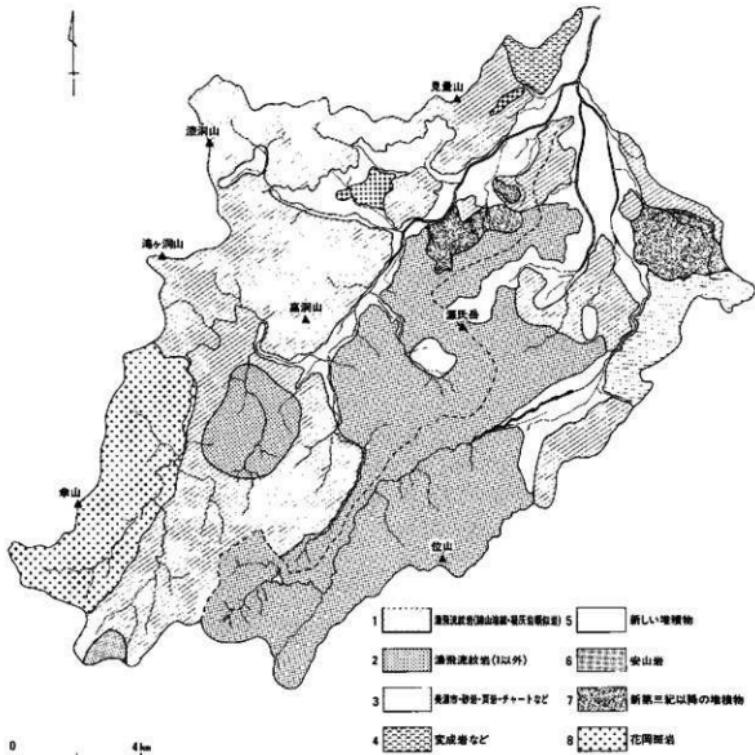
中山丘陵は、濃飛流紋岩によって形成されている。前述のように古い地形であり地表で浸食を受け続けているために風化を激しく受けている。それでも尾根は風化物を取り除かれるので岩盤が現れることがある。また、中山丘陵には濃飛流紋岩の風化残留物としての礫が散在している。

中山丘陵には、約240万年前の丹生川火碎流堆積物が濃飛流紋岩の上に堆積し、更に約40万年前の火山灰層（高山火山灰層）がその上に乗っていることがある。この冬頭城跡付近では、直接濃飛流紋岩が表出している。これらの堆積物は浸食されてなくなっていたのである。

このように中山丘陵全体は濃飛流紋岩で形成されている。この濃飛流紋岩は「錦山溶結凝灰岩層」と呼ばれている。溶結凝灰岩とは、高温のまま火碎流堆積物が厚く堆積したとき自らの熱で溶接し

た状態になる（溶結という）構造をもった凝灰岩である。錦山溶結凝灰岩層の特徴は、粗粒の鉱物からなり石英の多い岩石である。冬頭城跡付近の漫飛流紋岩はこのように2~3mm大の石英が目立つ。石英粒は日光があたるとキラキラ光りガラスのような光沢を示すので見分けやすい。また、石英はもっとも風化されにくい鉱物なので粘土化しても残っていることが多い。このほかにも白色~ピンク色の長石が多い。長石は風化されやすく粘土の基になり岩片が含まれていることがある。溶結構造はよく見られる。新鮮な漫飛流紋岩は青っぽい色をしているが風化が進むと黄色~赤色を帯びてくる。

冬頭城跡は、この種の漫飛流紋岩を基盤としている。表面は風化されているので城を作るときは表土をはぎ取る必要があったと思われるがすぐに岩盤になっていることから、基礎工事はそれほど手間をかけなくてもよかったものと考えられる。風化物が覆っているので側溝を掘るのも労力は少なかつたと思われる。尾根づたいの曲輪や切岸は自然地形を利用して作られている。



第2図 川上川・宮川水系の地質略図

<古墳について>

尾根づたいに冬頭山崎1・2号古墳や冬頭山崎1号横穴が発見されている。古墳の石室はいずれも漫飛流紋岩であり、錦山溶結凝灰岩のものである。自然に板状に割れている（板状節理）ものを利用している。板状節理した新鮮な漫飛流紋岩はこの冬頭城跡付近には見当たらない。板状節理の発達したものは近くに見られるが、地表近くのものは風化が激しい。掘って取り出したのだろうか。この種の漫飛流紋岩の分布域は広くどこから出土したものかを特定することはできない。中山丘陵のどこかも知れないが、与島古墳群の石室と類似しているので同じような産地があると思われる。いずれにしても近くの山中から持ち出したとしか言及することはできない。ただし、同じ種類の漫飛流紋岩なので基本的にはほとんどの石は、同一場所から運んだものと言える。

<礫について>

冬頭城跡には円礫が多く利用されている。この円礫は、川原か段丘堆積物から運ばれたものと思われるが、近くに川原があることからそこから持ち込んだものと思われる。川上川と宮川は上流の地質の違いから川原の礫の岩石種も異なってくる。それで、現在の川原石の石質を調べその概略を第1表に示した。宮川の上流はほとんど漫飛流紋岩で美濃帯の堆積物（チャート・砂岩・頁岩など）で構成されている。それに対して川上川上流地域には白色長柱状の長石が大きさ数cmと目立つ岩石（花崗斑岩）が含まれていることが大きな特徴である。また、川上川には安山岩と結晶片岩類も見られた。峠川は小規模な川で当時と現在の状況は大きく異なっていることが予想されるが参考までに記載した。

冬頭城跡の円礫は、大きさ20~30cm程のものが多いが、大きなものになると50cmになる。円礫と言つても長円礫や偏平なものが特徴的に見られるもので形にも配慮して運ばれたようである。石質は、ほとんどが漫飛流紋岩でわずかの花崗斑岩やチャートが見られる。安山岩、結晶片岩質のものも存在している。丹生川火砕流堆積物の礫も1個確認された。漫飛流紋岩以外の石質は10%以下である。その多くが花崗斑岩であり、次いでチャートである。それ以外はわずかである。漫飛流紋岩も細粒凝灰岩質など多様であり、川原から運ばれたことを物語っている。この石質から判断すると川上川の礫を中心利用したことになる。割合から考えて特に好んだ石質はないようである。

冬頭城跡には川原礫でない風化残留物としての礫が見られる。これらはすべて錦山溶結凝灰岩層のものに対比できるため地山のものである。板状の漫飛流紋岩礫（角礫）が古墳付近に多く存在していたが、これは古墳築造に伴うものである。古墳近くの円礫も花崗斑岩が多く基本的に川上川の円礫を運んできたと思われる。



写真12 川上川の円礫

第1表 冬頭城跡付近の河川縁岩石種

河川名		川上川	苔川	宮川
観測地点		四十九院橋下 (A地点)	宮川の合流点より 300m上流 (B地点)	連合橋と万人橋の 中間地点 (C地点)
岩 石 種 類	濃飛流紋岩	448	100	100
	花崗斑岩	29	0(わずか)	0
	安山岩	2	0(わずか)	0
	上宝火碎流堆積物	なし	0(大きい)	0(存在)
	丹生川村火碎流堆積物	なし	0(存在)	未確認
	チャート	3	4	15
	泥岩・頁岩	4	3	4
	結晶片岩類	14	0	0
個数		500	107	119
備考		大きな礫	小さい礫	やや丸みに欠ける

(観測地点A～Cは、第1図参照)

<参考文献>

山田 直利ほか 1985 「地域地質研究報告」(5万分の1図幅)『高山地域の地質』地質調査所

第2節 歴史的環境

今回、発掘調査により中世の城郭遺構とともに古墳時代の遺構が検出された。そのため歴史的環境は、古墳時代と中世の冬頭について記述する。

古墳時代の冬頭町

高山市に現存する古墳は約50基であり、過去に存在した古墳を含めると約80基を数える。宮川と合流する川上川の左岸には、中切上野古墳群・上切寺尾古墳群・与島古墳群・赤保木古墳群・溝上古墳群・川上川左岸古墳群・下やせ尾古墳・真言屋敷裏古墳などがあり、市内の古墳の約半数が所在する。¹⁾

また、宮川の支流大八賀川沿いには、小丸山古墳・杉ヶ洞横穴・桧山横穴・七切横穴などが所在する。宮川と川上川と中山丘陵に囲まれた堆積土壤の三角地帯に冬頭がある。昔は主に水田として土地利用されてきた場所であったが、近年は住宅の他、民間企業や飛騨農業協同組合などの施設が建ちならび開発が進んでいる。

かつては、「この冬頭に10基を越える古墳（東田1号墳・東田2号墳・上ヶ見1号墳・上ヶ見2号墳・流レ田1号墳・流レ田2号墳・中里1号墳・中里2号墳・ハゲノ下1号墳・ハゲノ下2号墳・ハゲノ下3号墳・門脇古墳）が散在していた」²⁾が、現在は消滅してその詳細を知ることはできない。明治21年の絵図においては字名から推測はするものの古墳の確実な位置を示すものは残されていない。唯一保護されてきた王塚古墳は、昭和45年1月に高山市教育委員会により発掘調査が行われ、川原石を使用した竪穴式石棺が2基検出された。出土遺物などから5世紀後半の円墳であるとされる。²⁾

冬頭町の古墳の多くは、確認されていながら実態を知ることなく消滅してしまった。今回、限られた調査区内ではあったが、王塚古墳と100mという距離に近い時代の古墳を検出したことや、時代の異なる2基の古墳を検出したことなど古代の冬頭地域を知る貴重な資料を得た。また、今まで確認されていた高山市の横穴墓については三福寺町周辺に限られていたが、今回の発見により市内の広い地域に分布する可能性が出てきたと言える。



写真13 1970（昭和45）年の冬頭王塚

提供 高山市教育委員会



第3図 高山市内の古墳分布図
(建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図
「高山」「三日町」「町方」「飛騨古川」より)

第2表 高山市内の古墳

NO	古墳名	形状	石室	立地・特徴・時期・出土遺物など
1	冬頭山崎1号古墳 冬頭山崎2号古墳 冬頭山崎1号横穴	円墳 円墳	横穴式 堅穴式	7世紀前半の横穴式石室。須恵器出土。 5世紀末の2段築成の古墳。鉄劍・鉄鎌出土。 7世紀代の横穴。管玉出土。
2	冬頭王塚古墳	円墳	堅穴式	5世紀後半の2段築成円墳。堅穴式石室が2基。人骨や鉄劍・鉄鎌出土。1970年発掘を実施。
3	中切上野古墳群1~6号	円墳		山腹。南斜面上より1・6・2号と並ぶ。 東斜面の南端より4・3・5号と並ぶ。
4	上切寺尾古墳群1~6号	円墳		山棱。1~6号の他に12カ所ほどのマウンドが東西150mの間に並ぶ。
5	与島古墳群1・3~6号	円墳	横穴式	3号古墳は7世紀中葉で両袖式の横穴式石室。須恵器等が出土。1996年3・4・6号の発掘を実施。
6	真言屋敷裏山古墳	円墳	横穴式	山腹。
7	下やせ尾1・2号墳	円墳		山腹。
8	赤保木1~5号墳	円墳	堅穴式	5号古墳は5世紀中頃の堅穴式石櫛。1992年発掘。 江戸時代は9基で現存5基。
9	川上川左岸古墳群1号	円墳	横穴式	河畔にあり、石室が開口する。
10	溝上古墳群1~3号	円墳		山腹。
11	ねずみ峠古墳	円墳	横穴式	山麓。石室が開口する。
12	岩屋古墳	円墳	横穴式	7世紀初頭で2段築成の円墳。両袖式巨石古墳。
13	千鳥古墳	円墳		傾斜地。石材が一部露出する。
14	江名子古墳	円墳		台地端。石材が一部露出する。
15	小丸山古墳	方墳?	堅穴系 横口式	6世紀前半、板状石材による石室。 耳環・刀子・馬具など。
16	桧山横穴	横穴		1号は1928年犬塚行蔵らにより発掘。2・3号は1988年発掘し2号墳より約50体分の人骨出土。
17	七切横穴	横穴		山腹。1948年犬塚行蔵らにより発掘。7世紀
18	杉ヶ洞横穴	横穴		山腹。1960年発掘。7世紀須恵器・玉類・耳環

中世の冬頭

飛驒の中世に関する資料は極めて少なく冬頭についても同様なため詳細はつかめない。中世の飛驒全体を見ると、下記のような特殊な領地の治め方をしていた。まず、鎌倉幕府によって全国に設置したはずの守護も飛驒には設置した所見がなく守護の名が見られない。

中世飛驒国の支配体制は、戦国に至るまで「庄」だけでなく「名」の名称も見られず、郡・郷・保の名称が使用されてきた。これは莊園を設定することが少なく「郷」を単位とした公領が、多くの領地を占めていたためとみられ、地頭も郷地頭というかたちが存在していたと考えられる。

南北朝以後、国衙領としての「郷」が分割され私有化したものとして、山科家領の石浦郷、江名子郷、松橋郷、岡本郷や岡本保、山城醍醐寺領の広瀬郷、近江國城寺領の高原郷などがある。しかし、国衙領の「郷」の多くは国司領や守護領として大名化の基盤になった。³⁾

1333(元弘3)年、飛驒国の守護として岩松経家が補任されており、戦いで討死するまでの2年間は守護職をつとめている。1353年に大高重成が飛驒国守護に命じた文書があるが、この頃の守護は明らかでない。1359年、佐々木道善が守護に補任され、その後、佐々木京極高秀・高詮が守護職に就いている。⁴⁾

地頭については、1186年(文治2年)白山長滝神社の寄進状に公文掾権守藤原朝臣地頭南貞康の名があり、これが地頭の名の初見である。また、1193年、源頼朝が神樂演奏の名人で右近将監多好方に鶴岡八幡宮の神事に曲を奏した恩賞として荒城郷の地頭職を与えていた。1281(弘安4)年、大野郡宮村の飛驒・宮水無神社の鐘銘に「弘安四年辛巳九月八日、地頭朝高」と名前が記されており、左右衛門尉藤原朝高と推測される。⁴⁾

莊園は、美濃国長滝寺領として大野郡河上庄と藤原俊家伝領の白川庄だけである。この長滝寺領の河上庄は、高山市西部から清見村に至る川上川流域一帯をさし、冬頭の地が領地としておさめられていたことが文献に初めて登場する。1488(長享2)年の桐生買地帳に宮川左岸の桐生・ふいと・本母・一色なども神領買地として所有していたが、応仁の乱以後は長滝寺の河上庄に対する支配力にかけりが出てくる。³⁾

「ふいと」はのちに「冬任」と呼ばれ、その後「冬頭」に移り変わるが、中世前期の冬頭の地区については、この長滝寺の庄として存在していたことが分かる。

1521(大永元)年、三木直頼は三仏寺城に據り、長滝寺大衆の力を得て大野郡灘郷・三枝郷・大八賀郷を攻略し多賀氏をしのいで実権を握った。1558年、6代目三木自綱の時代になると、畠佐城の山田氏を滅ぼし川上・三枝郷(川上川沿いの地域)を手に入れている。

飛驒の国司は、姉小路家綱が飛驒守に任じられて以来、姉小路飛驒国司を継承した三木自綱が飛驒を治め、1585(天正13)年、金森長近に攻略されるまで続いた。

1) 岐阜県文化財保護センター 1997 「与島古墳群」

2) 高山市教育委員会 1971 「冬頭王塚発掘調査報告」

3) 平凡社 1989 「飛驒国」「高山市」「岐阜県の地名」

4) 岐阜県 1969 「荒城郷の地頭」「飛驒の国司と守護」「岐阜県史」

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

高山から国府に向うには、寿美岬を越え国府町瓜巣に通じる瓜巣街道と宮川沿いを通る道がある。瓜巣街道は、高山国府間を直線で結ぶ近道として古くから利用され、現在も同区間を通る国道41号線の近道として多くの人が県道谷高山線を利用している。この二つの街道は、小瀬山の麓を通るために冬頭城跡から真下に見ることができる。

小瀬山山頂（冬頭城跡）の標高は、約612mで麓との比高は約60mある。松倉城をはじめとして飯山城・高山城・點崎城・三寺寺城・鍋山城・三枝城などの城を一望することができるため城をたてる絶好の位置にあると言える。小瀬山の東側や西側は急斜面になっており、敵の侵入は困難である。

城郭遺構は主に北部の尾根につくられていたため、尾根に沿って5m間隔の杭を打ち、それを基準として掘削を行った。

城郭調査中に古墳や横穴が検出され、並行して調査を進めた。冬頭地区には過去に10基を越える古墳が散在していたが、現在はその姿を見ることはできず、明治21年の市町村制の施行に伴い作成された絵図においても古墳の位置は示されていなかった。

唯一、保護されてきた冬頭王塚は、昭和45年1月に高山市教育委員会により発掘調査が行われた。調査により川原石を使用して築造された竪穴式石室が2基検出され、出土遺物などから5世紀後半の円墳であると言われている。

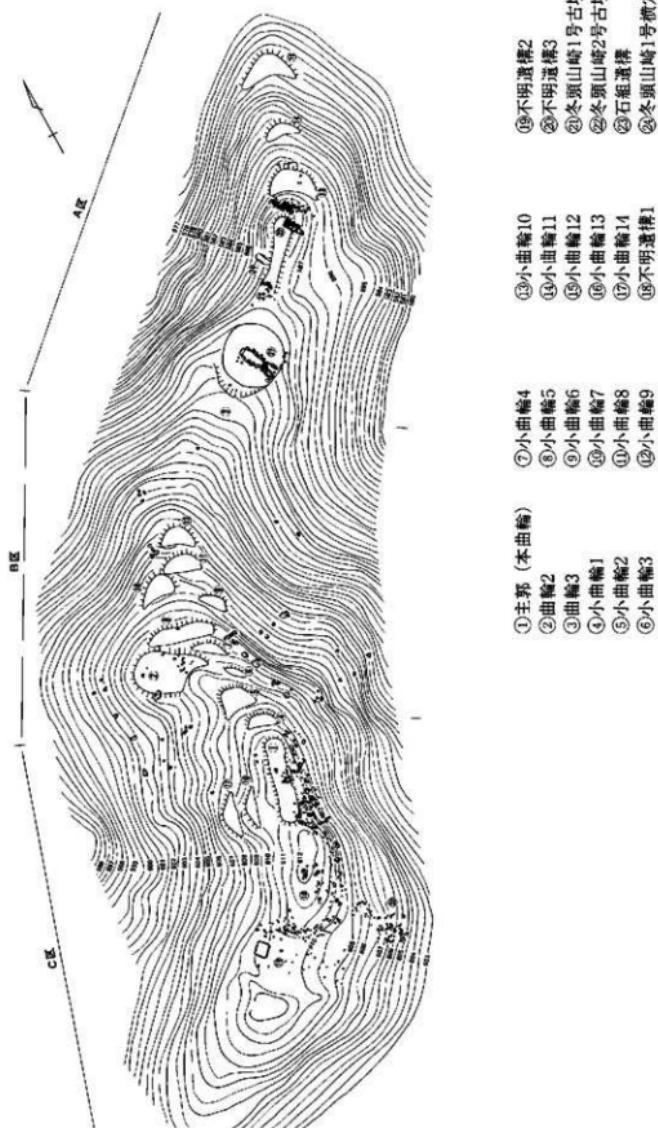
今回、調査中に検出された古代の遺構は、その冬頭王塚古墳から100m程離れた距離にあり、冬頭町を見渡す丘陵の中腹にある。検出されたのは、2基（竪穴式石室1基、横穴式石室1基）の古墳と横穴墓が1基、石組遺構である。出土遺物は61点である。

また、中世の遺構は、本曲輪・曲輪2・曲輪3・小曲輪等の削平地や切岸が確認されたが、出土遺物はなかった。

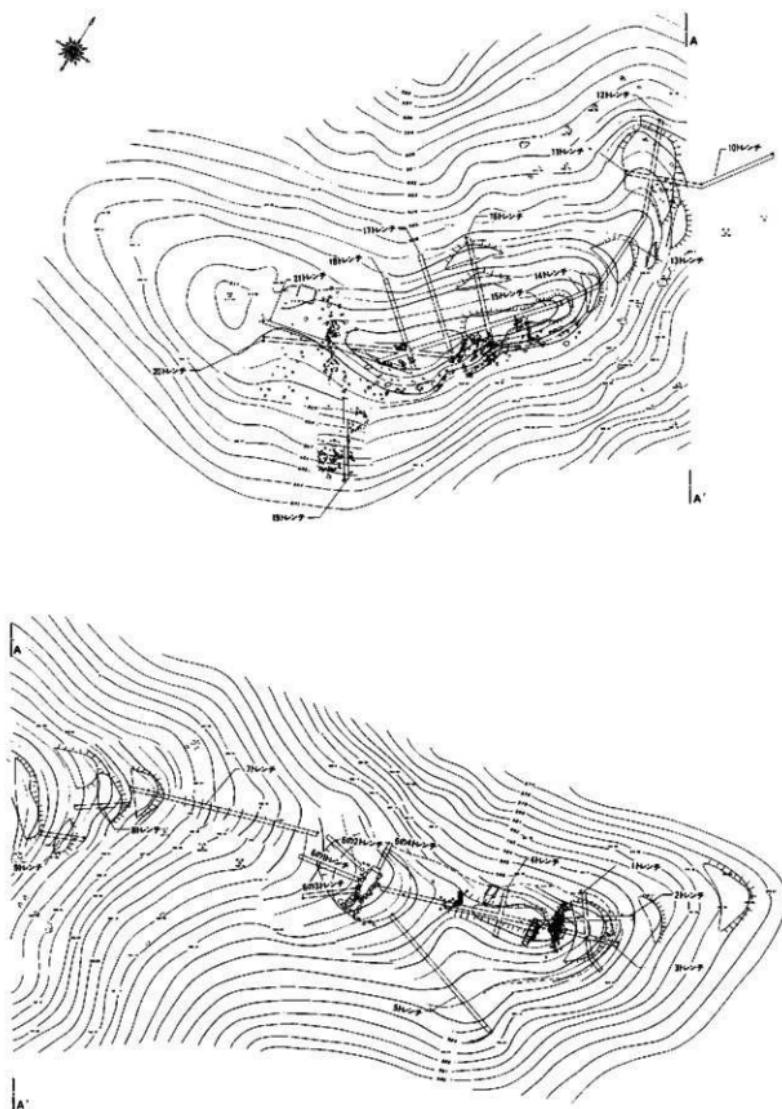


写真14 冬頭王塚古墳発掘調査の様子（小瀬山より撮影）

提供 高山市教育委員会



第4図 各調査点全体地図



第5図 トレンチ設定図

第2節 基本層序（第6～9図）

小瀬山山頂の主郭をはじめとして、尾根上に遺構の形跡がみられたため、尾根に沿って5m間隔の杭を打ち、それを基準として掘削を行った。トレンチと層位を残した珪は、A区に6ヶ所・B区に8ヶ所・C区に7ヶ所を設定した。

遺構が、尾根上のため堆積土は少なく基本的には4層に分けられていた。I層は、木の葉などの腐食した黒褐色の表土であり、II層とIII層は明褐色土である。IV層は橙色した濃飛流紋岩の地山である。古代の遺構に関わる場所では何層にも分けられている。詳しくは遺構断面図にて説明する。

第I層 黒褐色 (5Y R2/1)

表面には落ち葉が2～5cm程堆積しているが、その下は木の根がびっしりと横に広がっている。全体で約5～10cmの厚みの層になっている。粘性は少しあるが、土にしまりはない。

第II層 明褐色 (7.5Y R5/6)

明褐色土に径2mm程度の砾が混入し、層の中に細かい根が多く入り込んでいる。層の厚みは約10～30cmである。粘性が少しあるが、土にしまりはない。

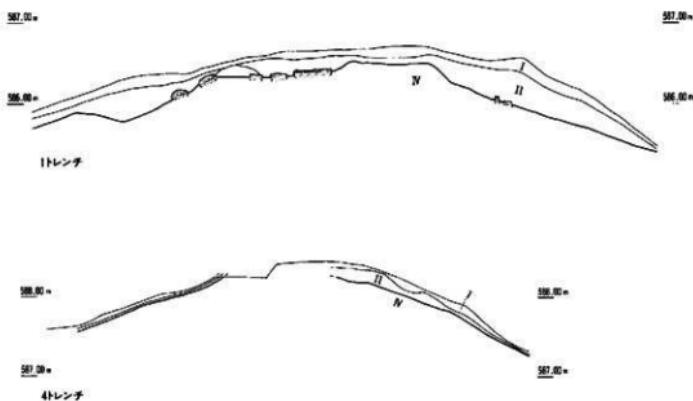
第III層 明褐色 (7.5Y R5/8)

明褐色土に径0.2～2.0mmの粗砂が混入し、細かい根が少し層の中に入る。層の厚みは約10～30cmで、粘性があり、土にしまりがある。

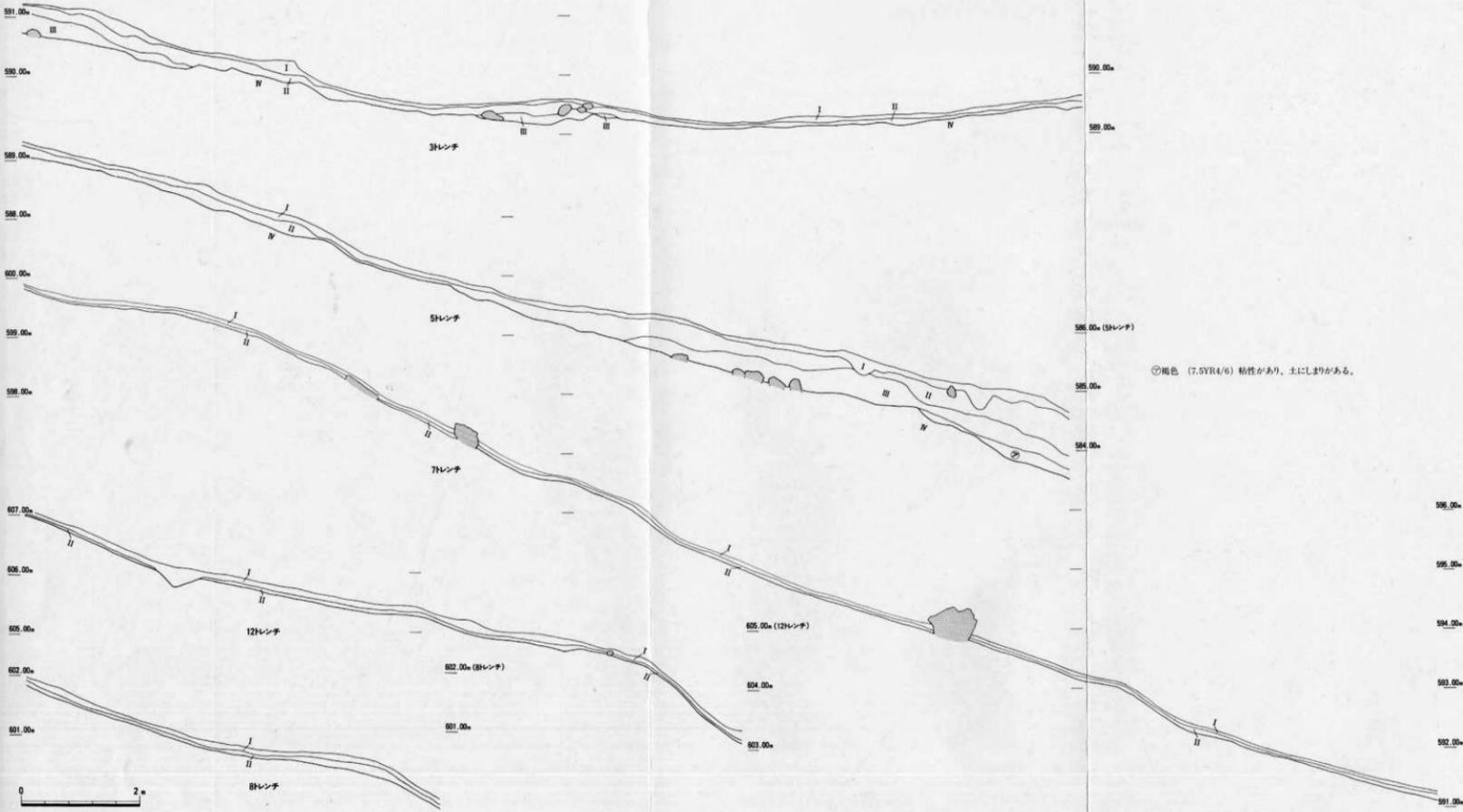
第IV層 橙色 (7.5Y R6/8)

橙色土の地山である。土はかたくしまっている。

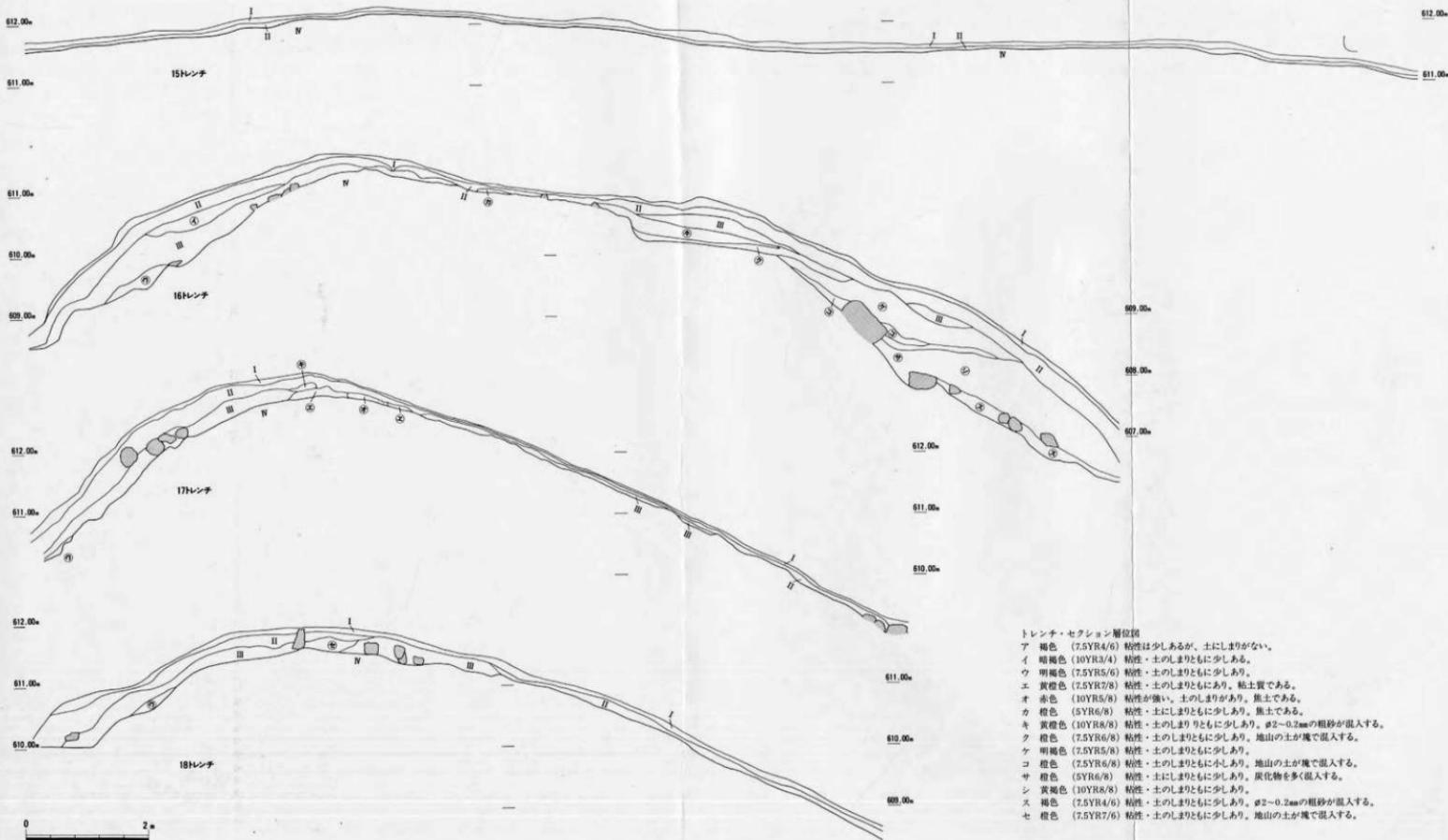
3トレンチ（試掘）の一部と2・19・20トレンチなどは、遺構断面にて記載し、それ以外のトレンチや珪状に残した土層観察面について記載する。



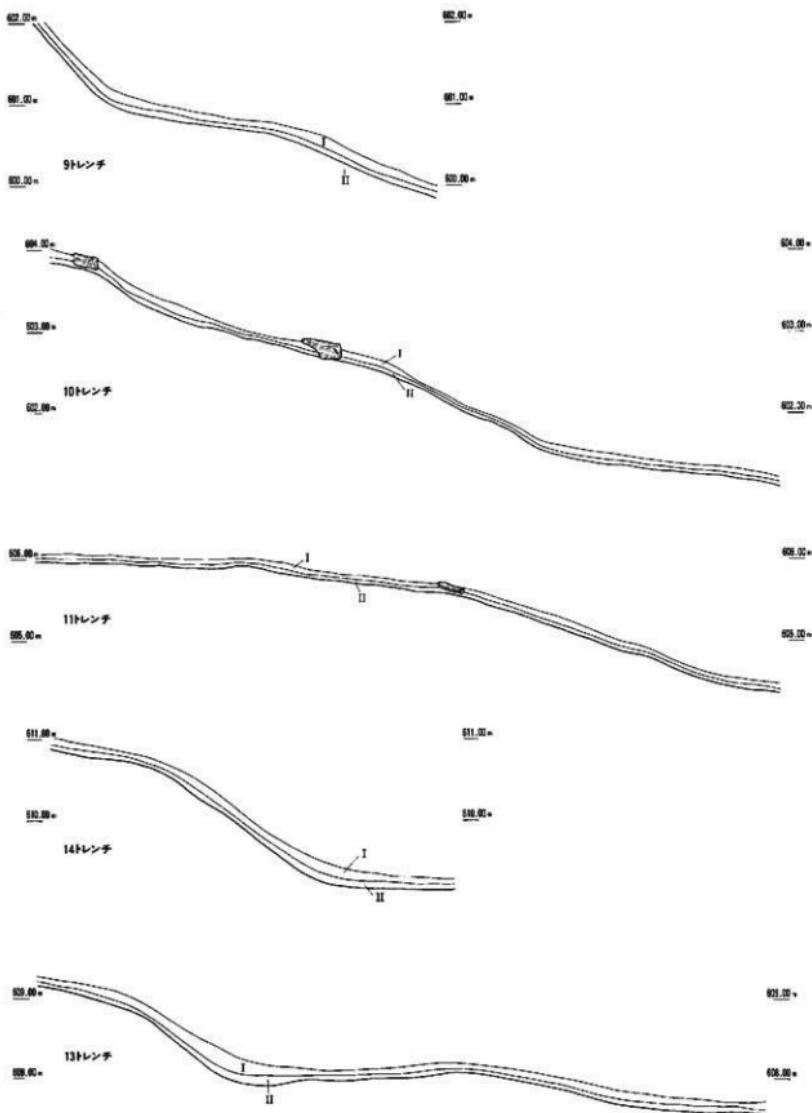
第6図 トレンチ・セクション土層図(1)



第7図 トレンチ・セクション土層図(2)



第8図 トレンチ・セクション土層図(3)



第9図 トレンチ・セクション土層図 (4)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

(1) 冬頭山崎1号古墳 (S Z-1)

調査概況

当古墳は調査を開始するまで、その存在が知られておらず、曲輪の所在する場として想定していたが、調査区を設定して伐採したところ地表がわずかに窪み、その周りに石組みが露出していた。石組みの様子から南東方向に開口する横穴式石室であると判断し、古墳と曲輪の調査を並行して行った。

露出していた石組みは、玄室両側壁のもので、1層（表土）を除去した時点で、奥壁・羨道側壁などの石材の上面を検出し、石室のおおよその輪郭をつかむことができた。天井石は認められず、付近にも存在しないことから、後世に持ち去られたものと考えられる。それが、曲輪を形成した時期なのか、盜掘時なのかは不明である。石室内は、盜掘が予想されたが、念のため土層観察用のアゼを残して掘削した。その結果、石室内に側壁に用いられたと考えられる石材が転落していたこと、玄室床面に施されたと考えられる砾床の石材が石室外にまで散乱していたこと、そして玄室床面が岩盤に至るまで攪乱を受けていることがわかり、盜掘を受けていることが明らかとなった。しかし、玄室奥壁近辺や羨道床面については盜掘を免れており、須恵器を検出し得た。また、石室の基底部から中段にかけては、保存状態が比較的良好く、石室構造を観察する上での様々な資料を提供している。

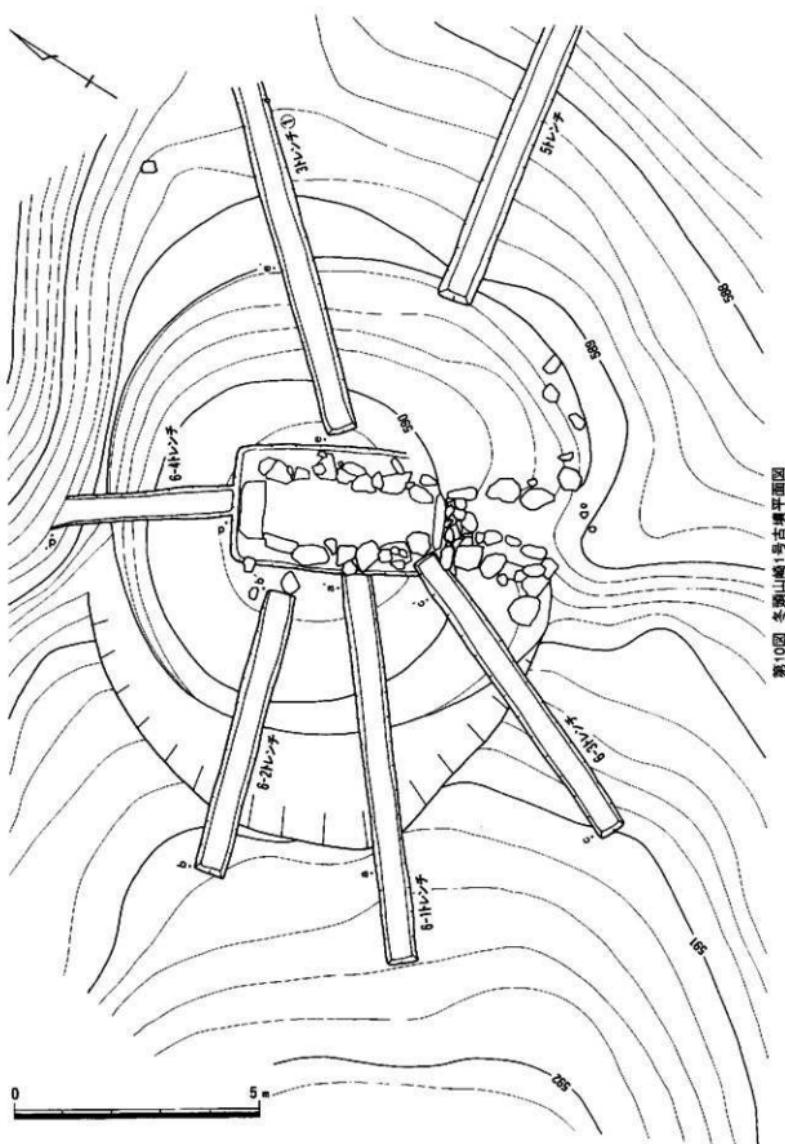
墳丘については、後世の改変と墳丘盛土の流出が甚だしいため、墳丘面検出に先立って5カ所にトレーナーを設けて、その断面観察による知見に基づいて面的な調査を進めた。その結果、後世の改変は大きく、盛土のほとんどが削平されていることが明らかとなったが、周溝と石室入り口側にのみ施された外護列石とから、墳丘の平面的な規模を明らかにすることができた。

墳丘及び外衣施設（第10・11図、図版2・5）

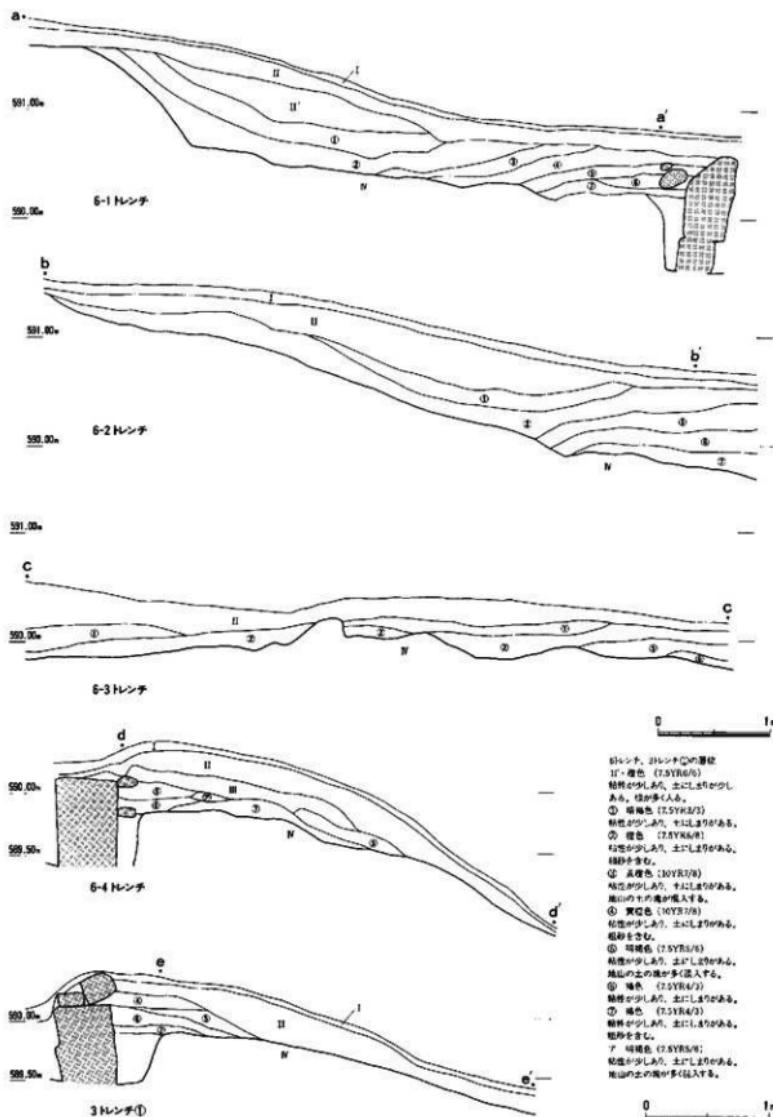
1号古墳は、高山盆地に向かって西から東に突き出した尾根上に立地し、後述する2号古墳より若干高所に位置する。墳丘は、西から東に向かって傾斜角約10度の尾根の頂部に占地する。後世の曲輪を造成する際に、墳丘の多くが削平されており、盛土として確認できたのは高さ70cm程にすぎない。残存する盛土は、周溝及び石室掘り方掘削時に排出されたものを主にしていると考えられ、5~7層に分層され、墳丘の中心に向かって高くなるように黄橙色土と褐色土を互層に積む。墳丘の範囲・周溝及び外護列石から判断した古墳の規模及び墳形は、東西径9.60m、南北径9.90mの円墳である。

周溝は、墳丘の南西側で尾根を切り通すように掘削されている。石室入り口付近では、斜面を南東に下る墓道状の窪みが認められ、周溝に接続しているものと考えられる。北側は急斜面に消失する。墳丘北東側は、2号古墳に続く尾根であるが、切り通し状に周溝は設けられていない。墳丘の基底部の高さが石室入り口床面の高さと一致しており、周溝を掘削するまでもなかったものと考えられる。

外護列石は、石室入り口から両側に向かって墳丘の端部を取り巻くように残存していた。流出した可能性もあるが、南西側周溝内や北東側の墳丘裾部に認められないことから、入り口付近にのみ施されたものと考えられる。墳丘の保護を目的としたものではなく、石室入り口を固める施設と推定され、本来の「外護列石」とは意味合いが異なる。なお、石材は、石室と同様に、濃飛流紋岩を用いる。



第10図 西尾山1号古墳平面図



第11図 1号古墳土層図

内部主体（第12・13図、図版5・6）

1号古墳の内部主体は、南南西に向かって開口する（主軸はN-17°-W）両袖式の横穴式石室であり、その規模は全長6.21m、最大幅1.35mをはかる。玄室と羨道とは、玄室部における両側壁の胴張りと床面の樋石とで玄門部を形成し、明確に区分されている。

石室築造に先立って、石室掘り方が掘削されており、その規模は東西2.00m、南北4.10m、奥壁の裏での深さ0.43mを測る。掘り方の平面形は、南南西に解放した長方形を呈する。

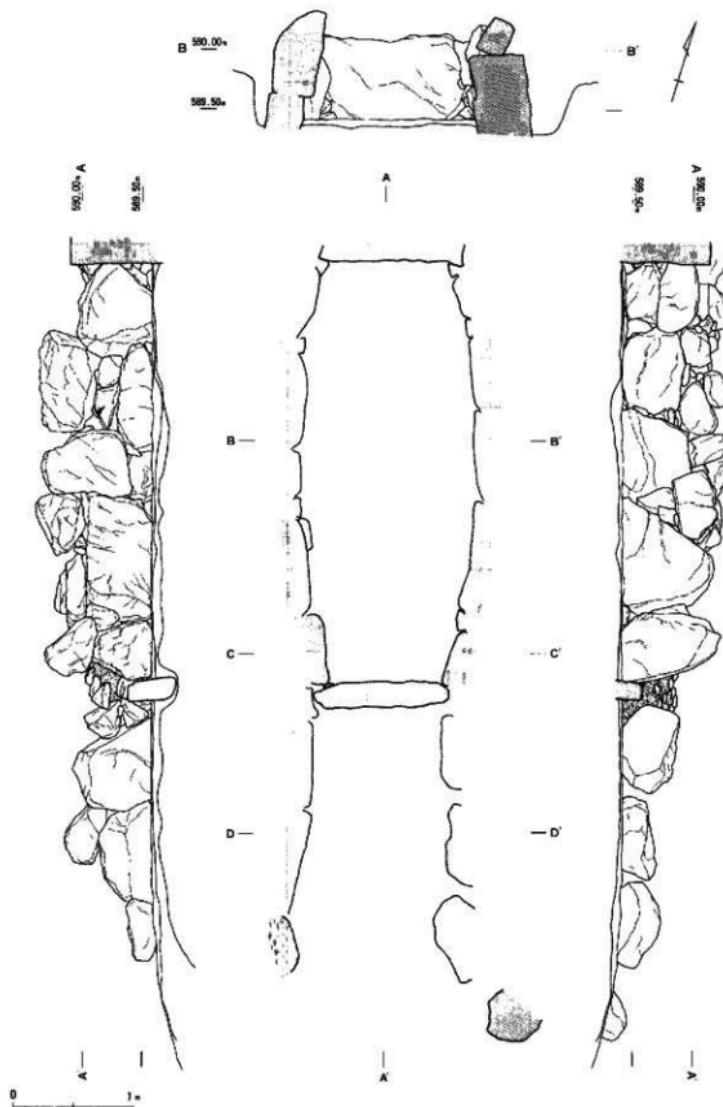
玄室は、長さ3.43m、奥壁幅1.18m、最大幅1.47m、玄門幅0.95mで、中央の膨らむ胴張り形を呈する。石室上半部が倒壊しており、天井石が認められないため玄室上部の規模は不明である。残存高は、最大で1.01mである。基本的に両側壁の壁体は、やや大型で扁平な基底部の石材を石室掘り方床面に溝を掘り込んだ中に平（ひら）面を壁面とするように立て、その上はやや小型の石材を用いて小口積みして構成する。基底部は床に対してほぼ垂直に立ち上げ、上段の小口積みでは持送りをして天井幅を狭めたと推定される。壁体と掘り方壁面とはほとんど接触するが、空隙には、卯大から拳大の川原石を含む裏込め土が詰められている。奥壁基底石は、側壁基底石と同様の方法で設定されているが、上部の積石については不明である。なお、玄門床面の樋石は、樋石としては大型の石材を用い、玄室両側壁基底石及び奥壁基底石と同様に溝を掘削した中に立てられており、また両側壁の基底石と接触して組み合うように設置されていることから、玄室基底石の設置と一連の工程で設計されたものと考えられる。

玄室床面は、攪乱が広範囲に及んでいたが、面として卯大から拳大の川原石が数点確認できる箇所があり、本来は礫床または、敷石が施されていたものと考えられる。攪乱は、床面下の整地土を掘り抜き、特に玄室中央部では床面と判断した高さより15cm程下まで達している。

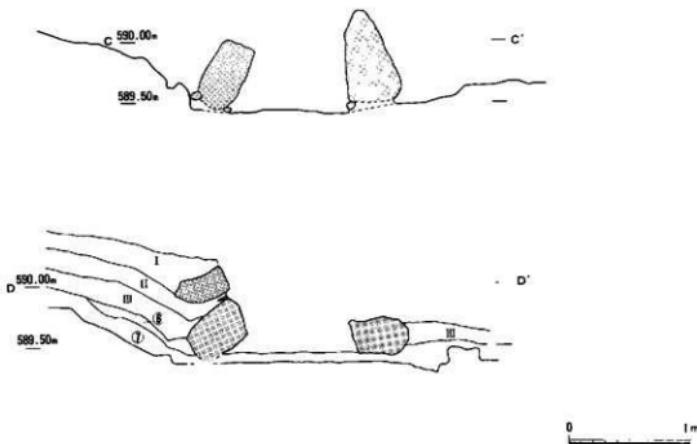
羨道は、幅90cm前後で玄門に接続し、入り口に向かってわずかに幅を広げて天井石の架構されない前庭部に変換する。羨道部と前庭部との区分は平面的には不明瞭であるが、天井石が架構された羨道部は羨道両側壁の基底石の大きさと入り口付近の墳丘の傾斜から判断して、樋石から1.54mまでの狭い範囲と考えられる。側壁は左右とも基底石を残すのみで、残存する高さは最大で80cmである。積み方は左右で異なり、右側壁（奥壁から出入口を見て右側の壁面を右側壁とする）では玄室基底石同様に扁平なやや大型の石材を平（ひら）面を壁面として立てるのに対し、左側壁では長手に置かれる。この差は石室掘り方の壁面の高さと関係し、左側壁では掘り方壁面がほとんどなく、不安定な石材を裏から安定させることができなかったためと考えられる。右側壁基底石は、玄室基底石の様に溝を掘削した中に設置する方法は採らず、掘り方底面に直接置かれている。このことは、玄室とは異なる工程で構築されたことを示唆するものと考えられる。

羨道と玄室とは、中心軸がずれている。両者が一連の工程の中で基底石を設置したのであれば、このようなずれは生じない。上記の基底石設置方法の違いからも、両者は同一工程ではなく、玄室基底石及び樋石を設置した後に、羨道基底石を配石したものと考えられる。玄室両側壁に接続すべき羨道両側壁に空間が生じ、小型の詰め石状の石材で充填していることも、その結果と考えられる。

羨道床面は、掘り方底面から10cmの厚さに整地土が敷かれる。さらに、樋石に接して80cmの範囲に人頭大の川原石が隙間なく詰め込まれて床面を樋石の上面近くまで高くする。羨道から玄室へは樋石を段として、1段降りる形となり、堅穴系横口式石室の段構造に近いものと言える。しかし、発達した



第12図 冬頭山崎1号古墳石室



第13図 1号古墳石室断面図

羨道部及び前庭部を有することから、その範疇には含めがたく、竪穴系横口式石室の変容した形態の横穴式石室として捉えておきたい。

閉塞石は、羨道部の人頭大川原石上で行われたと考えられ、拳大の石材が残存していた。閉塞石の状況からは、追葬の回数その他の情報は得られなかった。

前庭部は、入り口からの長さ約70cmの範囲で、入り口側をわずかに開く形状を呈する。床面は入り口に向かって下り、さらに石室外では急勾配となって下って、おそらく墓道に接続するものと考えられる。急勾配となった前庭部前面には、3基の柱穴が検出され、前庭部祭祀に伴うものである可能性もある。

排水溝は認められなかったが、玄室基底石及び框石下の溝と框石に接して羨道の床を形成する人頭大の川原石がその機能を果たした可能性が高い。

遺物出土状況（第14図、図版6）

1号古墳から出土した遺物は、以下の通りである。

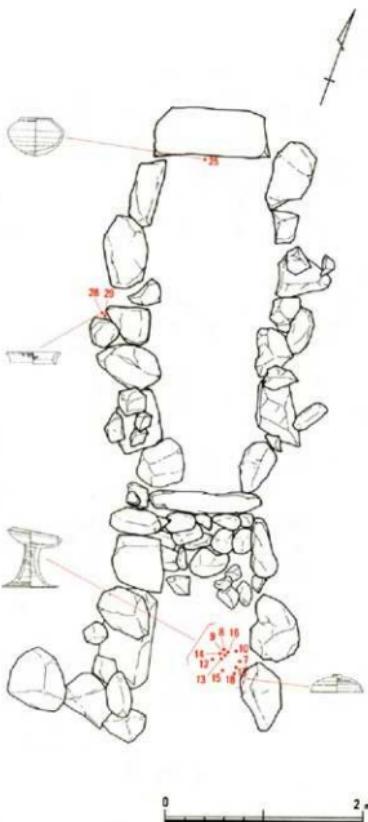
- ・須恵器有蓋高坏及び蓋 1点
- ・須恵器短頸壺 1点
- ・須恵器高坏脚部片 3片（同一個体）
- ・土師器壺口縁部片 2片（同一個体）

1号古墳は、前述したように広範囲に盗掘を受けており、それを免れた遺物は少ない。玄室は、特に盗掘が激しく、床面下まで達しており、わずかに奥壁に接して須恵器短頸壺が1点検出されたにすぎない。玄室床面がかろうじて残存した部分で、床面には直接して出土した。

羨道及び前庭部は、玄室ほどの盗掘は及ばず、前庭部から有蓋高坏が壺部・蓋部・脚部の3つの部位にわかれて出土した。壺部は前庭部床面に伏せた状態で出土し、脚部と蓋部はそれより10cmほど上部で疊に混ざって出土しており、攪乱によって元位置から移動しているものと考えられる。しかし、壺部が床面に接していることから、前庭部に所蔵する遺物といえ、前庭部祭祀に関わる可能性がある。

土師器壺口縁部片は、玄室右側壁裏の裏込め土内から出土したもので、石室築造時に混入したものと考えられる。それを伴う祭祀が行われた痕跡は認められない。

盗掘が激しく、多数の遺物が持ち去られたと考えられ、残された数少ない遺物の年代差から追葬の有無は判断できない。



第14図 1号古墳遺物出土状況

出土遺物

須恵器短頸壺（第15図、図版16）

玄室内から出土した唯一の遺物である。口縁部径8.0cm、体部最大径14.2cm、器高9.5cmを測る。口縁部は、焼成時の熱による変形が認められるが、ほぼ完形である。底部は内面中央部を指頭によるオサエによってやや窪ませ、外面は丸底を呈し肩部の下まで続く幅1cm前後の回転ヘラケズリ調整を明瞭に残す。体部は内傾しながら立ち上がり、肩部で内方に屈折させ、内傾して頸部に至る。口縁部は強く内傾して立ち上がった後、端部を内面でわずかに外反させ丸くおさめる。体部内面及び体部外面の肩部から上は、丁寧な回転ナデ調整が施される。回転ヘラケズリから判断されるロクロの回転方向は、

右である。

須恵器有蓋高坏（第15図、図版16）

口縁部径12.8cm、器高4.5cmで、天井部に径2.6cmのつまみをもつ。焼成時の被熱で口縁部に歪みとひび割れを生じている。欠損部分はなく、完形である。

天井部はなだらかに外傾してくれり、わずかな稜とその直下に沈線を巡らせて口縁部と区分される。口縁部は、稜でわずかに内方に屈折して外傾し、端部は内面で外傾させて尖らせる。

天井部中央のつまみは、中央を窪ませたもので、端部は丸くおさめる。

天井部外面は中段まで回転ヘラケズリ調整され、口縁部及び内面は回転ナデ調整である。回転ヘラケズリから判断されるロクロの回転方向は、右である。

須恵器有蓋高坏（第15図、図版16）

口縁部径12.5cm、脚裾部径14.4cm、器高15.2cmの長脚2段透かしを有する有蓋高坏である。蓋と同様、焼成時の歪みを脚部と受け部の一部に生じる。欠損部分はなく、完形である。

坏部は、体部が緩やかに内弯して立ち上がり、受け部下で強く内弯する。受け部は外反して端部を丸くおさめる。口縁部は、短く内傾して立ち上がり端部を外反させて尖らせる。内外面ともに回転ナデ調整で、回転ヘラケズリは認められない。

脚部は、円筒形の基部から裾部に向かってハの字状に開き、端部は面を形成する。内外面ともに、回転ナデ調整を施す。

脚部透孔は、2方向に上下2段で長方形に穿たれ、外面には上下の透孔の間に沈線が2条巡る。なお、脚部内面には重ね焼きの付着物を残す。

回転ナデから判断されるロクロの回転方向は、右である。

須恵器高坏脚部片

高坏基部の破片で、3片に分かれていたが同一個体である。小破片であるため図示しなかった。基部の復元径5.8cmで、外面に自然釉が付着する。透孔は認められない。

土師器壺（第15図、図版16）

口縁部の破片で、全周の17%が残存している。復元径14.3cm、浅黄橙色（10YR8/4）を呈し、砂粒を多く含む胎土である。口縁部は短く外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面ともにハケ調整の後回転ナデ調整を施す。煤の付着は、表面の風化があり、認められない。

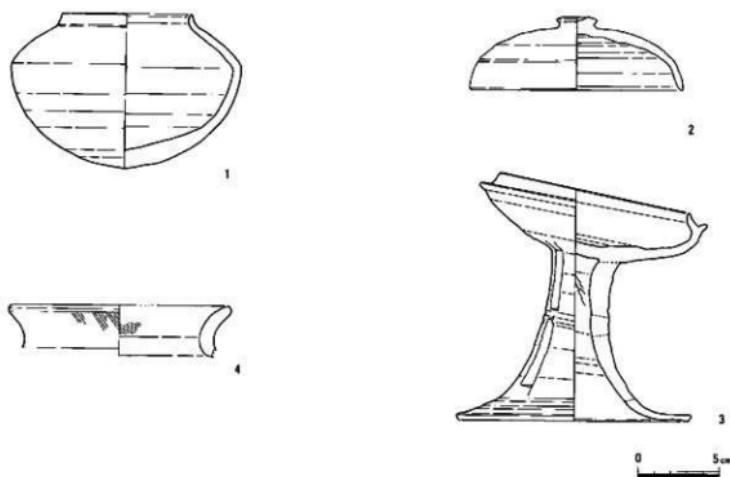
小結

冬頭山崎1号古墳は、尾根上に立地し、横穴式石室を内部主体とする円墳で、石室形態は竪穴系横口式石室の変容したものを採用しており、飛騨地域ではこれまでに知られていなかった特殊な事例といえる。玄室基底石の胴張り形を呈する平積みと框石の存在が特徴的であり、その系譜を考える上で指標となりうるものと思われる。

出土した遺物の年代は、有蓋高坏蓋の棲が明瞭に巡ること、長脚2段透かしであることから判断して、陶邑窯編年¹⁾ のT K43からT K209段階のものに相当し、6世紀末から7世紀初頭にかけてのものと考えられる。

古墳の築造年代は、石室の用材が大型化していること、飛驥地域に横穴式石室の導入期に見られる板状石材を用いていないこと、玄室と羨道とが明瞭に区分されていることから判断して、須恵器の年代と大差なく、6世紀末頃と考えたい。

- 1) 田辺昭三 1981『須恵器大成』による。



第15図 1号古墳出土遺物

(2) 冬頭山崎2号古墳 (S Z-3)

調査概況

1号古墳同様、調査開始後に検出されたものである。城郭遺構を検出するため、A区にトレンチ2を設定したところ、I層（表土）を除去した時点で尾根端部に向かって下る斜面から人頭大の川原石を多数確認したため、城郭遺構と古墳の両面を考えて調査を進めた。その後、川原石の目地から須恵器片が出土し、斜面に面的に広がる川原石は葺石の可能性が高いこと、さらに立地が古墳のそれに適するものであることから、古墳と判断し、調査方法を切り替えた。

墳頂部と考えた部分は、後世の削平を受けており、現地表直下で岩盤が露出する箇所が流上の深く入り込んだ箇所を取り囲むようにして検出され、主体部の掘り方と判断した。主体部掘り方内には、櫛の大木が根を深くはり、調査を困難なものにし運らせた。

主体部は、岩盤をコの字状に南東方向に開口した長方形に掘り込んだ掘り方内に、長辺の片側のみ石材を積み上げたものであることがわかり、主体部の性格を判断する上で苦慮した。長辺の片側に積まれた整体は、中央部の残存状態が最も良好で床面から最大55cmほどを検出したが、北西端は後世の擾乱土坑により倒壊し、南東端は墳丘の流出に伴って基底石を残し流出していた。

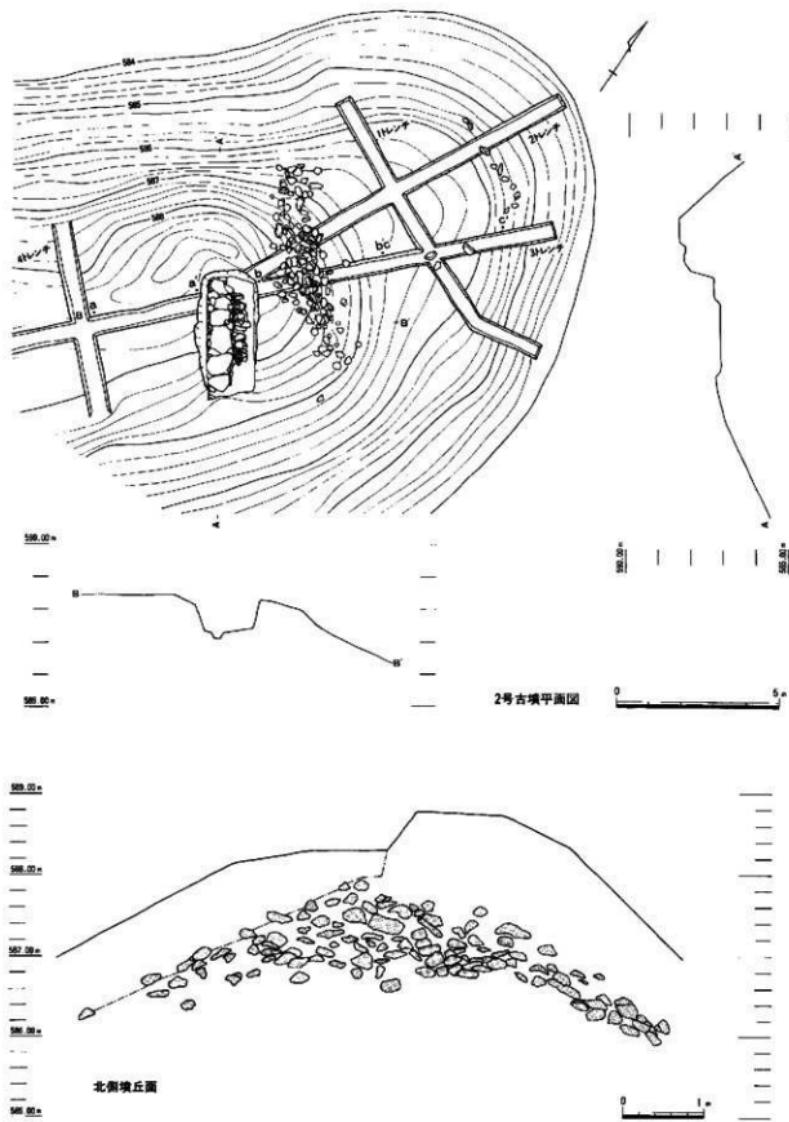
後世の擾乱はごく一部であり、盗掘を目的としたものではなかったため、床面とその上に配置された遺物は幸いなことに元位置を保っていた。

墳丘及び外表施設（第16・17図、図版2・7）

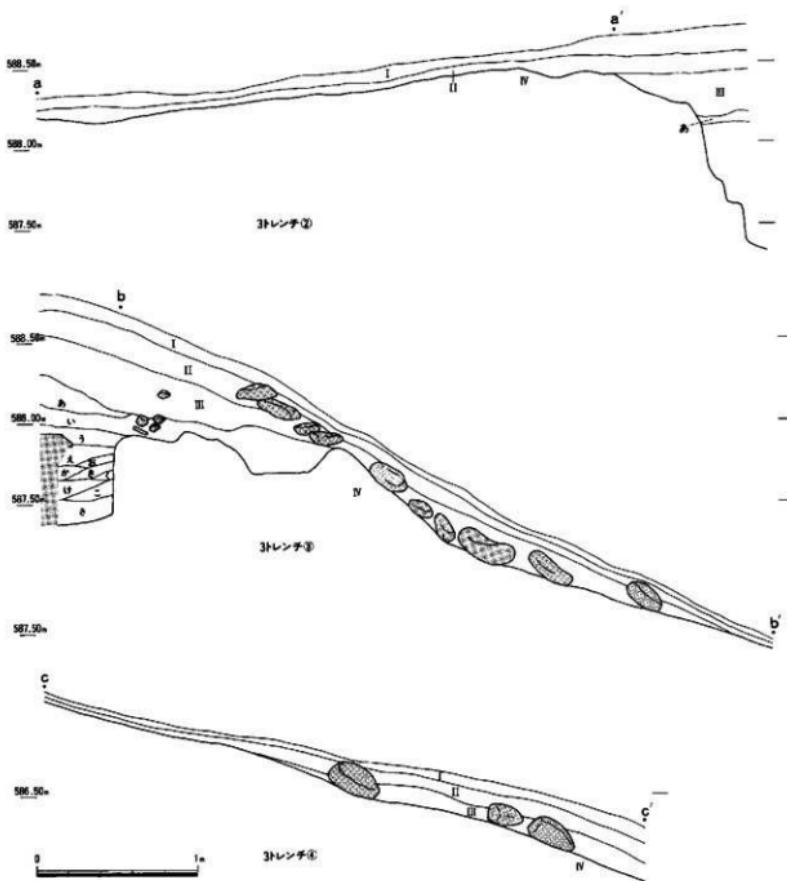
2号古墳は、1号古墳から東に向かって突き出した尾根の頂部先端部に占地し、その眺望は麓の平地部を広範囲に見おろすことができ良好である。

削平や崩れなどのため、当時の墳丘の形は完全には残されていないが⁶、北東側に残存する墳丘裾部から復元すると、直径20m前後の円墳と推定されるが、正円ではなかった可能性もある。墳丘の正面と考えられる北東側には、最大幅3.4m、長さ7mの半月状のテラスが認められ、その上下の墳丘面には、川原石を用いた葺石が施される。葺石は墳丘を全周せず、この半月状のテラスの上下のみで検出されているが、本来は正面のテラスと南東側及び北東側の墳丘面にも及んだものと考えられる。しかし、テラスは半月状に完結しており、墳丘を巡ることがないことから、テラスを一方にのみ張り出した造り出し付き円墳とみることもできるが、通常の方形造り出しとは大きく異なる。テラスから見て裏側にあたる1号古墳から続く尾根は、切り通し状に周溝などを掘削することはなく、墓域の境界は不明瞭である。

葺石は、削り出した岩盤の斜面上に直接積み上げられており、その目地には黄褐色粘質シルトが入る。葺石の大きさは長辺20~30cmのものが大半で、その残存数はテラス上段で137個、下段で19個の総数156個を数える。石材の供給地は、この中山丘陵近辺を流れる3つの河川の内、川上川特有の花崗岩が含まれることから、川上川である可能性が最も高い。（第21図）



第16図 冬山山崎2号古墳平面図・北側墳丘面



2号古墳層断面図

- あ 明褐色 (10YR6/8) 粘性・土のしまりともに少しある。
 い 棕色 (7.5YH6/6) 粘性・土のしまりともに少しある。地盤を掘削したため10cmの壁が深入する。
 う にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘性・土のしまりともに少しある。暗褐色土が少し混じる。
 え 貴褐色 (10YR7/8) 粘性・土のしまりともに少しある。φ2cmの壁が深入する。
 お 明褐色 (7.5YR5/6) 粘性・土のしまりともに少しある。φ1cmの壁が多く深入する。
 か 枯色 (7.5YR6/6) 粘性・土のしまりともに少しある。壁が僅かに入る。
 き 黄褐色 (10YR7/8) 粘性・土のしまりともに少しある。φ3cmの壁が多く深入する。
 く 單褐色 (7.5YR3/3) 壁はなく、粘性・土のしまりともにある。
 け 明褐色 (7.5YR5/6) 粘性・土のしまりともに少しある。φ2~0.2mmの粗砂が混入する。
 こ 明褐色 (7.5YR5/8) 粘性・土のしまりともに少しある。暗褐色土が混じる。
 さ 明褐色 (7.5YR5/8) 粘性・土のしまりともに少しある。φ5cmの地山の壁が深入する。

第17図 2号古墳土層図

内部主体（第18・19図、図版7）

2号古墳の内部主体は、幅1.93m、長さ4.13mの漫飛流紋岩の岩盤を掘削した長方形の掘り方内に、北東側のみ板状石材を積み上げて壁面を形成する他は、素掘りの壁面を利用した極めて特殊な堅穴式石槨と考えられる。南東側の小口は、斜面の崩落によって失われているが、後述する敷石がほぼ本来の姿で残存し、その範囲から復元すると、石槨は長さ3.65m、幅0.81mの長方形を呈する小型のものである。蓋石が残存せず高さについては明確ではないが、南西側の素掘りの壁面上に水平に岩盤を削り取ったテラス状の面がわずかに認められ、この面を利用して北東側の石材を積み上げた壁体に蓋石を架構したものと推定され、復元高0.85mとなる。

北東側の石材による壁体は、東北隅角を後世の擾乱土坑によって崩され、南東部は斜面崩落によって基底石のみを残して流出している。基底石は、長方形の掘り方の底面をほぼ2分する位置に壁面を形成するように配置される。壁体の下段の4~5段は漫飛流紋岩の板状石材を長手積みし、上段の3~4段は主として青石に用いられた石材と同様の川原石を用いて小口積みする。持送りは認められず、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁体と掘り方壁面との間は、黄褐色・明褐色・橙色・暗褐色の土を薄く8~9回に分けて敷きかためており、石材による控え積みは認められない。

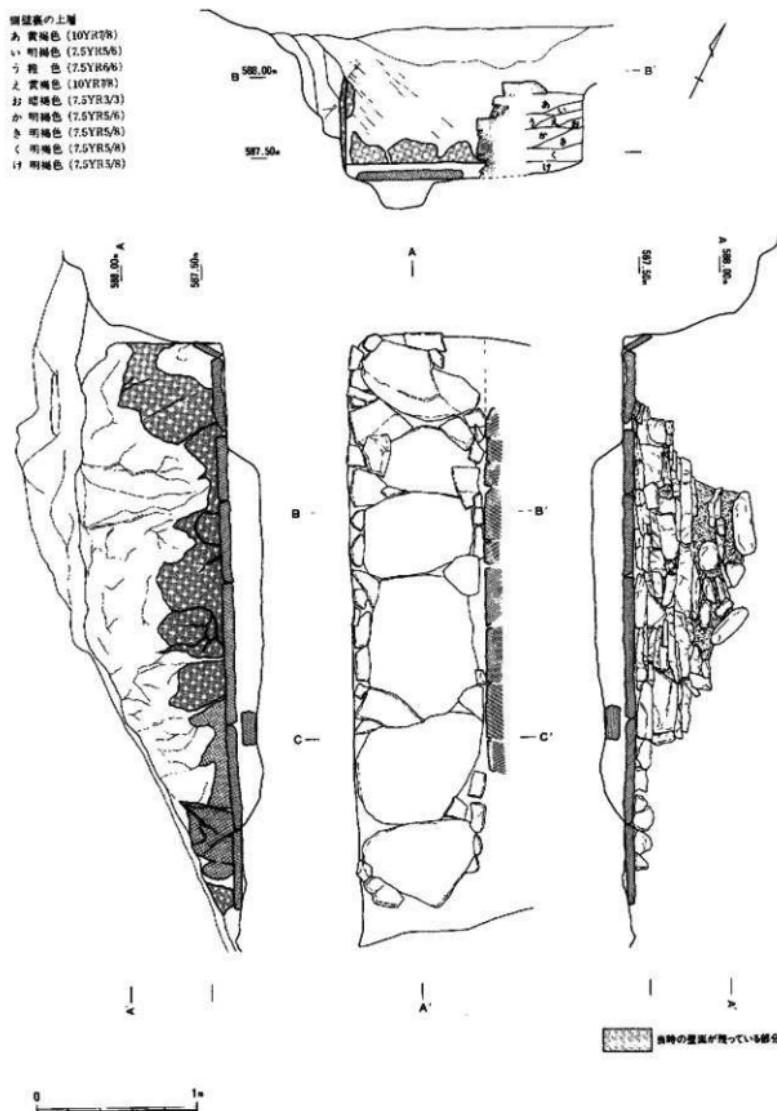
素掘りの北西側小口面及び南西側側面は、壁面の上半が風化によって石槨内に崩落しているが、下半は、垂直に削り出された面を残す。そこには幅約4cmの工具痕が認められる（第20図、写真15）。

床面は、厚さ3~5cm、1辺50~70cmの大型で扁平の板状石材を6枚敷き、その目地を小型の板状石材で充填して床面全面を敷石でほぼ水平に覆う。棺台などの施設は認められず、何らかで覆われた遺体を直接この敷石上に納めたものと考えられる。敷石上には、全面に薄く赤色顔料が広がり、棺材に塗布されたものであろうか。

調査途上では、全面が石材によって囲まれた通常の堅穴式石槨の2壁が倒壊したものと考えたが、床面の敷石は北東側の石材による壁体基底石・北西側の素掘り小口壁・南西側素掘り壁基底面に接するよう敷かれており、敷石と壁面との間に壁体を形成しうる空間が存在しないことから、素掘り部分をそのまま利用した壁体であると判断するに至った。

この6枚の大型敷石の内、中央の4枚の下には岩盤を掘り込んだ溝が掘削されている。長さ2.35m、幅0.34m、深さ13~20cmで、石槨のほぼ中央を主軸に沿うように設けられたもので、石槨外部へは統かずして内部で完結する。敷石をはずした時点での溝内は空洞になっており、人頭大の石材が1個入り込んでいた。石槧底部に溝を有する類例は極めて少なく、石槧内に入り込んだ水分を一時的に床下に流し込んで主体部を保護する、一種の排水施設と考えられる。

なお、南東側小口面についてはまったく不明であるが、岩盤が巡らないことから判断して、北東側と同様の石材による壁面を構成していた可能性が高い。



第18図 2号古墳石標

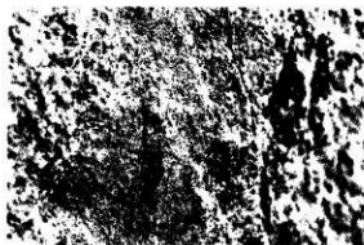
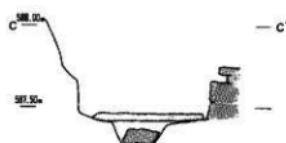
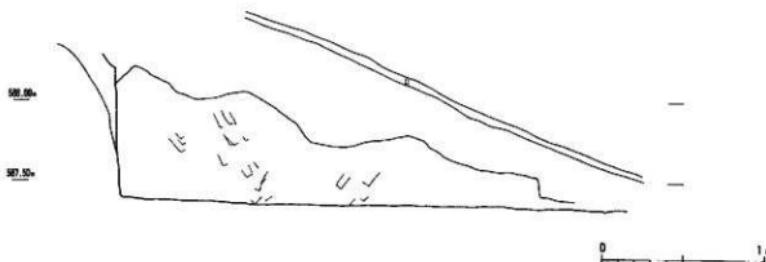


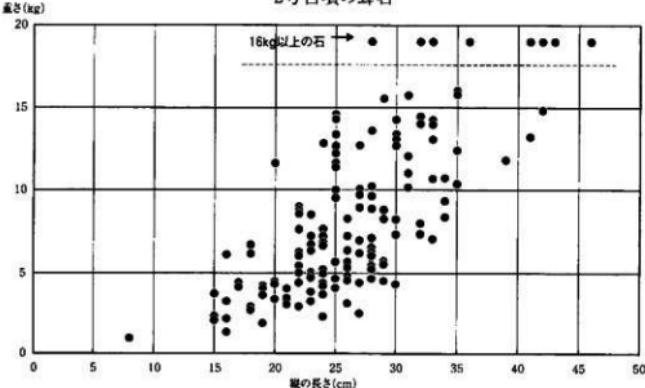
写真15 2号古墳の壁面

第19図 2号古墳石室断面図



第20図 2号古墳表面削痕

2号古墳の葺石



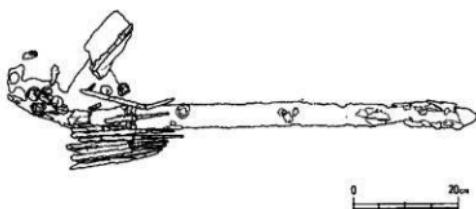
第21図 2号古墳の葺石

遺物出土状況（第22・23図、図版8）

2号古墳主体部から出土した

遺物は、以下の通りである。

・鉄剣	1口
・半球状金銅製品	6点
・漆塗りされた弓の残欠	1点
・小玉	1点
・鉄錐	14本
・須恵器片	6片



第22図 2号古墳 出土遺物

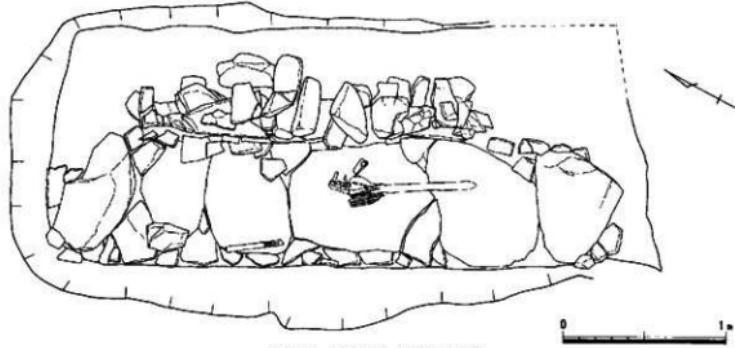
これらの内、6片の須恵器片は、石槨北東隅の攪乱土坑内・及び石槨内部に流入した埋土内から出土しており、明らかに混入品である。その内の1点は、後述する石組遺構（S Z-2）から出土した駆23と、同一個体であり、また、他の須恵器片2点も同じく石組遺構から出土した広口壺と同一個体である。従って、石槨内への須恵器の埋納は、認められない。

須恵器以外の上記遺物は、床面に密着する様にして検出され、埋葬当時の副葬品配列を考える上で貴重な資料といえる。

鉄剣は、茎の周辺に半球状金銅製品を伴い、また関付近を覆うようにして鉄錐13本が同一方向に切先を向けて束になって検出された。位置関係から判断して、半球状金銅製品は鉄剣の刃装具の一部と推定され、鉄錐は胡録に入れられた状態をとどめるものである。また、鉄剣は石槨の主軸に沿って切先を南東に向いていることから、埋葬された遺体の頭位は北西であると推定される。

弓は、北西側素掘り壁面基底部に沿って検出された。弓本体の木質は朽ちて遺存しないが、弓幹を糸状の繊維で巻かれた上に漆を塗布したもので、敷石から数mm上から出土した。前述した頭位の推定が的確ならば、弓は主体者の右脇に副えられたものとすることができる。

石槨内は、埋葬面積が狭く、一体分の埋葬と考えられ、また副葬品の配列に「かたづけ」の形跡が認められないことから、追葬は認められない。そのことからも、当内部主体は横穴系の埋葬施設ではなく、竪穴式石槨の一種といえよう。



第23図 2号古墳 遺物出土状況

出土遺物

鉄剣（第24図、図版18）

茎の先端及び刃部の一部を腐食によって欠く他は、残存状態は良好である。残存する全長77.0cm、刃部長64.5cm、刃部幅3.8~4.0cm、茎の残存長12.5cmであり、大型の鉄剣である。刃部の断面形は、鍔や木質の付着のため不明瞭であるが、最大の厚さ0.6cmのレンズ状を呈するものと推定される。刃部の両面には鞘の木質が遺存し、針葉樹を用いたものである。¹⁵ 鍔は、刃部から急角度に切り込まれた両側で、鹿角形の把縁が幅1.7cmで巡る。把縁は、腐食が激しく、表面の文様などは確認できない。茎には、約5cmの間隔をおいて2カ所に径0.5cmと径0.6cmの目釘孔を設ける。釘本体は認められなかった。茎表面には木質が残り、鞘とは異なりカエデ属（広葉樹）を用いたものである。

半球状金銅製品（第24図、図版17）

半球状を呈した薄い銅板に鍍金を施したもので、6点が確認され、前述したように出土状態から鉄剣の刀装具と推定される。6点の内1点のみは、把から東へ15cmほど離れていたが、他の5点は把尻近辺に列をなして検出された。把頭から把縁に弓形に渡される付属具を飾るものと推定される。

平面形は、わずかに梢円形を呈し、長径2.7cm、短径2.4cm、高さ1.2cmを測る。長軸方向の端部に2カ所ずつ穿孔があり、革など有機質で製作された弓形付属具に織維質のもので着装するためのものと考えられる。しかし、弓形付属具へは直接着装されたのではなく、半球状金銅製品の底面に接して1.9cm×2.5cmの水銀朱が付着した広葉樹製の台座が確認されており、台座を介して接続されたものと理解される。

以上から判断される鉄剣は、鞘の装飾は不明であるが、把をサーベル状にし、金銅製の半球を弓形の上に6個連ねたものと推定され、加飾の甚だしい鉄剣といえよう。

漆塗りされた弓の残欠（第24図、図版19）

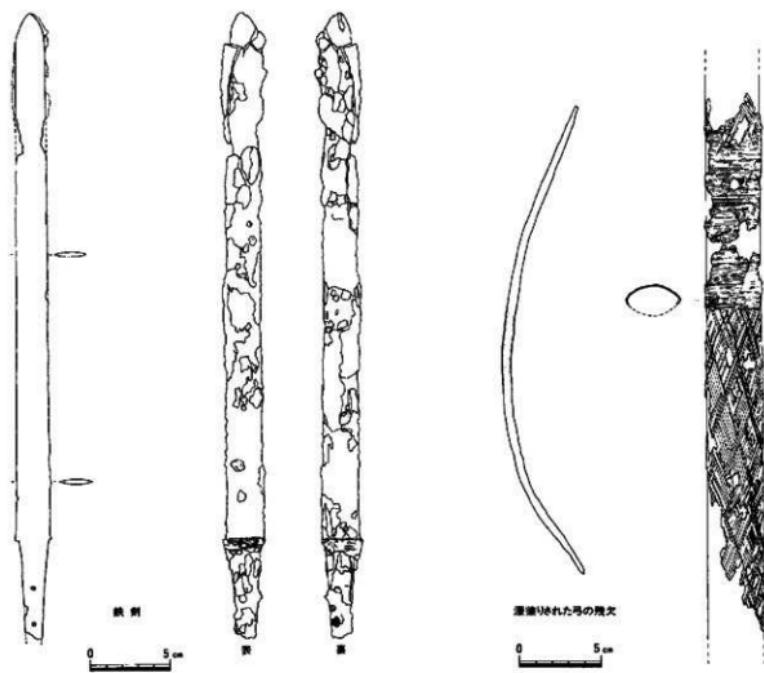
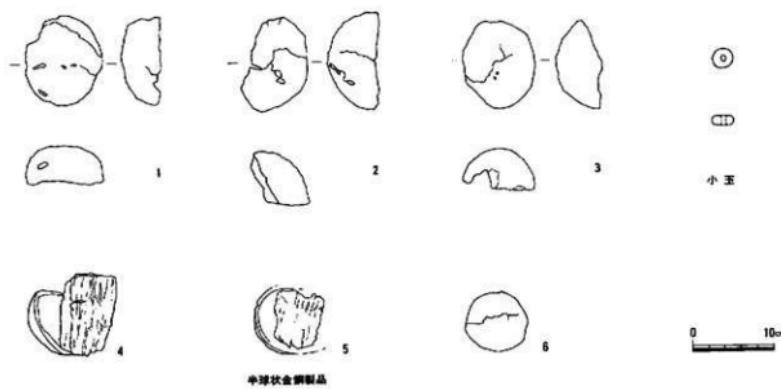
北西側の側壁から1.1m、南西側の側壁から0.1m離れた位置より漆塗りされた弓の一部が出上した。これは、弓本体ではなく、弓幹に糸状の繊維を巻き付け漆塗りを施した、その漆の部分である。その弓自体は腐朽してしまったため棒槌などを確認できないが、残存していたのは矢摺の部分で幅3.3cm、長さ33.3cmが検出された。

出土状況は縁に丸みを持ち、わずかにレンズ状を呈していたが、弓の本来の断面なのか丸木弓が上圧により変形したのか定かでない。

矢幹には斜めの格子状に繊維が巻かれており矢摺の部分にはさらにひる巻が施されている。ひる巻の部分は、11.0cmを測り格子状に巻かれたあとその上から横に巻かれている。¹⁶ 弓の出土はなく弓幹を加工して作り出されていたと思われる。弓の全長は、200cm程の長弓と推測される。

小玉（第24図、図版19）

小玉は、敷石の下の溝の土より1点だけ出土した。出土した小玉は径4.4mm、孔1.2mm、厚み1.8mm、石質は滑石である。



第24図 2号古墳 出土遺物 (1)

鉄鎌（第25図、図版20・21）

出土した鉄鎌は13本である。鉄剣の上に鉄鎌12本がまとめて出土した。また、その位置より南西側に40cm程離れた場所よりU字状をした鉄鎌と見られる鉄器が1点出土した。鉄鎌12本のうち10本の鉄鎌は、鎌身先端部を揃え幅10cm程の間に重なっており、胡籠に入っていたものと思われる。鉄鎌は、鉄剣のやや南西側に平行にならび、鎌身先端部を鉄剣の把尻に合わせるように北西部に向いていた。また、残りの2本も、10本の鉄鎌の北東側に10cm程離れて出土した。

鉄鎌の多くが茎の先端部を破損しているが、全長は19cm前後と思われる。鉄鎌のすべてが関をもつ片刃であり、その多くが2.0~3.0cmの鎌身である。また、頭部は8cm前後の長頸鎌である。^{アーチ}茎部に近い茎部（口巻）には、サクラの樹皮が巻かれており、矢柄は竹が残存していた。

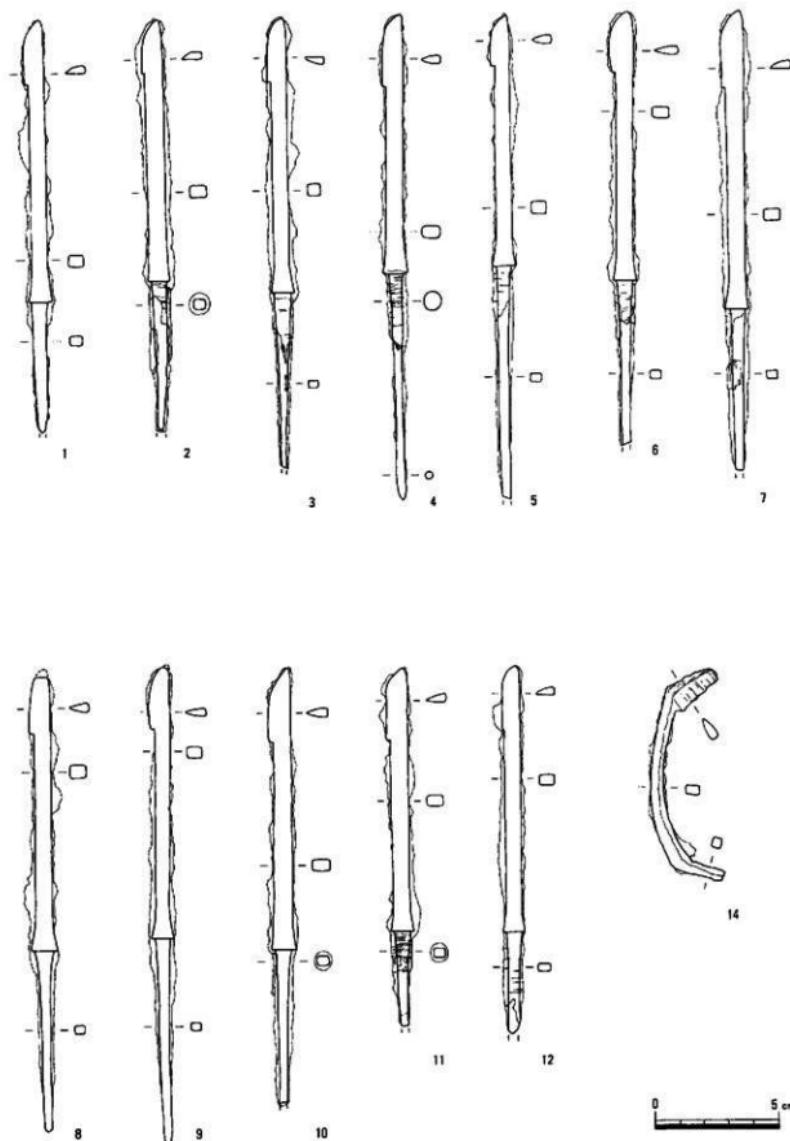
第3表 遺物観察表(1)

番号	全長	鎌身部		頭部		形態	刃部	備考
		長さ	幅	長さ	幅			
1	(16.9)	2.6	0.85	8.9	1.1	長頸鎌	片刃	茎部先端が欠損
2	(17.0)	3.4	0.85	8.5	1.1	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
3	(18.4)	(2.9)	0.80	8.6	1.0	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
4	(20.0)	3.1	0.85	7.6	1.1	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
5	(19.3)	2.0	0.80	8.1	1.0	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
6	(17.0)	2.4	0.80	8.4	1.1	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
7	(18.1)	3.2	0.95	8.9	1.0	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
8	(18.2)	(1.1)	0.90	8.8	1.1	長頸鎌	片刃	鎌身先端部欠損
9	(19.7)	2.4	1.00	8.5	1.0	長頸鎌	片刃	頭部欠損
10	17.8	2.9	1.00	8.4	1.1	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
11	18.4	2.6	0.85	7.7	1.0	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
12	(14.6)	3.0	0.90	8.2	1.0	長頸鎌	片刃	サクラの樹皮が残存
13	(11.6)	(2.1)	1.10	7.0	1.0	長頸鎌	片刃	土中に残存
14	(11.1)	(2.1)	0.90	8.7	1.0	長頸鎌	片刃	鎌身先端部欠損

須恵器片（第26図、図版16）

石榔内で出土した須恵器片は、先述したようにすべて石榔外からの混入であり、石榔外では墳丘葺石目地からも出土している。年代を確定しうる資料は乏しいが、後述する石組遺構（S Z-2）から出土した甕に接合するものがあり陶邑編年のT K47段階に相当するものと考えられる。

1は甕の下半部18%が残存し、内面は回転ナデ、外面の上部にはクシガキによる調整と底部は回転ナデを施す。胎土は密で1mm以下の長石を含み色調は灰色（7.5YR5/1）である。2は広口壺の体部で外面に平行叩目門があり内面は同心円の当て具痕が微かに残る。胎土は密で色調は灰色（7.5Y4/1）である。6と27は高坏の脚部で外面は回転ナデ、内面は回転ナデでしばり痕を残す。透孔は不明。色調は灰白色（7.5Y8/1）である。19は高坏の脚部の一部で、外面は回転ナデを施す。32は広口壺の口縁部が17%残存する。内外面とも調整は回転ナデでロクロは右回転である。胎土に1mm以下の長石を含み色



第25図 2号古墳 出土遺物 (2)

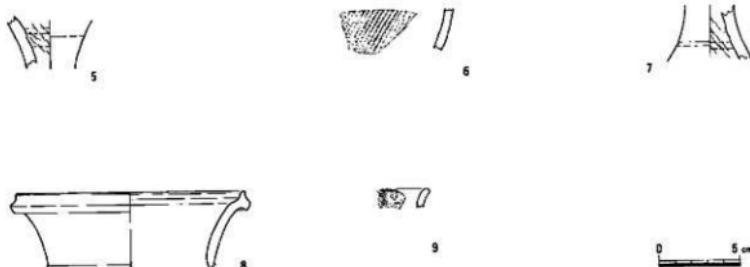
調は灰色（7.5Y R6/1）である。一覧は、第4表遺物観察表（2）に記す。

小結

冬頭山崎2号古墳は、平地部に向かって突出した尾根頂部先端に立地し、極めて特殊な竪穴式石槨を内部主体とする円墳と考えられる。石槨は、壁面の構成が極めて特殊であり、周辺地域を見渡しても類例は認められない。岩盤を素掘りにした状態を壁面とすることは、いわば簡略形態と理解され、眼下に所在する冬頭王塚古墳の2基の竪穴式石槨と比較しても、その後続形態である可能性が高い。

北東側にのみ形成された石材による壁体は、下段を板状石材による長手積みで、上段を川原石による小口積みで構成している点において、6世紀代の飛驒地域に採用される前半段階の横穴式石室（竪穴系横口式石室）に共通するものである。このことから当古墳は、5世紀代の竪穴式石槨から6世紀代の横穴系埋葬施設への転換点に位置するものと推定され、5世紀末頃に築造されたものと考えられる。出土した鉄剣・鐵鎌の年代観もそれと矛盾しない。また、石槨内覆土や墳丘に破片として点在する須恵器片の年代（TK47段階）とも大差なく、後述する石組遺構は、当古墳と密接に関連するものであると考えられる。

床面から出土した遺物は、大半が元位置を保つものであり、埋葬当初の棺体配置・副葬品配列を考える上で重要な意義をもつ。鉄剣は、加飾の認められるものであり、極めて希な事例といえる。また、弓は残欠ながらも、古墳から検出された点で、全国的にも稀少な事例といえよう。



第26図 2号古墳 出土遺物(3)

第4表 遺物観察表(2)

遺物番号	遺構	器種	横固番号	法半 口径	mm	形状、調査	胎土	色調	備考	
1	SZ3	須恵器 越	10-2	104	109	外面部描き 密 砂粒を含む	灰	灰色	4, 23, 24, 30, 31, 33, 34と結合	
2	SZ3	須恵器 広口壺	6	-	-	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	20, 32と同一個体	
3	SZ2	上部器	12	-	-	内面横ナデ	灰	灰色		
4	SZ2	須恵器 越	10-1	104	109	外面部描きの波状文 密 砂粒を含む	灰	灰色	1と同一個体	
5	SZ3	土師器	9	-	-	外面部回転ナデ	密	棕		
6	SZ3	須恵器 高坏	7	-	-	内外面回転ナデ 内面しづり痕 やや粗	灰白色	27と結合		
7	SZ1	須恵器 有蓋高坏	3	119	143	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	12~16と結合	
8	SZ1	須恵器 高坏	16	-	-	外面部回転ナデ 密 砂粒を含む	灰白色	9と10と結合		
9	SZ1	須恵器 高坏	16	-	-	外面部回転ナデ 密 砂粒を含む	灰白色	灰色		
10	SZ1	須恵器 高坏	16	-	-	外面部回転ナデ 密 砂粒を含む	灰白色			
11	SZ1	土師器 鉢	15	-	-	内外面ハケのちナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	浅黄棕	28, 29と同一個体		
12	SZ1	須恵器 有蓋高坏	3	125	143	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	7と結合	
13	SZ1	須恵器 有蓋高坏	3	125	143	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	7と結合	
14	SZ1	須恵器 有蓋高坏	3	125	143	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	7と結合	
15	SZ1	須恵器 有蓋高坏	3	125	143	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	7と結合	
16	SZ1	須恵器 有蓋高坏	3	125	143	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	7と結合	
17	SZ1	須恵器 高坏の蓋	2	130	45	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	17と結合	
18	SZ1	須恵器 高坏の蓋	2	130	45	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色		
19	SZ1	須恵器 高坏	5	-	-	内外面回転ナデ 内面しづり痕 やや粗	灰白色	6と同一個体		
20	SZ2	須恵器 広口壺	11	-	-	外面部引たき 内面円心凸円 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色	2, 32と同一個体	
21	SX1	須恵器	-	-	-	弱軽ナデ 密	灰	灰色		
22	SX1	上部器 鉢	14	-	-	外面部ハケメ 砂粒1mm以下を多く含む	棕			
23	SZ2	須恵器 越	10-1	104	109	外面部描きの波状文 密 砂粒を含む	灰	灰色	1と結合	
24	SZ2	須恵器 越	10-1	104	109	外面部描きの波状文 密 砂粒を含む	灰	灰色	1と結合	
25	SZ1	須恵器 短焰壺	1	80	95	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色		
26	SX1	上部器 鉢	13	-	-	内外面ハケメ 砂粒を多く含む	浅黄棕			
27	SZ3	須恵器 高坏	7	-	-	内外面回転ナデ 内面しづり痕 やや粗	灰白色	6と結合		
28	SZ1	上部器 鉢	4	134	-	内外面ハケのちナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	浅黄棕	29と結合		
29	SZ1	土師器 鉢	4	134	-	内外面ハケのちナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	浅黄棕			
30	SZ2	須恵器 越	10-1	104	109	外面部描きの波状文 密 砂粒を含む	灰	灰色	1と結合	
31	SZ2	須恵器 越	10-1	104	109	外面部描きの波状文 密 砂粒を含む	灰	灰色	1と結合	
32	SZ3	須恵器 広口壺	8	142	-	内外面回転ナデ 1mm以下の砂粒を多く含む	灰	灰色		
33	SZ2	須恵器 越	10-1	104	109	外面部描きの波状文 密 砂粒を含む	灰	灰色	1と結合	
34	SZ2	須恵器 越	10-1	104	109	外面部描きの波状文 密 砂粒を含む	灰	灰色	1と結合	

(3) 石組遺構 (S Z -2)

調査概況

城郭遺構を確認するため、A区の尾根頂部に沿って3トレンチを設定したところ、1号古墳と2号古墳のはば中間に、人頭大の川原石が集中する箇所を検出した。さらに、石組み内部から須恵器片を検出するに至り、古墳時代の遺構と判断して調査を進めた。

石組遺構 (第27図、図版9)

岩盤から20~30cm上から検出され、29個の川原石がほぼ半円形に分布する。円形と仮定して復元すると、直径約3mとなる。石材は、互いに積み重なることがほとんどなく、面をなして広がる。円形が欠けた部分からは、中世のものと考えられる柱穴が数基検出されており、それによって攢乱された可能性が高く、本来は円形を呈していたものと推定される。

使用された石材は、濃飛流紋岩を主体とし花崗斑岩・チャートをわずかに含む。これらは、2号古墳の葺石と同様、川上川から搬入されたものと考えられる。2号古墳の葺石に比べやや小振りであり、0.2~0.8kgが61%、3~6kgが19%、10kg以上が6%となる。

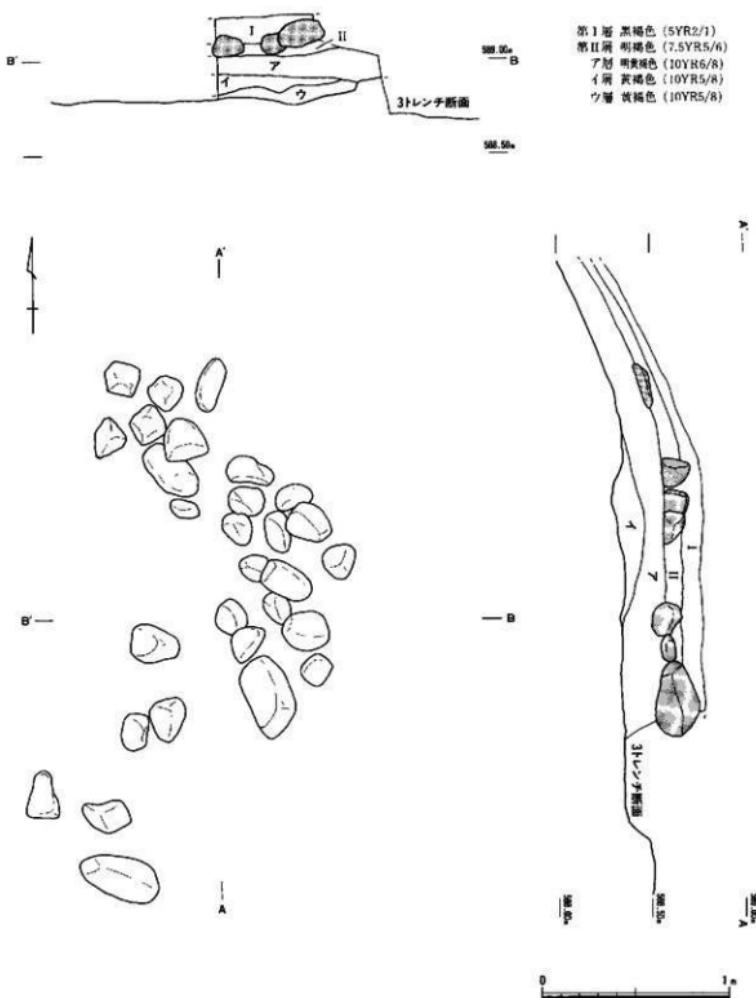
出土遺物は元位置を保たず、石組みも本来の形状を必ずしも残していないことから、この遺構の性格は不明であるが、2号古墳に付設された祭祀儀礼の場、又は2号古墳に追従する埋葬施設の可能性がある。後者の場合、積石塚の可能性も指摘できよう。しかし、いずれにしても今後の類例の増加を待つて結論は出されるべきであろう。なお、この遺構から南西に約3mの地点に、直径13cmの柱痕跡をもつ柱穴 (第29図、図版9) を1基検出したが、この位置から石組遺構または、2号古墳に附属する可能性がある。儀礼の際の幡竿を立てたものとも考えられる。

遺物とその出土状況 (第29図、図版9・16)

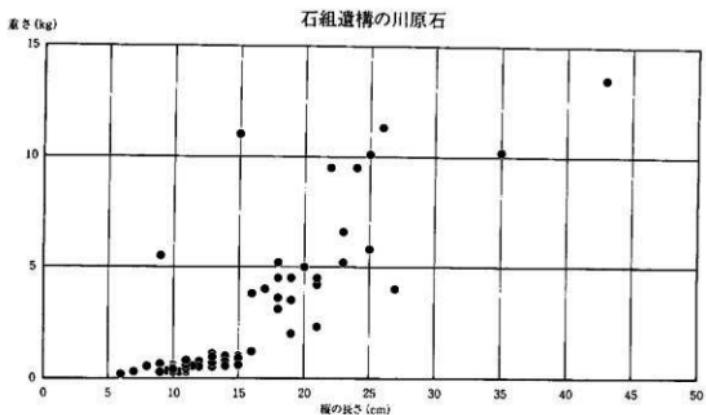
須恵器10の縁は、2号古墳石棺覆土から出土した須恵器片と接合するものである。中世に石組遺構が改変を受けた際に破砕され、石棺内に一部が混入したものと推定される。口縁部径10.4cm、体部最大径11.0cm、器高10.9cmを測る。丸底からやや内傾しつつ立ち上がり、体部中段でわずかに直立したのち、頸部に向かって内傾する。頸部は外反して立ち上がった後、口縁部との境に鋭く突出した凸帯を巡らせて段を形成する。口縁部は内擣して立ち上がり、端部は内面に凹線を巡らせて段を形成し、外反して鋭く尖らせる。底部外面は回転ヘラ削りを行い、体部中段は回転カキ目調整の後肩部に櫛描波状文を巡らせる。この櫛描波状文に注孔が穿孔されたものと考えられるが、その部位は検出されていない。頸部外面にも櫛描波状文が巡るが、口縁部は無文とする。回転ヘラ削り調整から判断されるロクロの回転方向は右である。砂粒をやや含む胎土で、灰色を呈する。なお、遺物観察表に示した破片No. 1・4・23・24・30・31・33・34がこの個体に属する。

11は、須恵器広口壺の体部片で、外面は平行タタキ目が、内面には半スリケシ同心円あて具痕が認められる。2号古墳石棺覆土から出土した須恵器広口壺と同一個体である。胎土は密で、灰色を呈する。

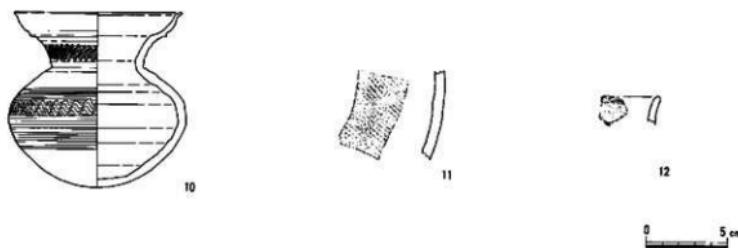
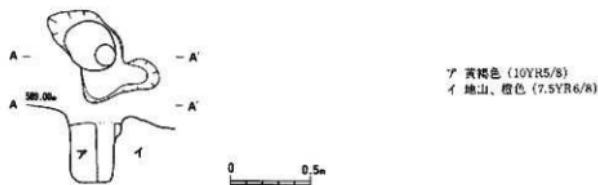
12は土師器甕の口縁部細片で、外面に回転ナテ調整が認められる。全体の形状は不明であるが、口縁部をくの字状に外反させるものと考えられる。色調は灰色を呈する。



第27図 石組遺構



第28図 石組遺構の石材



第29図 石組遺構の遺物とピット

(4) 冬頭山崎1号横穴 (S Z-4)

調査概況

1号古墳と2号古墳との間にまたがる尾根の北斜面に位置し、当初は土坑としての認識で調査を進めたが、終盤になって掘削を開始したところ、横穴であることを確認した。北側に向かって開口するところが、横穴の存在を調査の終盤まで見落す原因となった。

内部主体の外部及び上部は、通常の横穴の例に漏れず、墳丘などの施設は認められない。出土遺物の少なさや横穴の崩れから盗掘を受けたと考えられる。

「横穴」の名称については「横穴墓」「横穴式墓」「横穴墳」「横穴」など、さまざまな呼び名があるが、高山市における横穴は、桧山1~3横穴において「横穴」と統一されているため「横穴」と呼ぶことにした。

内部主体（第31図、図版10）

冬頭山崎1号古墳の石室とは全く逆の、北西方向に開口する横穴である。漂飛流紋岩の岩盤を掘削して墓室を形成する。入り口付近は、斜面崩落によって流出しているものと考えられ、残存する全長は3.28mを測る。

玄室と羨道とは明確に区分されておらず、平面形も左右非対称である。幅は奥壁近くで最も広く1.04mを測るが、中央から入り口まではほぼ平行で幅0.8m前後である。奥壁と側壁との隅角は丸く、奥壁面も彎曲させているが天井部・側壁面との境がわずかに残る。高さは、残存した奥壁近辺で80cmである。側壁は、基底部から中段まで外傾した後、曲線的に内側に向かってせり出して天井部に至り、アーチ形の断面形を呈する。

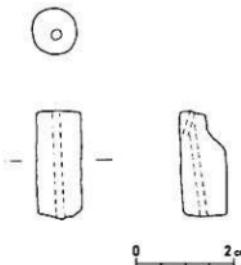
床面は、奥壁から入り口に向かい外部に至るまで幅約40cm、深さ15cm前後の溝が設けられている。溝底部の凹凸は激しいが、排水溝と考えられる。この排水溝を覆う何らかの施設がなければ、墓室としての機能は果たさないが、その検出はできなかった。おそらく木製の板を渡しかけたものと考えられる。奥壁から2.8mの入り口付近の溝内からは、溝をふさぐように川原石が検出されたが、これは閉塞の基底石の可能性がある。

遺構や遺物の状態などから、追葬の有無・回数は判断できなかった。

出土遺物（第30図、図版19）

当横穴からは、管玉が1点出土したにすぎない。一部が欠損するが、ほぼ完形である。長さ2.2cm、直径0.9cmの円柱形を呈し、1.6~2.0mmの両小口から穿孔がある。一方の穿孔は中心を大きくずれ、かろうじて貫通した両者は、くの字状である。

材質は、碧玉で、表面は明緑灰色(10Y G8/1)を呈する。



第30図 1号横穴出土遺物

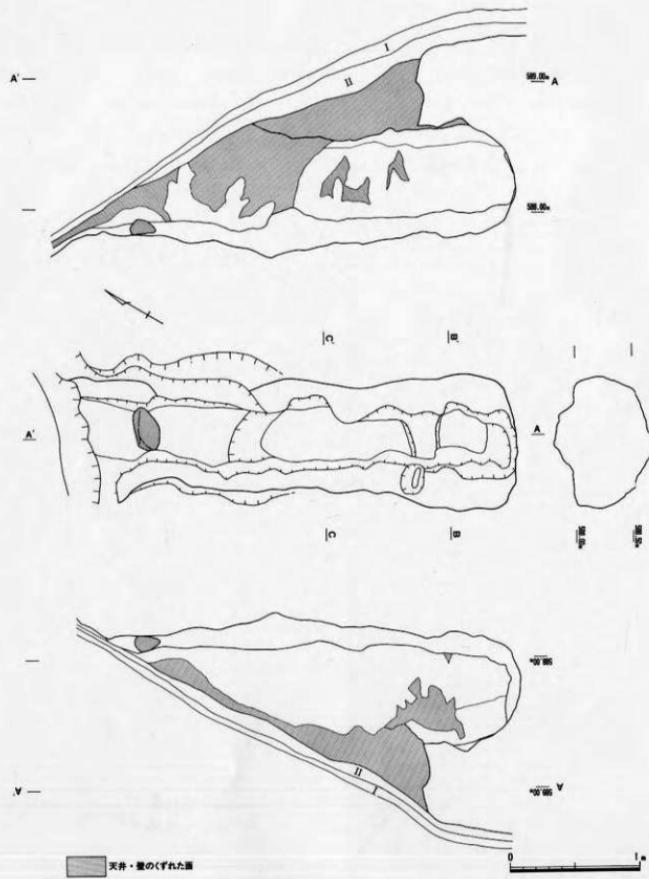
小結

高山市における横穴墓は松山横穴など6基が報告されている。いずれも高山盆地北部の三福寺町内の丘陵に位置している(第38図参照)。その横穴墓の分布は三福寺町という限られた地域であったが、小八賀川を隔てた冬頭町の丘陵に冬頭山崎1号横穴を検出し、高山市の横穴墓が広い地域に分布する可能性が出てきた。

冬頭山崎1号横穴は、桧山横穴と比較すると段を持たず小規模である。天井はアーチ形(ドーム型)をなしているものの玄室に袖が見られず後道との区別が明確でない。特異なのは北に開口することである。しかも同一尾根に隣接して所在する冬頭山崎1号古墳の開口方向とは、まったく逆であり、両者の間には年代差が考えられるとともに、異なる造営主体であった可能性が高い。

飛驒地域の横穴墓は7世紀以降に造営される。当横穴墓は形態が退化傾向にある雑な造りであることから、当地域の導入期のものとは考えがたい。出土遺物からは年代を確定できるものはないが、7世紀後半以降の終末段階のものと推定される。1号古墳とは年代的に開きがあり、また墓室の系譜も大きく異なることから、両者は別の家族体のものといえよう。仮に1号古墳の追葬及び祭祀が横穴墓の造営時期と重なるとしても、墓道が明らかに異なり、同一古墳群とはいえない。

(第3章 調査の概要には、上出の記述に基づいて成瀬が加筆した。)



第31図 冬頭山崎1号横穴

第5表 1号古墳の石材(1)

1号古墳より出土した石材

番号	幅cm	高さcm	厚さcm	番号	幅cm	高さcm	厚さcm
1	2	6	4	104	5	4.5	160
2	2	6	4	105	5	4	160
3	4.5	5.5	1.5	106	8	3	60
4	7.5	2.5	2.5	107	10	5.5	200
5	8	6	4	108	4.5	3	200
6	10	12	4	109	9	5.5	200
7	8	5.5	3	110	9	5.5	200
8	3	4.5	3	111	9.5	6	300
9	4.5	6.5	3	112	15.5	7.5	450
10	2	6	1	113	15.5	11	300
11	2	6	1	114	14	9.5	500
12	3.5	6	2	115	12	9.5	260
13	5.5	12	2	116	6	7	150
14	7	11	3.5	117	11	5.5	220
15	7	8	4	118	5.5	2.5	220
16	2	4	1	119	8.5	7	2
17	2	5	1.5	120	8.5	4	180
18	3.5	4	2.5	121	7	4	180
19	4	3	2	122	7	3.5	220
20	2.5	2	2	123	8	7	220
21	5	6.5	2.5	124	10	7	300
22	7	7	1.5	125	11	7	300
23	7	7.5	4	126	11	4	150
24	4	5	3	127	0.5	3	200
25	4	6	1.5	128	8.5	5	110
26	3	4.5	2.5	129	8.5	5	110
27	4	6	2	130	7	6.5	60
28	4	6	2	131	7.5	6.5	180
29	2.5	4	1.5	132	5.5	3	150
30	2.5	3.5	1.5	133	5.5	4	150
31	5	9.5	5.5	134	5	4	150
32	3.5	7	3	135	7	2.5	140
33	4.5	11	4.5	136	9.5	4.5	150
34	5.5	7.5	3.5	137	7	2.5	100
35	5.5	7.5	10	138	6	3.5	100
36	5.5	6	10	139	5.5	3.5	60
37	6	10	4	140	10	8	0.5
38	6	8.5	4.5	141	14	12	300
39	6.5	9	4.5	142	10	5	200
40	6.5	10	4	143	8.5	8	80
41	5.5	10	4.5	144	11.5	8	4
42	3.5	4	3.5	145	10	3	400
43	3.5	5	5	146	2	2.5	150
44	1.5	5	1.5	147	10	2	150
45	3.5	5	5	148	8.5	4.5	180
46	3.5	5	5	149	10.5	6.5	310
47	3.5	5	5	150	8.5	3	210
48	4.5	7	3	151	6.5	6.5	150
49	5	5	5	152	5.5	2.5	150
50	5	5	2.5	153	5.5	9.5	110
51	4.5	4	1.5	154	8	5	200
52	3.5	4	1.5	155	6.5	3.5	250
53	3.5	4	2	156	5	2.5	150
54	2.5	4	2	157	8	5	150
55	2.5	6	2	158	8	4	2.5
56	3.5	6	5.5	159	8.5	5	150
57	3.5	6	10	160	7	5	80
58	3.5	5	2.5	161	11	1	100
59	3.5	5	10	162	8	3	120
60	4.5	5.5	3.5	163	15	2.5	600
61	4.5	5.5	1.5	164	17	14	800
62	5.5	6	5	165	13	10	400
63	5.5	6	3.5	166	9.5	5	200
64	5.5	4	3	167	14	1.5	210
65	2.5	4	3	168	14.5	10.5	500
66	3.5	8	2.5	169	11	8	400
67	3.5	6	8.5	170	17.5	10.5	250
68	8.5	2	5	171	15	2.5	250
69	9	10	5.5	172	8.5	4	150
70	6.5	12	5.5	173	8	4	150
71	13	8	4	174	6.5	6	110
72	4.5	6	1.5	175	12	6.5	250
73	4.5	4	3	176	12	6	250
74	12	10	3	177	16.5	7.5	200
75	16.5	8	5	178	5	3	120
76	7.5	7.5	150	179	8	4.5	250
77	4.5	5.5	2.5	180	5	1.5	150
78	—	19	5.5	181	12	4	250
79	—	9	5.5	182	10	6	300
80	6.5	7.5	4	183	6.5	4	140
81	6.5	11.5	6.5	184	7	6	150
82	6.5	11	4.5	185	12	5	250
83	6.5	7	2	186	9	2	250
84	6	10	5.5	187	4	4	110
85	8.5	10	5.5	188	6	5	90
86	8.5	10	6.5	189	6.5	5.5	110
87	8.5	10	150	190	12	4	250
88	6.5	2.5	2.5	191	12	4	250
89	6.5	5.5	300	192	10	6	300
90	6.5	7.5	3.5	193	6.5	4	150
91	6.5	8	4.5	194	9	5	150
92	6.5	8	4	195	7	5	150
93	6.5	8	4	196	7	5.5	150
94	6.5	9.5	3.5	197	8	4.5	150
95	6.5	9.5	5.5	198	8	5.5	150
96	6.5	9	5.5	199	8	5	150
97	6.5	8.5	2.5	200	10	9	420
98	6.5	8.5	2.5	201	9	9.5	420
99	6.5	8	4.5	202	19	7	350
100	4.5	5	1.5	203	12	6	350
101	14	8	3	204	10	6	350
102	6.5	8	3	205	16	4	350
103	11	5.5	3.5	206	8	6.5	350

第6表 1号古墳の石材(2)

207	10.5	9.5	4	500
208	9.5	8.5	3.5	100
209	9.5	8.5	1.5	180
210	8	5.5	3	180
211	7	—	—	—
212	5.5	4.5	1.5	50
213	5	4	1.5	40
214	6	4	2	70
215	10	6	1.5	160
216	10.5	—	—	—
217	8.5	6.5	4	200
218	8	7	1.5	150
219	7	5	2.5	150
220	5.5	4.5	2	200
221	8.5	6	3.5	250
222	3.5	1.5	1.5	50
223	4.5	6	1.5	100
224	3.5	6.5	3	40
225	3.5	6	—	—
226	6	4.5	3.5	150
227	5.5	5.5	3	150
228	4.5	6	2.5	100
229	5.5	6	2.5	100
230	5.5	6	2.5	100
231	5	4	2	50
232	6	3.5	1	50
233	5.5	5.5	3.5	100
234	5.5	3	2	50
235	5	5	—	—
236	2	2.5	—	—
237	6	4	2	80
238	3.5	4.5	1	50
239	4	3.5	2.5	50
240	5.5	2.5	5	100
241	5	4	—	—
242	4	3	2	50
243	3.5	4	1	20
244	3.5	4.5	1.5	50
245	3.5	4.2	—	—
246	3.5	5.5	3.5	150
247	3	5.5	3.5	150
248	5	3.5	2	50
249	5	5	4	100
250	5	4	1.5	50
251	6	7	2.5	200
252	7.5	5.5	4.5	100
253	6.5	6	2	100
254	5.5	4	3	150
255	5.2	4.2	—	—
256	5.5	6	4	100
257	5.5	5.5	3.5	100
258	5.5	5.5	3.5	100
259	5.5	5	3	150
260	5.5	5	3	150
261	4	3.5	1.5	50
262	6.5	5	1.5	120
263	5.5	4.5	2	200
264	5.5	5	2	80
265	5.5	3.5	3.5	150
266	5	3.5	3	150
267	5	5.5	4	250
268	4.5	4	1.5	50
269	4.5	5.5	5	60
270	5.5	2.5	2.5	150
271	5.5	4.5	2.5	150
272	6	6.5	1.5	150
273	11	9.5	5	550
274	7.5	3.5	3	150
275	6	9	3.5	250
276	5.5	7	2	150
277	6.5	11	4	400
278	9.5	3.5	1.5	100
279	9.5	3.5	3	200
280	14	6	3	450
281	6	6	1.5	150
282	8.5	6.5	4.5	300
283	8.5	15.5	4	300
284	5.5	5.5	3.5	150
285	5.5	5.5	3.5	150
286	5.5	5.5	2.5	140
287	7	5.5	2	100
288	10	6.5	3	250
289	8.5	6	3.5	200
290	7	5.5	3.5	150
291	7	5.5	3.5	150
292	7	5.5	2.5	150
293	7.5	4.5	2.5	150
294	6	4.5	1.5	50
295	6	4.5	2	80
296	6	5	1.5	90
297	5.5	3.5	3	150
298	5.5	3	3	150
299	5.5	10	4	250
300	5.5	6	3	250
301	7	5	1.5	250
302	10	5	5	300
303	8.5	9	3.5	350
304	5.5	5.5	5	300
305	5.5	5.5	3.5	200
306	5.5	5.5	3	200
307	5.5	4.5	3	150
308	5.5	4.5	3	150
309	5.5	5.5	3.5	300
310	8.5	8	5	150
311	8.5	6	4	200
312	7.5	—	—	—
313	10	—	4.5	150
314	6.5	—	3.5	200
315	8	—	6	150
316	6	—	4	150
317	5.5	—	1.5	150
318	6	—	3	230
319	7	—	3	230
320	8	—	3	150
321	6.5	—	3.5	100
322	6.5	—	3	100
323	5.5	—	3	100
324	5	—	2.5	100
325	6	—	2.5	100
326	7	—	3	150
327	10	—	4.5	500
328	7.5	—	4	500
329	8	—	3	300
330	11	—	3	300
331	7.5	—	4	500
332	10	—	2.5	300
333	11.5	—	9.5	500
334	11.5	—	9.5	450
335	11	—	4	450
336	8	—	4	450
337	12	—	11	450
338	10	—	11	600
339	11	—	3	500
340	7.5	—	10.5	500
341	8	—	10.5	500
342	10	—	6.5	300
343	11.5	—	9.5	500
344	11.5	—	9.5	450
345	11	—	4	450
346	8	—	4	450
347	8	—	11	450
348	5.5	—	11	500
349	8	—	7	300
350	9.5	—	5.5	350
351	9.5	—	5.5	350
352	15	—	6.5	650
353	15	—	6.5	500
354	9	—	6	350
355	11	—	4.5	350
356	6	—	6.5	350
357	13	—	4.5	200
358	10	—	7.5	400
359	9.5	—	7.5	640
360	7	—	4	200
361	11	—	4.5	200
362	11	—	5.5	400
363	11	—	6.5	350
364	15	—	6.5	250
365	5	—	5.5	250
366	8	—	5.5	300
367	6	—	5.5	110
368	6	—	4	110
369	6	—	4	20
370	3	—	4	20
371	7.5	—	4	150
372	8	—	6.5	280
373	8	—	3	280
374	7	—	6	180
375	7	—	5	180
376	9	—	4.5	280
377	9	—	5	180
378	6.5	—	5	180
379	5	—	5.5	180
380	8	—	4.5	180
381	9	—	5	180
382	5	—	5	120
383	6.5	—	4.5	120
384	6.5	—	4.5	100
385	6.5	—	4.5	100
386	6	—	4.5	100
387	6.5	—	3.5	150
388	6	—	5.5	150
389	5.5	—	4.5	150
390	5.5	—	4.5	120
391	7.5	—	4	110
392	9	—	6.5	170
393	8	—	6.5	120
394	9	—	4	120
395	5.5	—	4.5	110
396	10.2	—	5	210
397	17	—	14	1880
398	10	—	10	720
399	10	—	4.5	720
400	7.5	—	6.5	380
401	10	—	4	420
402	11	—	5	490
403	10	—	4.5	490
404	9.5	—	6.5	380
405	8.5	—	6.5	380
406	8.5	—	5.5	200
407	6	—	4.5	200
408	6	—	4	200
409	7	—	4.5	220
410	5.5	—	3.5	220
411	4	—	3.5	220
412	4	—	3.5	220
413	4	—	3	220
414	11	—	5	330
415	15	—	6.5	380
416	16.5	—	12.5	380

第7表 1号古墳の石材(3) 石組遺構の石材

417	10	2	2	5	455	447	6	4	5	2	8	100
418	8.2	10	2	2	300	448	7.5	30	5	2.5	110	
419	12	2	2	2	300	449	8	30	5	2.5	100	
420	14.5	5	5	2.5	240	450	6	3.5	3	3	70	
421	10	6	8	3.7	320	451	6	4	3.2	2	90	
422	7	5	5	3.8	150	452	5.5	4	4.5	4	5	150
423	8	5	5	2.5	150	453	6	5	4.5	4	5	150
424	8	5	5	1.7	150	454	20	12	6.5	2.5	250	
425	7	5	7	1.2	90	455	12.5	8	4	5	500	
426	8	5	5	3.8	220	456	8	7.5	2	2	160	
427	8	5	5	3.8	220	457	6	2	1	1	150	
428	10	5	5	2.5	110	458	4	4	3	3	150	
429	12	5	5	2	180	459	9	5	4	3	160	
430	10	6	6	2	180	460	7	5.5	2	2	110	
431	8	5	6	1.7	150	461	7.5	4	4	2	100	
432	7	5	6	3.8	320	462	5	4	4.5	4	5	120
433	7.5	5	6	2.5	150	463	3.5	3.5	2.5	2.5	110	
434	8	5	6	1.7	150	464	6	4.5	4	4	100	
435	13	4.5	5	3.5	200	465	7	4.5	2.5	2.5	100	
436	9	5	5	3	200	466	10	1.5	1	1	100	
437	10	5	5	1.5	110	467	7	1.5	1	1	100	
438	10	6	6	1.5	110	468	14	9	3.5	3.5	400	
439	10	5	5	2	150	469	14	9	6	6	900	
440	8	4.5	5	3	150	470	15	10.5	2	2	370	
441	6	6	5.5	2.5	220	471	10.5	10	3.5	3.5	350	
442	8	5	5	2	150	472	7	5	5	5	200	
443	7.5	5	5	3	150	473	11	6.5	2	2	200	
444	7.5	5	5	3.5	100	474	16	9	3	3	670	
445	6	4	5	3.5	100	475	8.5	6	4	4	300	
446	8	4	5	3	150	476	8.5	6	4	4	300	

1号古墳の石室に入っていた石材

番号	長さcm	幅cm	高さcm
1	35	25	10
2	35	25	22
3	35	25	25
4	34	29	25
5	34	29	12
6	34	29	12
7	35	25	28
8	35	24	31
9	45	24	18
10	80	55	28
11	42	44	28

番号	長さcm	幅cm	高さcm
12	50	25	32
13	42	27	12
14	32	18	19
15	32	18	19
16	53	45	25
17	48	50	22
18	54	50	22
19	68	42	30
20	37	27	18
21	27	41	18
22	78	34	34

番号	長さcm	幅cm	高さcm
23	32	30	18
24	32	41	11.5
25	59	41	20
26	44	42	15
27	52	25	30
28	70	59	50
29	68	48	35
30	56	50	15
31	56	37	25
32	47	34	25
33	56	30	30

1号古墳の閉塞石

番号	長さcm	重さkg
1	2	260
2	12	500
3	8	150
4	12	350
5	12	350
6	11	800
7	9	210
8	10	290
9	6	200
10	9	200
11	9	200
12	10.5	360
13	8.5	400
14	13.5	250
15	13.5	250
16	13	1200
17	13	680
18	13	680
19	13	680
20	13	680
21	13	680
22	13	680
23	13	680
24	13	680
25	13	680
26	13	680
27	13	680
28	13	680
29	13	680
30	13	680
31	13	680
32	13	680
33	13	680
34	11	250
35	10	420
36	10	350
37	11	350
38	7.5	180
39	6	140
40	5	220
41	10	220
42	11.5	220
43	9	300
44	11	600
45	12	500
46	12	500
47	12	500
48	14.5	500
49	8	250
50	10	500
51	11	500
52	12	500
53	12	500
54	12	500
55	12	500
56	12	500
57	11	500
58	11	500
59	15	11000
60	15	5000
61	20	5000
62	21	2500
63	10	3500
64	18	3500
65	25	5800
66	25	5800
67	25	10100
68	16	3800
69	18	2500
70	25	9500
71	21	4200
72	21	4000
73	27	4000
74	18	2500
75	19	2000
76	21	4100
77	21	4100
78	18	2500
79	21	4200
80	21	4200
81	26	11300
82	35	10200
83	43	13500

番号	長さcm	重さkg
20	1000	1000
30	500	500
31	500	500
32	500	500
33	500	500
34	11	250
35	10	420
36	9	350
37	10	200
38	10	200
39	15	900
40	15	1000
41	11	600
42	9	500
43	10	420
44	9	410
45	8	540
46	10	350
47	11.5	350
48	9	300
49	6	280
50	14	560
51	14	560
52	14	560
53	10	200
54	10	200
55	10	200
56	11	450
57	10	200

番号	長さcm	重さkg
58	15	600
59	15	11000
60	16	3800
61	20	5000
62	21	2500
63	10	3500
64	18	3500
65	25	5800
66	25	5800
67	25	10100
68	16	3800
69	18	2500
70	25	9500
71	21	4200
72	21	4000
73	27	4000
74	18	2500
75	19	2000
76	21	4100
77	21	4100
78	18	2500
79	21	4200
80	21	4200
81	26	11300
82	35	10200
83	43	13500

第8表 2号古墳の石材(1)

2号古墳より出土した板状石材

番号	幅cm	幅cm	高さcm	重さkg	番号	幅cm	幅cm	高さcm	重さkg
1	28	25	14	9510	71	11	8	3	270
2	28	21	6	6380	72	20	5	2	140
3	27	16	10	6400	73	20	5	3	420
4	13	4	4	340	74	7	5	1	40
5	15	4	6	1970	75	7	5	3	130
6	32	11	5	2650	76	6	5	4	160
7	6	6	1, 5	70	77	7	4	2	140
8	9	6	4	760	78	11	7	2	260
9	7	6	1	100	79	15	6	2	230
10	9	5	0. 5	60	80	11	10	4	460
11	5	11	5	750	81	15	6	3	300
12	10	6	5	520	82	16	11	2. 5	690
13	14	7	3	260	83	17	16	2. 5	980
14	20	12	4	1670	84	30	20	3	1840
15	18	6	5	1500	85	21	16	4	1220
16	15	6	5	1300	86	27	9	6	1690
17	9	7	4	270	87	26	24	2	3950
18	13	8	5	600	88	16	14	5	1440
19	14	10	4	660	89	21	13	5	1350
20	14	7	5	520	90	6	6	3	190
21	12	8	2. 5	380	91	11	7	0. 5	70
22	14	6	4	400	92	13	5	1	120
23	17	13	2. 5	520	93	7	6	2	140
24	9	6	3	210	94	14	9	3	600
25	8	6	1. 5	120	95	31	10	8	3110
26	10	3	1	70	96	2	4	1. 5	80
27	6	3	2	60	97	10	6	2	180
28	18	7	2	360	98	13	10	3	420
29	17	6	2	390	99	11	6	3	220
30	19	8	5. 5	1070	100	14	5	1. 5	220
31	7	6	3	220	101	17	11	4	1220
32	9	6	4	190	102	15	11	1. 5	270
33	12	11	2	480	103	17	7	1. 5	320
34	7	5	3	140	104	9	5	2	120
35	10	9	5	540	105	14	10	4	610
36	6	6	3	100	106	17	11	5	1250
37	11	7	2	210	107	9	4	1	50
38	9	7	2	150	108	16	11	2	600
39	8	5	1	120	109	16	12	3	750
40	13	6	3	220	110	20	11	5	2120
41	12	10	2	410	111	16	6	2. 5	380
42	13	7	5	500	112	22	8	3	700
43	10	7	2	180	113	21	10	1. 5	450
44	17	10	6	1220	114	24	22	3	1430
45	10	9	2	330	115	22	11	10	600
46	10	6	2	190	116	51	39	4	6980
47	14	8	1. 5	220	117	14	11	5	1080
48	13	5	1	180	118	16	18	3	1260
49	4	5	1	80	119	11	6	5	560
50	9	7	3	230	120	24	10	5	2700
51	10	7	3	220	121	10	6	5	500
52	12	11	1. 5	350	122	30	5	2	340
53	13	8	2. 5	460	123	42	17	3	3260
54	9	7	2	200	124	24	26	3	1450
55	15	7	4	610	125	18	13	5	1250
56	14	13	2	510	126	14	11	6	1540
57	14	5	1. 5	230	127	14	12	4	1200
58	6	5	5	230	128	12	9	3	510
59	11	9	3. 5	680	129	14	12	4	1130
60	7	4	2. 5	130	130	30	11	3	1120
61	8	3	1. 5	60	131	9	7	1. 5	120
62	14	11	2	250	132	22	11	3	820
63	18	9	4	740	133	14	14	3	910
64	13	7	5	500	134	20	8	1. 5	290
65	6	4	3	10	135	24	13	6	3600
66	5	5	3	150	136	25	22	7	610
67	9	4	3	210	137	32	20	5	5720
68	12	6	4	310	138	9	5	4	200
69	13	11	3. 5	550	139	16	5	2	190
70	8	5	4	200					

第9表 2号古墳の石材(2)

2号古墳の蓋石

番号	幅cm	横cm	高cm	重さkg	番号	幅cm	横cm	高cm	重さkg
1	25	16	9	5.25	79	22	12	11	4.38
2	25	15	10	2.28	80	20	15	10	4.47
3	25	20	12	7.28	81	25	23	14	14.6
4	24	15	9	4.36	82	35	14	13	10.36
5	25	17	11	5.67	83	43	27	16	16U P
6	19	14	12	4.2	84	18	15	12	6.16
7	23	17	14	6.34	85	17	17	10	4.46
8	29	19	12	8.78	86	25	15	9	4.66
9	27	15	11	6.19	87	27	20	24	5.27
10	25	18	16	11.27	88	25	22	16	11.64
11	25	20	9	6.27	89	32	24	16	16U P
12	23	18	13	10.71	90	28	20	11	10.21
13	25	21	9	5.04	91	23	12	9	3.21
14	17	15	10	4.4	92	22	21	7	5.01
15	23	17	14	6.34	93	22	21	7	5.44
16	29	19	12	8.78	94	25	15	8	4.66
17	22	21	12	8.55	95	25	22	18	8.7
18	31	15	13	10.56	96	46	17	17	16U P
19	41	22	18	16U P	97	27	13	4	2.46
20	25	17	8	4.04	98	20	20	6	4.28
21	22	20	9	6.04	99	24	12	7	3.63
22	39	19	10	11.79	100	32	19	12	7.35
23	28	20	6	6.04	101	18	16	6	2.66
24	30	22	18	12.67	102	41	16	14	12.21
25	35	19	14	16.02	103	26	18	8	5.58
26	28	12	9	5.54	104	19	17	8	4.25
27	25	12	11	7.53	105	42	17	12	14.82
28	23	12	11	3.8	106	20	10	15	11.61
29	28	16	9	5.54	107	32	24	15	16U P
30	30	15	10	4.28	108	25	18	14	12.21
31	23	20	12	7.28	109	24	21	17	12.82
32	24	15	9	4.36	110	23	12	7	4.58
33	16	12	5	1.31	111	22	17	7	6.27
34	29	18	12	8.84	112	19	15	8	4.02
35	30	15	11	4.22	113	25	23	17	14.3
36	24	17	17	16U P	114	30	21	13	13.37
37	23	17	12	6.72	115	22	17	14	8.75
38	24	15	12	4.95	116	16	15	10	3.21
39	22	18	11	6.04	117	15	9	8	2.04
40	28	24	17	16U P	118	8	8	8	0.93
41	32	23	16	14.45	119	28	24	7	7.11
42	33	19	9	0.98	120	42	35	9	4.37
43	25	22	14	9.51	121	25	17	7	4.64
44	28	25	13	10.11	122	19	14	5	1.85
45	24	15	12	4.95	123	28	21	6	6.54
46	31	21	11	11.01	124	21	14	8	3.4
47	24	20	11	6.84	125	19	13	8	3.58
48	21	18	8	4.17	126	26	14	12	6.36
49	24	20	7	6.65	127	28	16	8	4.43
50	31	20	12	10.14	128	27	21	10	10.05
51	22	17	4	2.58	129	25	21	11	10
52	29	20	15	15.83	130	21	14	9	4
53	34	12	11	8.35	131	22	16	8	4.49
54	31	23	13	12.04	132	26	12	8	3.98
55	24	12	5	2.26	133	16	10	8	2.14
56	15	12	10	2.29	134	20	16	6	3.34
57	29	19	10	5.53	135	33	21	10	14.25
58	22	21	10	8.98	136	22	16	12	7.62
59	31	20	16	15.74	137	24	21	10	7.11
60	30	24	15	14.26	138	25	18	10	12.38
61	25	25	18	16U P	139	34	21	9	10.71
62	32	19	8	7.98	140	30	16	8	7.31
63	25	19	17	13.36	141	33	18	13	13.96
64	26	22	8	8.25	142	42	21	15	16U P
65	26	17	9	4.83	143	35	19	14	15.78
66	33	20	12	13.05	144	28	26	11	13.59
67	24	12	11	5.22	145	32	15	14	11.01
68	18	14	9	2.58	146	22	25	8	3.92
69	26	12	7	5.34	147	25	24	11	12.66
70	27	16	12	6.97	148	30	20	12	13.41
71	22	13	14	4.45	149	26	21	8	7.22
72	18	17	13	6.7	150	33	24	15	16U P
73	24	16	13	7.64	151	16	14	12	6.12
74	28	18	14	8.85	152	34	15	10	9.32
75	26	17	7	4.92	153	15	13	8	3.62
76	21	13	9	3.01	154	25	23	16	14.33
77	30	21	14	13.06	155	26	18	12	9.62
78	23	18	11	8.6	156	29	15	7	5.72

第4節 冬頭山崎古墳群に関する考察

第1項 冬頭山崎1号古墳の構築技法にみられる特徴とその背景

冬頭山崎1号古墳の石室は、掘り方掘削後に石室の基底石を配するが、特に玄室では、奥壁だけではなく基本的に両側壁に平（ひら）面を壁面とするようにして比較的扁平な石材を立てて腰石を形成すること、そして大型の框石を玄室基底石と同時に設置することが最大の特徴といえる。以下では、石室の構築にあたって用いられた様々な技法を考察することを通して、当石室が成立した背景を考えてみたい。

（1）腰石の設置技法

扁平な腰石を立て並べるためには、その不安定さを解消するために当古墳では以下の4つの技法が同時に用いられている。

- ①溝内への腰石の配置：腰石を配す前に、掘削された掘り方底面を、扁平な石材を立て並べるべく、石材が入るだけの幅で溝を掘り込み、溝にはめ込むようにして腰石を立てることで壁体の安定をはかる。
- ②掘り方正面による支保：腰石を掘り方の壁面に密着させるようにして立てることによって、外方向への倒壊を防ぐ。
- ③胴張りによる支保：内方向への倒壊は、胴張りになるように腰石を配することで腰石相互が支え合うことで防ぐ。
- ④小口積みによる「引き」：腰石の上に積み上げられる小口積みの楔体による外方向への「引き」によっても、内方向への倒壊を防ぐ。

このような諸技法を伴う石室は、開口した石室を見る限り胴張りを呈する石室が認められないことから、飛騨地域では現在のところ初めての事例といえ、隣接する美濃地域では腰石や胴張りなどの技法は散見されるが、上記の4つの技法が連動している事例は認められない。壁体の安定をはかる上で極めて合理的な技法であり、当地域で独自に形成されたとは考えがたく、他地域で完成された後に導入された可能性が高い。

（2）框石の設置

玄室と羨道との境を床面において明確にするよう設置されたもので、これは、特に玄室側壁と咬み合うように設置されており、側壁の内方への倒壊を防ぐ役割も担うものもある。玄室の腰石と同様に、この框石も岩盤を溝状に掘り込んだ中にはめ込まれており、両者は同時に設置されている。石室の解体調査を行わなかったので平面的には確認していないが、腰石と奥壁そして框石を配置するにあたって、上記①の溝は美濃地域に見られるような「コ」字状に1辺が解放したものではなく、框石下で閉塞した「ロ」字状をなすものと考えられる。

このことは、石室の構築は玄室から着手され、羨道は玄室の構築がある程度進行した後、少なくとも玄室基底石と框石の設置が完了した後に付加されたことを示唆する。それは、中心軸が玄室と羨道

とではされること、羨道左側壁の基底石と樋石及び玄室右側壁の基底石とが咬み合わないことからもいえる。なお、「樋石」の用語は、樋石を挟んで羨道床面が玄室床面より高く設けられるものをさすが、冬頭山崎1号古墳の羨道床面に置かれた人頭大の川原石が、羨道床を1段高くするものであった可能性が高く、また玄室基底石と同時に設置された大型の石材であることから、樋石ではなく樋石であると判断した。¹⁾

飛驒・美濃地域において、玄室基底石と樋石を設置した後に羨道を付加する事例は、現在のところ可児市所在の羽崎大洞3号古墳²⁾が知られるにすぎない。羽崎大洞3号古墳の石室は、築造時期や石材の積み上げ技法に差があるものの、樋石の構造は当地域では冬頭山崎1号古墳の石室に最も近いものといえる。

(3) 諸技法の背景と冬頭山崎1号古墳の位置

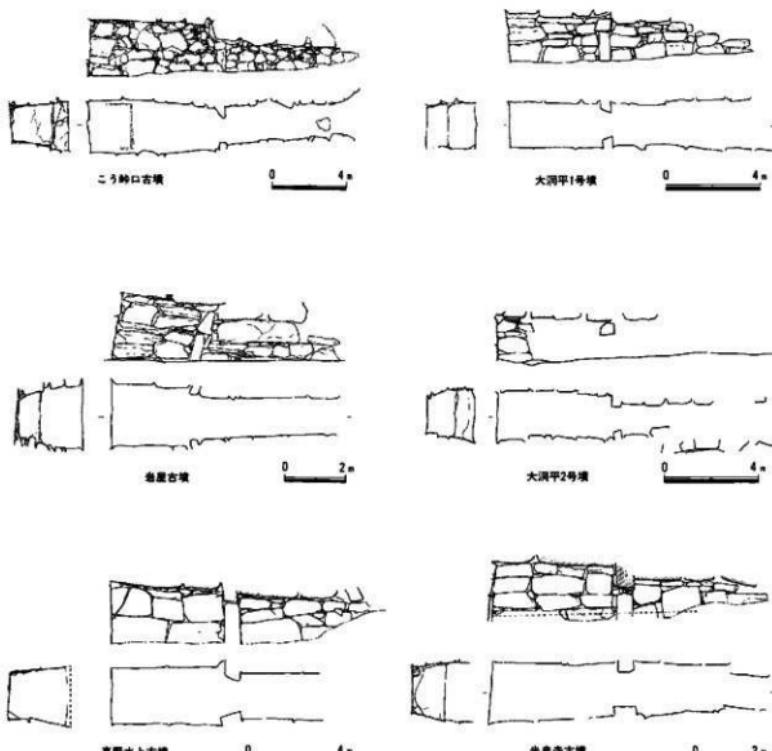
冬頭山崎1号古墳の石室に認められるいくつかの技法は、これまで述べたように飛驒地域では特殊なものといえる。腰石は、北部九州の6世紀以降の石室に広範にみられる技法であり、その影響の元に若狭地域では十善の森古墳後円部石室や獅子塚古墳の石室で6世紀初頭に認められ³⁾、美濃地域では周辺地域を経由してからの二次的な影響ながら6世紀後半に岐阜市北山3号古墳⁴⁾などでかなり改変されたかたちで成立する。樋石は、同じく北部九州の影響の元に若狭地域では6世紀初頭から認められ、美濃地域でも羽崎大洞3号古墳で同時期の資料が知られる。

これらの事例は、すべて北部九州の影響の元に成立したと考えられるものであり、冬頭山崎1号古墳の石室の系譜も同様である可能性が極めて高い。ただし、周辺地域での北部九州的要素が6世紀初頭に導入されてから冬頭山崎1号古墳と同時期に至るまでどのように変遷したのかが明らかでなく、直接対比しうる同時代資料は現在のところ認められない。しかし、若狭地域の十善の森古墳後円部石室は、腰石・樋石・胴張りが連動して用いられた近在の唯一の事例であり、北陸経由で飛驒地域に導入された可能性は高いといえよう。

飛驒地域の横穴式石室は、6世紀初頭前後に、やはり日本海を経由した北部九州の影響の元に「初期飛驒型横穴式石室」とでも呼ぶべき竪穴系横口式石室に類する特殊な石室が成立する。美濃地域・若狭地域をはじめ北陸地方には類例の認められないもので、形態などの変化は著しいが北部九州の石室に最も近似する。その詳細はここでは省くが、飛驒地域における後期古墳時代の前半段階には、美濃地域ではなく北陸地方、または太平洋ではなく日本海を経由した北部九州とのつながりを色濃く示し、後半段階は7世紀初頭を前後する時期以降に美濃地域からの影響一色に大きく変貌する。一つの地域において、これだけ大きな変化を見せる地域は希といえる。それは、地理的・地形的に閉塞的な位置にあるが故の変化かもしれない。

冬頭山崎1号古墳の石室は、このような大きな変化の狭間に位置し、横穴式石室としては「北」からの最後の影響の元に築造された北部九州系の横穴式石室であると考えられる。この転換期前夜における飛驒地域の石室形態の詳細は不明であったが、その空白を埋めるものの1つとして、重要な資料であるといえる。

- 1) 亀谷泰隆・長瀬治義1985「羽崎古墳群」可児市教育委員会
- 2) 入江文敏1986「若狭地方における首長墓の動態－主体部・副葬品の分析を通して－」『福井県史』資料編13考古本文編、福井県
- 3) 井川祥子1998「岐阜市北山3号墳」「(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書」第2集
(財)岐阜市教育文化振興事業団



出典「美濃の後期古墳」

第32図 飛騨の横穴式石室

第2項 冬頭山崎2号古墳にみられる特徴とその背景

冬頭山崎2号古墳の堅穴式石槨は、極めて特異な構造であり、その性格付けが困難である。ここでは、飛騨地域に現在までに知られる事例との比較を通して、2号古墳の位置づけを試みたい。

(1) 飛騨地域における板状石材を用いた石槨及び石室

飛騨地域における古墳の内部主体は、壁体を構成する用材によって①板状石材を主として用いるものと、②大型石材を用いるものとに分けることができる。本稿第3節で報告する1号古墳は②に、2号古墳は①に含まれ、両者が同一の古墳群を形成していることになる。

板状石材を用いる現在のところ最も古い事例としては、高山市の赤保木ボタ上5号古墳1・2号石槨・冬頭王塚古墳1・2号石槨を挙げることができる。ともに5世紀中頃～後半の築造と考えられる2基の堅穴式石槨をもつ円墳で、近接した時期に同一墳丘上に相次いで堅穴式石槨を造営している。これらは、壁体に用いられた石材の形状や床面に大型の板状石材を敷き詰める点で、冬頭山崎2号古墳の堅穴式石槨と共に通す。しかし、素掘りの壁体を利用する点は除外しても、例えば直線距離で100mと近接した冬頭王塚古墳のそれとは石槨規模・石材の積み上げ技法で異なる点が認められる。

石槨規模は、冬頭王塚1号石槨が長辺1.95m、短辺0.63m、冬頭王塚2号石槨が長辺2.8m、短辺0.68mであるのに対し、冬頭山崎2号古墳石槨は長辺3.65m、短辺0.81mと大きい。特に、石槨の幅が広い点が注目される。堅穴式石槨は蓋石をのせることを前提に壁体を構築するため、幅が広ければそれだけ大型の蓋石を架構することになる。

冬頭山崎2号古墳の石槨は、蓋石そのものを確認していないが、蓋石が架設された痕跡をとどめおり、架設技法としてはより高度なものを要求されたはずである。その点においても、冬頭王塚古墳に後続する年代と位置づけられよう。

石材の積み上げ技法では、冬頭王塚古墳の2基がとともに、板状石材（用材入手の便宜上、川原石が多用されるが）を基底部から蓋石直下まで一貫して小口積みするのに対し、冬頭山崎2号古墳では壁体の下段を長手積みし、上段を小口積みするという2段構成を探る。この技法は、後続する横穴式石室又は堅穴系横口式石室に見られる技法である。そこで、以下に飛騨地域の6世紀代に主流となる板状石材を多用した石室の事例と比較してみたい。

発掘調査の行われた事例は、現在のところ存在しない。しかし、開口した石室が数例知られ、その現地観察による比較をしておきたい。

飛騨地域における導入期の横穴系埋葬施設を持つ古墳は、現在のところ古川町所在の信包八幡神社古墳の石室である。全長64mの前方後円墳の内部主体として採用された南東に開口する石室で、全長5.3m、幅1.8m、高さ1.8mを測る。入り口付近が埋没しており、横穴式石室か堅穴系横口式石室なのかは判断できない。両側壁に板状石材を用い、下段を主として長手積みで、上段を小口積みに変換させる技法を探る。特徴的なのは奥壁の壁体で、板状石材の平（ひら）面を壁面として立てて1石で構成する点である。前述した「初期飛騨型横穴式石室」がこれで、このような壁面構成を採用した石室は、このほかに古川町所在の五阿弥塚古墳・澤第2号古墳、国府町所在の十王堂古墳・かうと洞2号古墳・和田口古墳、高山市所在の小丸山古墳が知られる。冬頭山崎2号古墳の石槨との比較で共通するのは、石

室幅が広いこと（かうと洞2号古墳で1.6m、小丸山古墳で0.95m）、そして側壁の整体が上下2段で技法を変換させていることである。

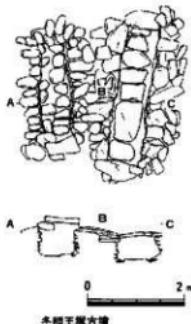
以上、管見した事例の比較から、冬頭山崎2号古墳の石槨は、5世紀代の堅穴式石槨の構造を引き継ぎながらも、積石技法では新しい要素を導入しており、横穴系埋葬施設への移行段階にあり、あるいはすでにそれが導入されてからの地域内部における折衷・変容形態として理解しうる。しかし、これは極めて少ない事例を一個面から比較したにすぎず、今後の発掘調査による類例の詳細な検討を待つて結論づけられるべきであろう。

①冬頭王塚古墳（高山市冬頭町）

冬頭王塚古墳は、冬頭山崎2号古墳と第10表で比較をする。



写真16 冬頭王塚古墳



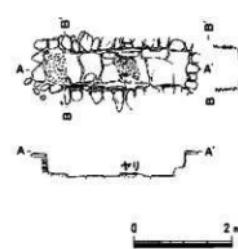
冬頭王塚古墳

②赤保木5号古墳（高山市赤保木町）

赤保木古墳群として9基の古墳が川上川左岸の河岸段丘に位置していたが、現在は5基の古墳が残存し、赤保木ボタ山5号古墳はその内の1基である。

冬頭王塚古墳と同形態の川原石を積んで構築した堅穴式石槨である。出土遺物は鉄劍2本とヤリ1本のため築造時期の特定することはできないうが、冬頭王塚古墳の5世紀中頃に比較される。

石槨の規模は、長さ2.87m、幅0.85m、遺存部分の深さ0.6mを測る。



赤保木ボタ山5号墳

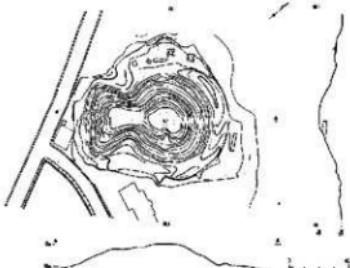
第33図 冬頭王塚古墳・赤保木ボタ山5号墳

第10表 冬頭王塚古墳と冬頭山崎2号古墳

	冬頭王塚古墳1号石室	冬頭王塚古墳2号石室	冬頭山崎2号古墳
位 置	高山市冬頭町88番地	同 左	高山市冬頭町1516
標 高	555m	同 左	587m
時 期	5世紀の中頃	同 左	5世紀末
古 墳 の 形 態	2段築成の円墳 北と東側の中腹に平坦部をもつ	同 左	2段築成の円墳 北側の中腹に平坦部をもつ
古 墳 の 大 き さ	径20m程度	同 左	径20m
石 室 の 規 模	竪穴式石槨 室内長1.95m幅0.63m 深さ0.60m やや剥張りに膨らみ	竪穴式石槨 室内長2.8m幅0.68m 深さ0.60m	竪穴式石槨 室内長3.65m 幅0.81m 深さ0.85m
石 材	蓋石は偏平な石 (漫飛流紋岩) 側壁は長円礫を用いる	蓋石は偏平な石 (漫飛流紋岩) 側壁は長円礫を用い上部に割石を混入させる	天井石 なし 側壁は漫飛流紋岩の割石
側 壁	円礫(川原石) 安定の為 粘土を厚めに敷いて積む 控え積みの石はない	円礫(川原石) 安定の為 粘土を厚めに敷いて積み 上部は偏平な割石を混用 している 控え積みの石はない	北東側の側壁のみ漫飛流 紋岩の割石を長手積みにし、 上部に長円礫を小口 積みにする。他方の壁面は、 岩盤を握って壁面と している
石 室 床	13個の偏平な円礫を敷いて 床面としている 小豆~やや大きめの礫が 敷き詰められている 床面や砂礫群を粘土が 覆っていた	7個の偏平な自然石と細 礫を敷き詰めている 床面の周辺や側壁の下は 粘土が堆積し礫を覆っていた	幅50~70cm、厚み約4cm の板石を6枚敷き、隙間に 小型の板石を埋めてい る
遺 骨	人骨(頭蓋骨・大腿骨) 6片 人骨ではない骨 1片 27本の歯(17~20歳) 北を枕にする	人骨(頭蓋骨・大腿骨・ 距骨など) 9片 (成人~老年期) 南を枕にする	人骨の出土はない 北を枕にする
遺 物	鉄製の直刀(85cm) 1口 10本以上の鐵鎌が束にな って出土 小玉 2 鉄具	直弧文鹿角装具鉄劍1口 25cmの鉄鎌 1 鐵鎌の束(27本) 素面鏡 1面 管玉 2 ガラス丸玉3・小玉1 瑪瑙丸玉 1	鉄劍(半球状金銅製品)1口 鐵鎌14本 漆塗りされた弓の残欠

③信包八幡神社古墳（古川町信包）

6世紀前葉と考えられる。全長64m、後円部径45.2mの前方後円墳である。内部主体は南東側に開口する横穴式石室である。石室は、板状石材を小口積みして構築し、全長5.3m、幅1.8m、高さ1.8mほどで平面形は長方形を呈し、一枚岩を奥壁としている。



第34図 信包八幡神社古墳

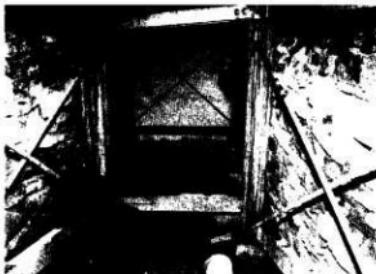


写真17 信包八幡神社古墳



写真18 信包八幡神社古墳

④かうと洞2号古墳（国府町瓜巣）

丘陵の中腹に位置する。径8mの円墳で石室の規模は、長さ約3.0m×幅1.6mの長方形を呈し、棺体配置が横方向とみられる。奥壁で高さ1.45mを示し1.66×1.05mの鏡石の上に板状割石を40cmほど長手積みにしている。左側壁は全面残るが、右側壁は奥壁接する継一列と床より30~40cmの割石が残存し、他は土圧により崩れている。奥壁より3.47mの位置の玄門に左右0.84mの間隔を開けた立石がある。

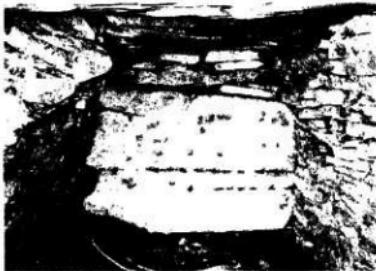
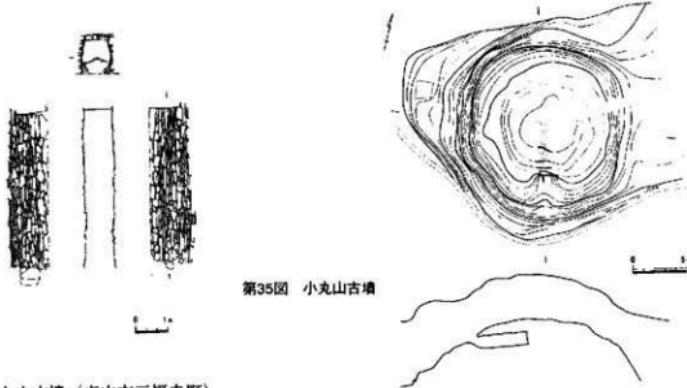


写真19 かうと洞2号古墳



写真20 かうと洞2号古墳



第35図 小丸山古墳

⑤小丸山古墳（高山市三福寺町）

6世紀前半の径15m、高さ2.4mの方墳？で、南側に開口する竪穴系横口式石室である。石室の規模は、平面形で長さ約4.85m×幅0.95mの長方形を呈している。鏡石の上に割石が長手積みにされている。側壁は流紋岩の板状石材が長手積みされ、壁面の上部では内傾し天井石が9枚積まれている。出入口部には閉塞石として使用した可能性のある偏平な石が残存している。



写真21 小丸山古墳（高山）



写真22 ねずみ軒古墳（高山）



写真23 ウシロゴ3号古墳（国府）

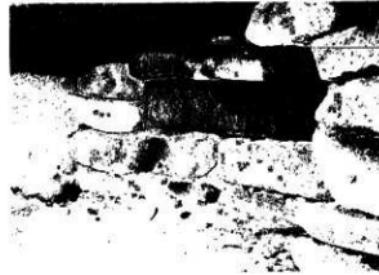


写真24 深ノ洞古墳（国府）

(2) 埋葬施設底部における溝について

第3章第3節で前述したように冬頭山崎2号古墳の石室内底部より溝が確認された。溝は床面となる6枚の板石の下に、長さ2.35m、幅0.34m、深さ13~20cmの溝が作られており、位置的には石棺内中央部にある。

この溝は、濃飛流紋岩質の地盤を掘り込んで石棺内で終始しており、他につながる痕跡は見られなかった。板状石材は、溝に蓋をするように置かれており石棺内と溝を明確に分けている。溝内部は空洞になっていたが、わずかに堆積した土の中から小玉が1点出土した。また、人頭大の石材が溝中央より南東側60cmの位置に溝を塞ぐように入っていた。石棺を構築する際に石材が偶然に入ったとは考えにくく、意図的に石材を置いたと考えられる。

埋葬施設底部に上坑や溝をもつ遺構は少ないので、底部に溝を有する埋葬施設として下記の3例が報告されている。

①小池古墳群2号土塚墓（京都府大宮町）

丘陵地にて13基の古墳と13基の土塚（墓）を検出し、溝をもつ埋葬施設は2号土塚墓だけである。

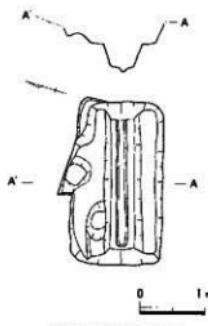
2号土塚墓は、木棺直葬と考えられ5世紀後葉に造営されたとしている。墓壙は隅丸方形を呈し、長さ2.51m、幅1.40m、深さ0.35mの浅い墓壙を掘り、それより一段深く長さ2.20m、幅0.56m、深さ0.35mの木棺部を掘り込んでいる。

溝となる部分は、その壙底より更に深く、棺の真下中央を東西にほぼ端から端まで貫通しており、墓壙外に出ることはなく墓壙内で終始している。溝の幅は0.15m、深さ0.08mである。¹⁾

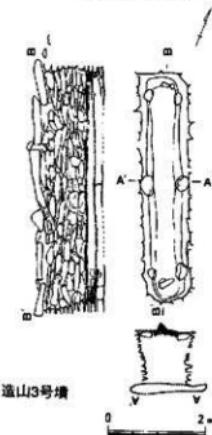
②造山3号墳（島根県安来市）

4世紀後半と考えられる方墳で、東西58m、南北44mを測る。内部主体は、偏平な割石を小口積みにした長さ4.75m、幅約1m、深さ約1mの細長い竪穴式石室である。床面の横断面がU字形に窪み割竹形木棺を収容したとみられるが、安定をはかるため両小口と棺の中程に川原石を各2個づつ配している。

他の特色として、粘土床ではなく川砂利を10~25cmの厚みで礫床をしている。その礫床の下は地山を削った平面をつくり、その中央に縱断した幅0.25m、深さ0.15mの溝を掘り、小型の偏平な割石をV字形に並べている。



小池古墳群2号土塚墓



第36図 底部に溝のある古墳(1) 出典「北原古墳」

礫床の下に溝が作られているため、室内に侵入した水は礫を通ってこの排水溝に集約される。溝に集まつた水は10cm以上低い南端に向かって流れ石室外に導かれる仕組みになっている。²⁾

③金蔵山古墳中央石室と南石室(岡山県岡山市)

全長165mの前方後円墳である。後円部頂部に2つの竪穴式石室を構築している。中央に位置する中央石室の規模は、長さ6.10m、東端幅115m・西端幅130mを測り、床面には粘土で敷き棺を据えたとみられる窪みがある。床下には地山をU字形に掘り込んだ排水溝が通じている。排水溝は、床面の低い石室西端でゆるいカーブを描いて石室外に伸びている。

溝の東端は、南北長1.2m東西長0.6m、深さ15cmの土坑に接続している。土坑は溝の底より5cm低く砂利が充填していた。

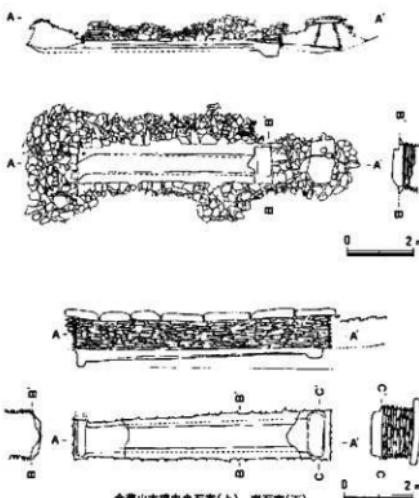
南側にあるもう1基の竪穴式石室を南石室といい地山を掘り込んで構築している。石室の規模は、長さ7.20m、東端幅1.35m、西端幅1.15m、高さ0.85mを測る。床面は、断面が弧状の粘土床で、その下は、地山でU字形の溝が貫通している。西端は一段と深く掘り込まれた土坑が南壁の下に向かって伸び、東端は中央石室と同じく土坑となっている。土坑内は砂利の利用はされていない。

中央石室と同様に溝は石室外の排水を意図したものと思われ、墳底に設けた排水施設には砂利を用いることなく粘土床が直接置かれていた。南石室は、中央石室に似た排水溝を設けながら結果的にその施設を活用しなく、南石室が中央石室の簡略化をしている。³⁾

埋葬施設底部の溝について造山3号墳と金蔵山古墳の石室は、水を石室外に出すように溝が設けられていて排水機能として設けている。小池古墳群2号土壙墓は、冬頭山崎2号古墳と同じように溝が石室内で終始しており、溝に入ってきた水は地山に滲みていくしか外に出る方法ではなく墓壙内排水となる。機能的に考えると、埋葬施設築造後に石室内に入った水を一時貯留することや排湿機能があると考えられる。

冬頭山崎2号古墳の溝に水を溢れるほど入れて排水の様子を見たが、9時間で岩盤に滲みてしまった。石櫛内に滲みてきた水が多量であっても板状石材の下に流れ込み、一時貯留したのち石櫛外へ排出されていた。

排水溝は古墳築造後の恒久的な除湿効果も期すると共に墓壙底における埋葬儀礼の舞台装置の一つと考えられる。排水溝の墓壙内での完結を遂げた変容形態と見られるが、儀礼行為の一つとして考え



第37図 底部に溝のある古墳(2) 出典「北原古墳」

られる。その根拠として、墓壙底儀礼における「水の使用」が考えられる。石槨の築造過程＝儀礼過程になっていて、築造の過程で何度も施朱する事があり、かなりの水を必要としたと思われる。実際、粘土床と同一レベルで朱を入れた土器埋納擴が神原神社で見つかっていることや時期は下がるが櫛山の後方部特殊施設にも排水溝がつき儀礼行為と排水溝の強い関連を示唆している。⁴⁾

竪穴式石室の場合、棺が安置される段階で数々の儀礼が一定の約束にしたがって執行される。木棺安置時やそれ以前に粘土床と棺に丹が塗られ、次に石室の内壁面や槨体上部をおおう粘土の上面、さらに天井石の下部やその粘土にも塗られるなど各段階で赤色顔料が塗布されている。特に竪穴式石室の基底部が構築され棺が安置された段階で首長盡を継承する重大な儀礼が行われる。

冬頭山崎2号古墳も床面全体に赤色顔料（水銀朱）が検出されている。北西側の頭部に位置する辺りには、赤色顔料が多量に検出され、床面となる板石の上に蓄積された土からも赤色顔料が検出された。長さ2.35m、幅0.34m、深さ13~20cmの溝は、儀式で用いる水にも十分に貯留できる空間をもつている。

石槨内の端部で排水処理する金蔵山古墳は排水方法として初源的なもので、中期以降はほとんど採用されなくなり、棺の下部に位置する排水溝は普遍的なものと考えられる。ただ「磯の有無からみた変遷」から、早い時期の造山3号墳石室には、V字溝が貫通し内部に板石や磯を詰めている。小池古墳群2号土壙墓は、木棺直葬と見られているが、構造的には割竹形木棺に近いものが想定されるし、排水溝の上面に板を敷いて蓋をし、棺底として用いていたとも考えられる。この後的小池古墳群2号土壙墓の排水溝には磯が入っていない。他の事例に於いても磯を持たない排水施設は磯を持つ排水施設よりも出現しないことは消滅する時期が遅い。つまり、磯の有無の関係は平行あるいは磯の使用から不使用へと変化する。⁵⁾

冬頭山崎2号古墳の溝は、磯を充填しておらず、唯一、人頭大の石材が溝を塞いでいた。飛驒地方には溝を有する石槨の類例がないため他の石槨との比較はできないが、排水溝が石室内で終始していることや2号古墳が飛驒における竪穴式石槨の移行期のものと考えられることなどから、この石材が磯を入れた名残とも考えられ、排水溝が終末段階で簡略化された埋葬施設であると考える。

1) 鈴木忠司・植山茂 1984『小池古墳群』大宮町文化財調査報告第3集 大宮町教育委員会

2) 出雲考古研究会 1985『荒島墳墓郡造山第三号墳調査報告』古代の出雲を考える4

3) 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊 倉敷考古館

4) 愛媛大学文学部 吉田 広先生のご教示による。

5) 朴美子 1986『埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察』『北原古墳』大字陀町文化財調査報告書第1集 奈良県立橿原考古研究所

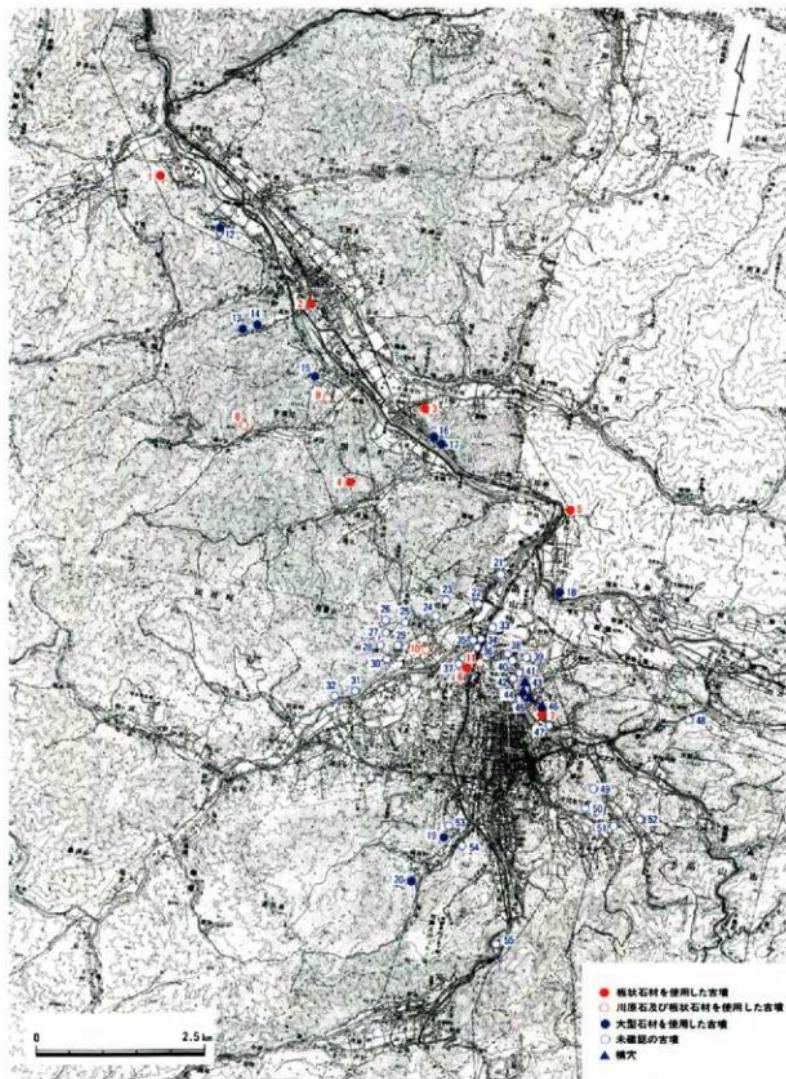
(3) 飛驒地域の古墳立地からみた2号古墳の位置

前述した①板状石材を主として用いる古墳と、②大型石材を用いる古墳は、築造時期の差が認められる。①は、5世紀中葉の竪穴式石槨にはじまり、横穴系埋葬施設では信包八幡神社古墳出土遺物から、6世紀初頭墳の築造と考えられ、それ以降ほぼ6世紀代に広範に採用されたと考えられる。②は、6世紀末前後になって、おそらく美濃地域からの影響の元に成立した大型の横穴式石室で、その典型例としては国府町所在のこう跡口古墳の巨大な石室が挙げられる。5世紀以降の飛驒地域の古墳の内部主体は、板状石材による竪穴式石槨、板状石材による横穴式石室又は竪穴系横口式石室、大型石材による横穴式石室の順に変遷したととらえられる。これらの内部主体の変遷と同時に、古墳の立地も変化しており、移行段階にあると仮に理解した2号古墳が、どのような位置づけになるのかを、立地の面から検討してみたい。

各段階の古墳分布を第38図に示した。まず、竪穴式石槨を持つ冬頭王塚古墳・赤保木ボタ山5号古墳の他、5世紀代の古墳と考えられるものは、すべて平地部に分布する。海拔450～550mの範囲にあり、尾根上に立地する冬頭山崎2号古墳は特異な立地といえる。これに対し、板状石材による横穴系の埋葬施設を持つ古墳は、主に海拔600～700mの屋根上の高所に集中する。その内で信包八幡神社古墳は、530m前後と比較的の低位に位置するが、前方後円墳として又は首長墓として立地に特殊な背景が存在したものと理解される。従来、国府町を中心にして、その存在が知られている多数の「山上古墳」は、調査が及んでおらず内部主体は不明であるが、この立地から推定すると板状石材による横穴系埋葬施設を伴う可能性が高い。6世紀末以降の大型石材を用いた横穴式石室は、山麓又は平地部に立地し、むしろ5世紀代の立地に近いものとなる。

以上の変遷から冬頭山崎2号古墳をみると、5世紀の立地ではなく、むしろ6世紀代のものといえる。これは、前述した移行段階にあることを裏付けるものといえ、おそらく冬頭王塚古墳の造営主体が、何らかの新しく導入された影響の元に墓域を山上へと移したものと推定される。その新しく導入された影響とは、現在のところ、北部九州から日本海・北陸地方を経由して導入された横穴式石室の技法と思想であると考えたい。

なお、立地の視点から、再び冬頭山崎1号古墳の横穴式石室をみると、大型石材を持ちながらも山上に立地する特殊なものといえる。前項で指摘したように、「初期飛驒型横穴式石室」から大型石材墳への移行期に位置するものであり、また、「北」からの影響のもとに築造されたことが、このような立地に反映されているものと考えられる。冬頭山崎1・2号古墳は、飛驒地域における古墳の2大両期にそれぞれ位置し、その背景にあるべき政治的・社会的な大きな変動のなかで造営されたものといえよう。



第38図 飛騨の古墳分布図

(建設省国土地理院発行の6万分の1地形図
「高山」「三日町」「飛騨古川」「船津」より)

第3項 「古墳群」としての冬頭山崎古墳群

今回の調査によって、2基の古墳と1基の横穴を検出した。3基の埋葬施設は、平地部に向かって西から東に突出する狭い尾根に密集し、「古墳群」を形成する。しかし、この「古墳群」はいわば、見かけ上のものであり、必ずしも造営主体が同一とはいえない。それは、それぞれの年代差があまりにも大きく、それによって埋葬施設の構造がまったく異なるからである。

3基の内、最初に造営されたのは2号古墳で、5世紀末頃の竪穴式石室を埋葬施設とする。1号古墳は、横穴式石室を埋葬施設として採用し、6世紀末頃の築造と考えられ、最後に1号横穴墓は7世紀後半段階のものと推定される。3基はおよそ100年毎に、まったく異なる技法のもとに築造されているのである。

2号古墳は、1体埋葬を原則とし、調査においても追葬の痕跡は認められない。墓としての機能は、一回性のものであり、墓前祭祀が継続したとしてもその後100年に及ぶ長期間に、新たな造墓が行われなかつたとは考えがたい。この空白を埋めるものが、当古墳群から西に進む尾根上のいわゆる「山上古墳」であろう。つまり、2号古墳に続くのは隣接する1号古墳ではなく、さらに尾根をのぼった位置に立地する未調査の古墳群である可能性が高い。それは、前項の古墳立地の変遷からも首肯されよう。

1号古墳は、6世紀代に「山上」に古墳群が展開した後、再び低位に降りてきたものと理解される。横穴式石室を埋葬施設とし、調査では確認されなかつたが追葬を前提として築造されたものと考えられる。従つて、墓として機能する期間は長く、墓前祭祀を含めた造営期間は長期に渡つたものと推定

第11表 飛驒の古墳

NO	古墳名	19	岩屋古墳	38	前平古墳
1	信包八幡神社跡古墳	20	ねずみ跡古墳	39	溝上古墳
2	五阿弥塚古墳	21	下切古墳	40	西ヶ洞古墳
3	十王堂古墳	22	中切正塚古墳	41	牧ヶ洞古墳
4	かうと洞1号古墳	23	中切上野1~5号古墳	42	馬場古墳
5	和田口古墳	24	寺尾古墳群	43	杉ヶ洞横穴
6	冬頭山崎2号古墳	25	与島1・3~6号古墳	44	七切1号横穴
7	小丸山古墳	26	与島1号古墳	45	七切2号横穴
8	深ノ洞古墳(岩塚古墳)	27	上切平野1・2号古墳	46	桧山1~3号横穴
9	ウシロゴ3号古墳	28	下やせ尾1・2号古墳	47	小池塚古墳
10	赤保木古墳群	29	真言屋敷裏山古墳	48	じじばば塚古墳
11	冬頭王塚古墳	30	ミヨガ平1・2号古墳	49	鷹ノ巣古墳
12	大洞平1~3号古墳	31	川上川左岸1号古墳	50	江名子古墳
13	高野光東寺古墳	32	川上川左岸2~5号古墳	51	町上野古墳
14	高野水上古墳	33	茂島古墳	52	三ツ塚古墳
15	海具江古墳	34	上ヶ見古墳	53	西野・色1~3号古墳
16	広瀬2号古墳	35	東田古墳	54	千鳥古墳
17	こう跡口古墳	36	流れ田古墳	55	二ノ瀬塚古墳
18	剣緒神社古墳	37	大洞塚古墳		

される。しかし、前節で指摘したように、1号横穴へは連続しない。1号横穴は、別の家族体の埋葬施設であり、1号古墳の機能が終焉した後におそらくこの尾根上における造墓の断絶期間を経て、新たな技法で造営されたと推定される。1号古墳の造営主体者が古墳造営の体力を存続しているとすれば、墓域はさらに平地部に下って展開したものと予測される。しかし、その可能性を示す事例は、現在のところ不明である。

2号古墳に先行する古墳は、近接して平地部に立地する冬頭王塚古墳及びその周辺に過去に存在した10基を越える群集墳²⁾であろう。冬頭王塚古墳とは整體の構築技法こそ違うが、床面構造や鉄製武器を主体とする副葬品配列などで極めて共通する。冬頭王塚古墳は、2基の竪穴式石槨を伴うが、2号石槨の後、1号石槨を連続して築いており、一体分の埋葬空間しか設定できない小型の竪穴式石槨は、一人毎に造り加えなければならない。墓域が平地から「山上」へと移行する背景の一つに、築造数の増大に伴う非生産域への移動があったのかもしれない。

以上の、断片的な資料とつたない考察をまとめると、本来の意味での古墳群は、以下のように展開したといえよう。

①冬頭王塚古墳（2号石槨→1号石槨）など、平地部群集墳の造営。5世紀中葉～後半。

②冬頭山崎2号古墳の造営。5世紀末。

③板状石材による横穴系埋葬施設を持つ「山上古墳」の展開。6世紀初頭～6世紀後半頃。

④冬頭山崎1号古墳の造営。6世紀末。

⑤大型石材による横穴式石室墳の山麓又は平地部への展開。6世紀末～7世紀。

以上は、同一系譜の家族体を前提とした古墳群の展開を示すものであるが、政治的・社会的変動の諸画期が指摘される古墳時代後期においては、同一地域内における古墳群の造営主体は、必ずしも同一とは限らない。しかし、連続性の強い位置関係にあることから、当古墳群においてはその前提是妥当と考えられる。

- 1) 冬頭山崎2号古墳に隣接した石組み造構は、前節で積石塚の可能性を指摘したが、前述したように残存状態が良好でなく、埋葬施設と断定することはできない。ここではそれを省く。
- 2) 大野政雄1971「王塚の築造年代」『冬頭王塚発掘調査報告』高山市教育委員会による。

第5節 中世の遺構（冬頭城跡）

(1) 主郭〔本曲輪〕(第40図、図版3)

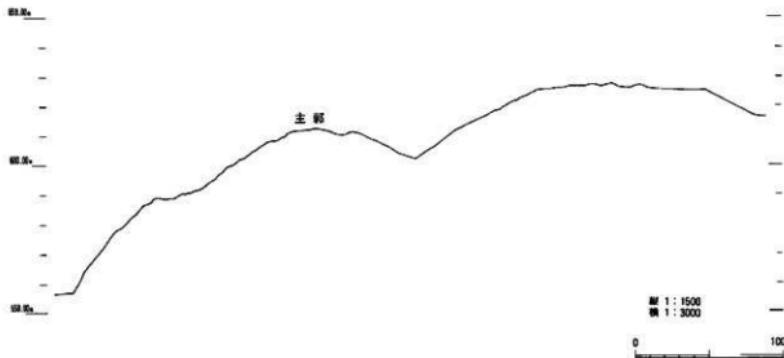
主郭は、中山丘陵先端部の小瀬山山頂部分に位置する曲輪である。南北に細長く北側が数段に削平された小規模な曲輪が連なっており、南側は箱堤状に掘削されたのち斜面につながっている。東側は急斜面で人が登ることは困難である。西側は東側に比べ緩斜面になっているものの徐々に角度がきつくなり、やはり登りは困難である。

主郭から麓まで約60mの高低差があるため高山市内を見渡すことができると共に、松倉城、中山城、飯山城、多賀山城（後高山城）、駄崎城、三仏寺城、鍋山城、三枝城など、高山の城を一望することができる。

主郭は、南北28m、東西3~6m、面積約112m²の規模を測る。主郭の南側と北側では、約50cmの高低差があり南側が高く標高612mを測る。主郭の南側は、墳丘部分が削削されているが古墳があったと考えられる場所である。この場所が後述する不明遺構1である。北側には、南北長さ13m、幅約3~4mと細長く面積約35m²を測る小規模な平坦部が残存している。城館を建てるには面積が少ない。穴（ピット）が6ヶ所（P3~P6）南北に直線的に確認されたが建物の柱穴という根拠が見られなかった。ピット内の覆土は暗褐色（7.5Y R3/4）であった。また、中世の遺物は出土しなかった。

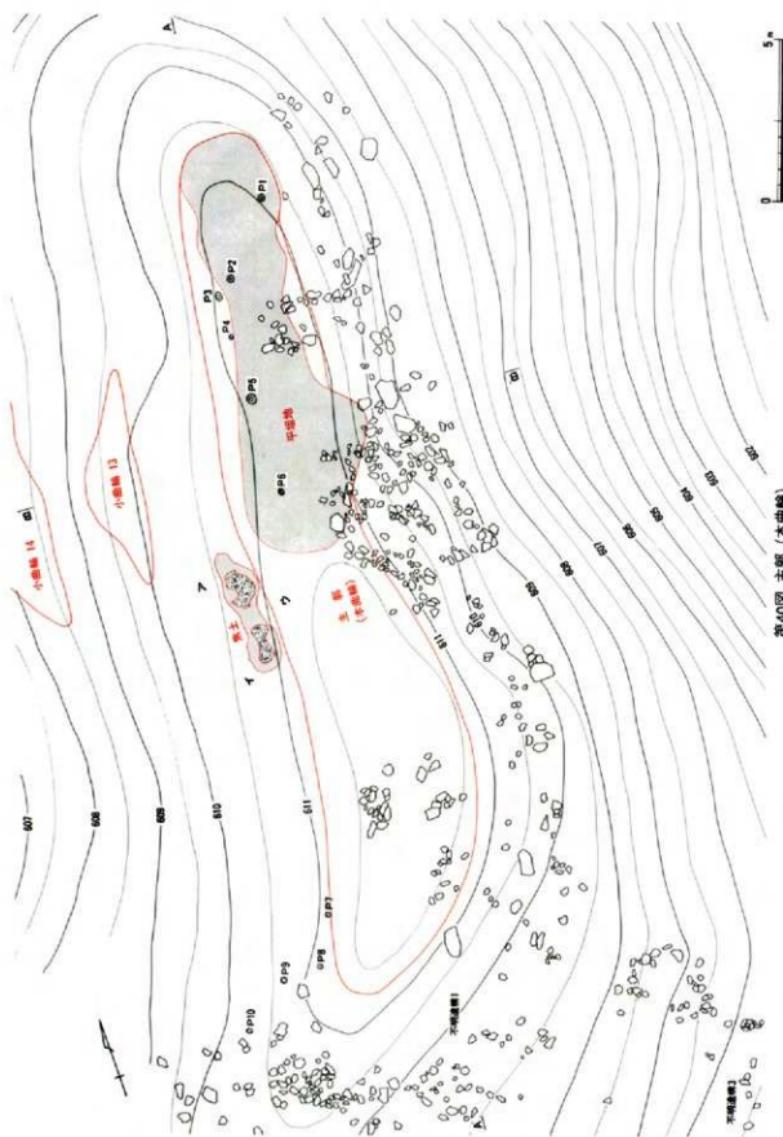
主郭中央部に焦土を検出した。ウの範囲は、3.9×1.1m、面積3.2m²を測り、土色は赤みが薄く橙色（2.5Y R6/8）であった。激しく焼けた焦土をア・イとし2カ所を検出した。アの面積は0.64m²、イは0.44m²を測り、厚み約10cmまで激しく焼けていた。土色は赤色（10R 5/8）であった。立地条件や主郭部での焦土の規模から狼煙痕の可能性が強い。

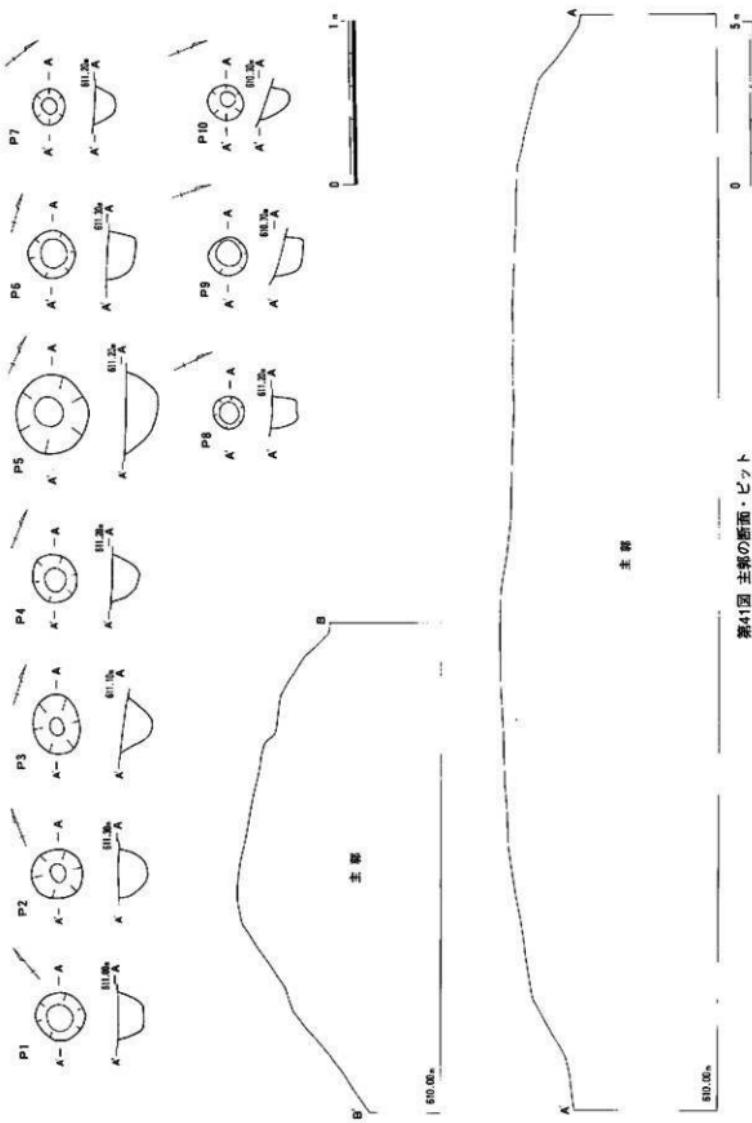
主郭西側は、緩斜面になって地盤にⅠ・Ⅱ層が薄く堆積しているが、中央部分には盛り土をして小規模な曲輪が2カ所（小曲輪13・14）作られている。



第39図 中山丘陵北部の縦断面

図40 国主峠(木曽側)





第41図 主郭の断面・ピット

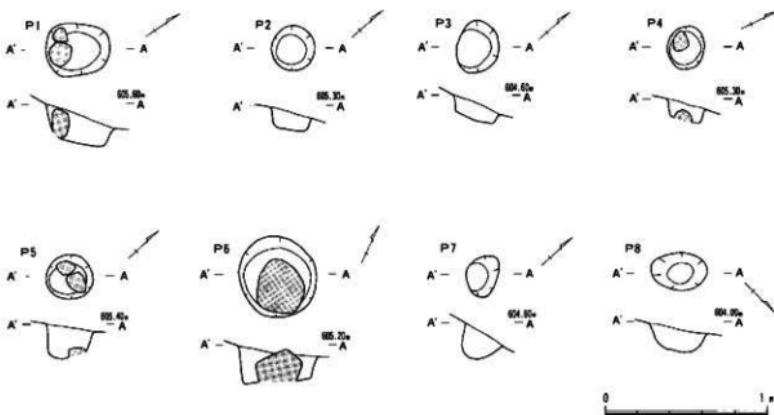
(2) 曲輪2 (第43図、図版12)

曲輪2は、主郭の北側に位置し、2つの小曲輪を経て緩やかな斜面ののち曲輪2に至る。主郭との比高は6.5m（標高605.5m）である。国府町につながる瓜巣街道（冬頭街道）を見下ろすことができ、川上川流域や三枝城を見ることができる。

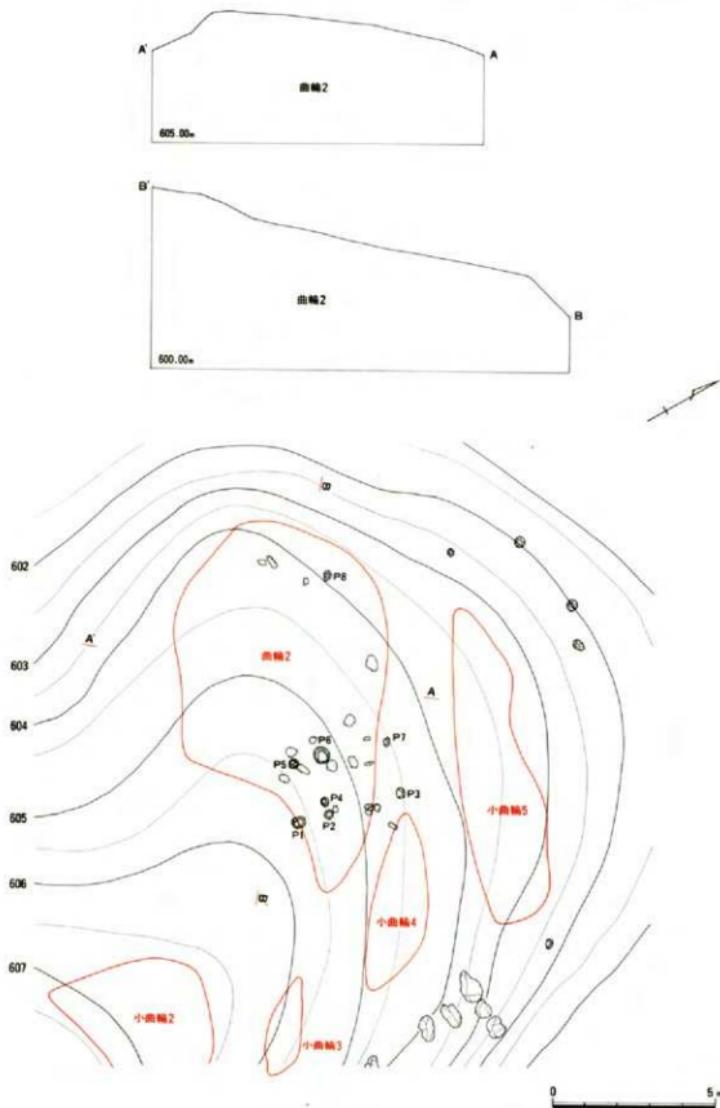
曲輪2は約10°の傾斜地に10.8×6.7m、面積約51.3m²の削平地である。調査時には約10~15cmの表土が堆積していた。

曲輪2ではピット（穴）を8ヶ所確認した。そのうち7は東側の急斜面に平行に並び、ピット内に石材を含むものが4点あった（P1・P4・P5・P6）。ピット内の覆土は暗褐色（7.5Y R3/4）～黒褐色（7.5Y R3/2）であった。P1~7は、約3.5mの距離で1mの高低差のある斜面で検出したが、曲輪2の削平地が近くにあることからも建物跡とは考えにくい。曲輪2は簡易的な建物を建てるには可能なスペースであるが、P8を検出した以外、他の遺構は検出しなかった。

曲輪2の西側には、曲輪の弧のラインに沿って急角度に削られた高低差約2mの切岸を検出した。



第42図 曲輪2のピット



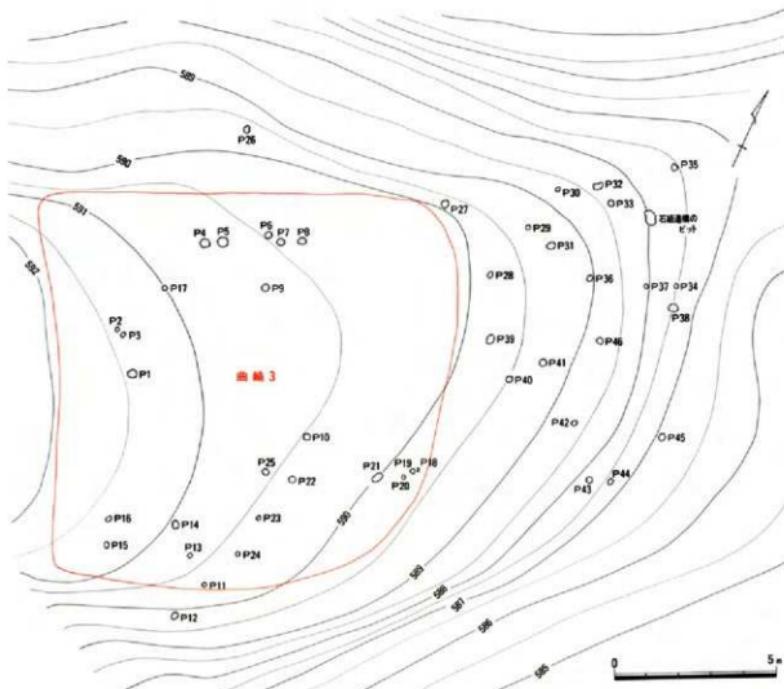
第43図 曲輪2

(3) 曲輪3 (第44図、図版12)

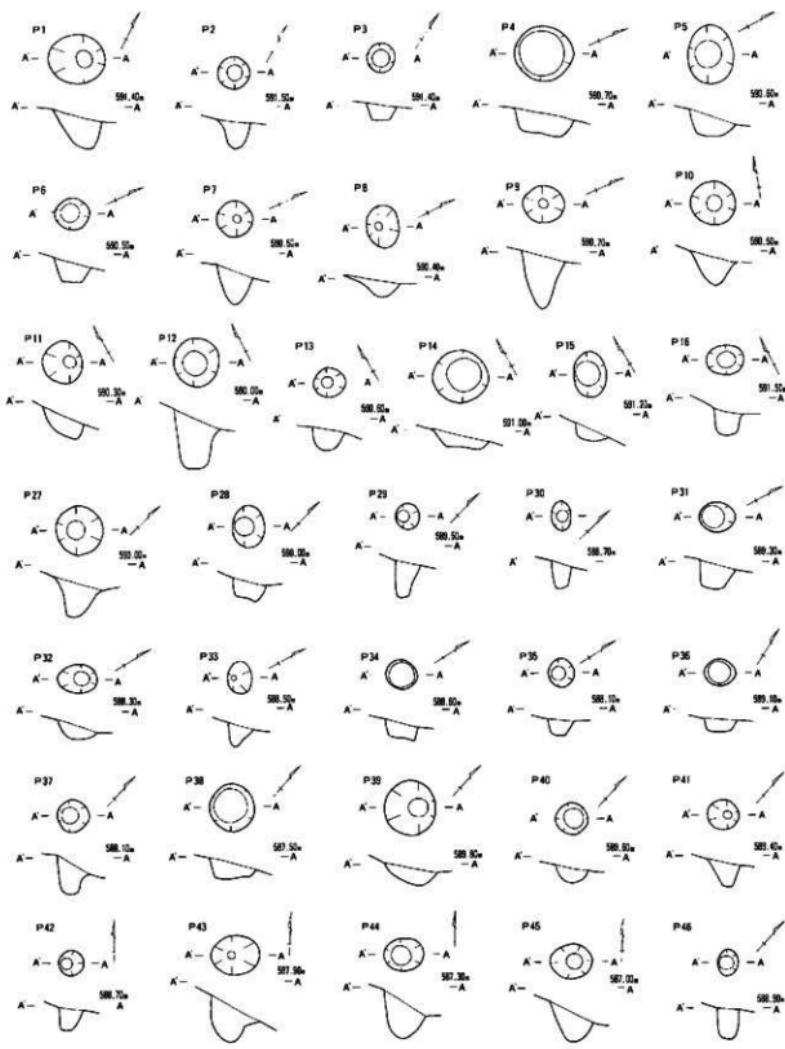
曲輪3は、小瀬山の中腹に位置し、主郭との比高は中央部で22m（標高は590m）の緩やかな傾斜地に作られている。同位置の下層に6世紀末～7世紀初頭の古墳が存在し、墳丘の上部を削平して周溝を埋めて曲輪が作られている。

曲輪3は、約12.3×12.5mで台形状を呈し面積が約140m²を測る。表土（I層）は約5cm堆積し、II層から24カ所にピット（穴）を検出した。ピット内の覆土は暗褐色（7.5Y R 3/4）～黒褐色（7.5Y R 3/2）である。P1は岩盤を掘り込んで作られていた。曲輪3のピットは北西側と南東側に多く集中しているが建物跡と思われる配列はない。また、南東側のピットは傾斜に沿って南北に並んでいた。曲輪3において中世の遺物は出土していない。

曲輪3の北東側に舌状にのびる緩やかな斜面がある。この斜面に20カ所のピットを検出した。柵の跡とも考えられるが、急斜面で高低差があるため建物跡とは考えにくい。



第44図 曲輪3



0 0.5m

第45図 曲輪3のピット

(4) 小曲輪

小瀬山の尾根は「くの字」状に折れ曲がって傾斜している。主郭より小瀬山の麓までの尾根には、小規模ではあるが急角度に削られた斜面と曲輪が存在する。この小規模な曲輪が存在するのは3つの地域である。一つは主郭より曲輪2と3の中間地点の屋根上と冬頭山崎2号古墳から麓に向かう屋根上の地域に存在する。あとの一ヵ所は、主郭の西側に2つ的小曲輪が存在する。

主郭から北側の小規模な曲輪を小曲輪1~12とし、西側の小規模な曲輪を小曲輪13・14とした。曲輪の様には土壘や櫓の痕跡がなく、中世の遺物は出土しなかった。

①小曲輪1（第47図、図版13）

小曲輪1は主郭の北に位置し、尾根を掘削して平坦地を生み出している。東西4.6m、南北1.9mの半円状を呈し、面積は約7.4m²である。中央部での標高は609.5m、主郭との比高は2.5mである。主郭に向かう傾斜は35°の急角度に削られており当時の様相を残している。小曲輪2から1に登る切岸も高さは低いが傾斜は40°の急角度で登り降りを困難にしている。平坦部に堆積していた表土は約5cmである。

②小曲輪2（第47図、図版13）

小曲輪2は小曲輪1の北に位置し、小曲輪1の斜面を削り平坦部を生み出している。東西5.3m、南北3.7mの半円形を呈し、面積は約16.0m²である。中央部での標高は607.8m、小曲輪1との比高は1.7mである。小曲輪3から2に登る傾斜は43°の急角度である。

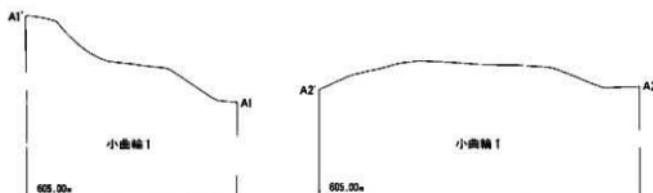
③小曲輪3（第47図）

小曲輪3は小曲輪2の北東に位置している。尾根を掘削して平坦部を生み出している。小曲輪3は350×105mと細長く面積は約2.7m²である。中央部での標高は606.8m、小曲輪2との比高は1mである。小曲輪3の東側は絶壁になり、小曲輪4より登る傾斜角は41°である。

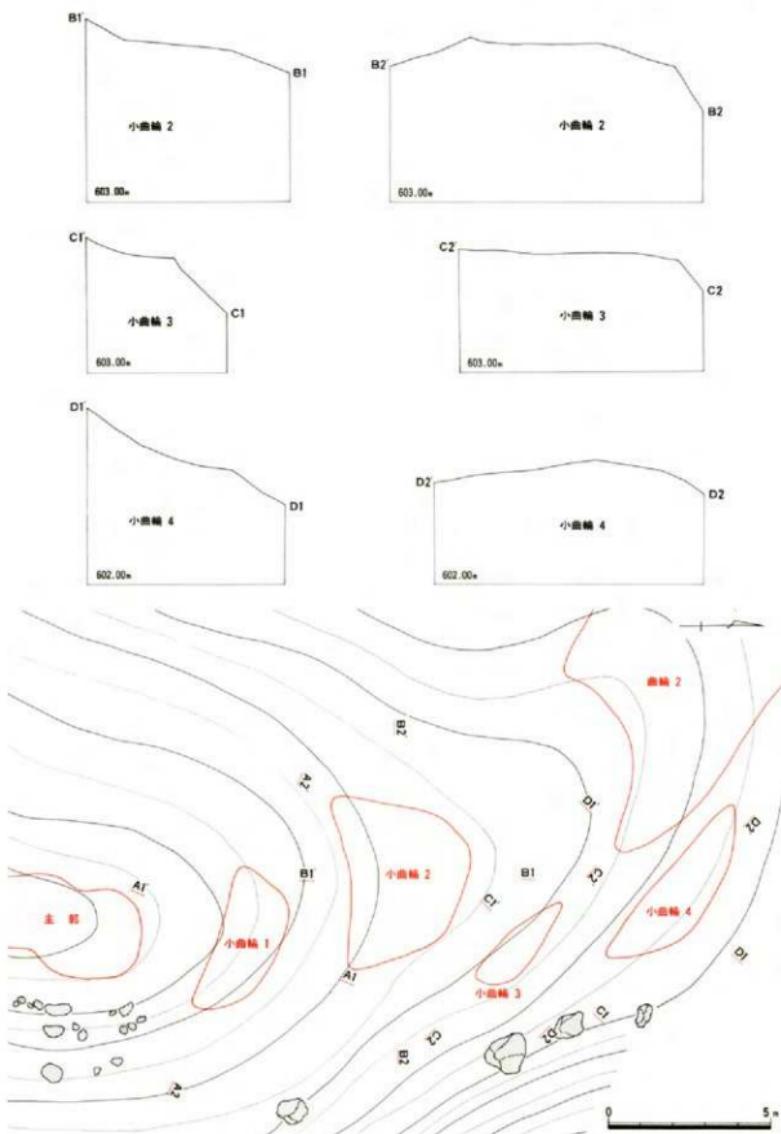
④小曲輪4（第47図）

小曲輪4は南の小曲輪3と西の曲輪2の間に位置する。小曲輪4は650×170mと細長く面積は約7.7m²である。中央部での標高は605.5m、曲輪2とは同レベルにある。

⑤小曲輪5（第48図、図版13）



第46図 小曲輪1(断面1)



第47図 小曲輪1～4、断面2～4

小曲輪5は、小曲輪4の北に位置する。また、曲輪2の下の段でもあり尾根上中央に位置する。東西9.9m、南北2.1m、半円状の曲輪が2つつながった様相を呈し、高度がわずかに異なる。曲輪の平坦部は崩れ緩やかな傾斜を持つが、曲輪2へつながる斜面が掘削されている。その曲輪2との比高は1mである。

遺構は、面積約18.5m²、中央部での標高は604.5mを測る。また、平坦部に登る傾斜は49°の急角度である。

⑥小曲輪6（第48図、図版13）

小曲輪6は、小曲輪5の東に位置し、小曲輪5の斜面を削り平坦部を生み出している。遺構は、4.40×1.80mと小規模で細長く築かれており、面積は約5.9m²を測る。中央部での標高は、602.0m、小曲輪5との比高は2.5m、平坦部に登る傾斜角は29°である。

⑦小曲輪7（第48図）

小曲輪7は、小曲輪5の北に位置し、尾根を掘削して平坦部を生み出している。遺構は東西6.2m、南北3.2mの半円形を呈し、面積は約14.1m²を測る。中央部での標高は601.8m、平坦部に登る傾斜角は21°で小曲輪8、9と連続して階段状につながる。

⑧小曲輪8（第48図、図版13）

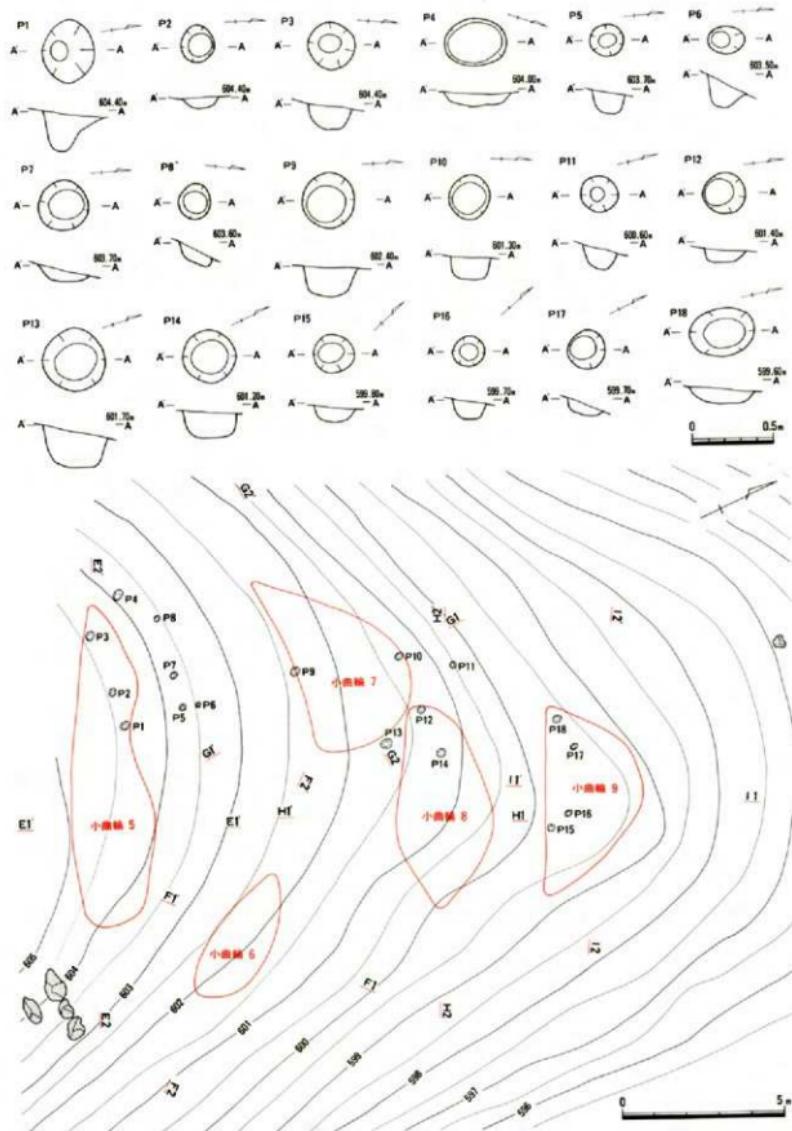
小曲輪8は、小曲輪7の北東で尾根上に位置し斜面を掘削し曲輪を築いている。平坦部をわずかに残しているが崩れがめだら緩やかな傾斜となる。

遺構は、東西6.3m、南北2.9m、面積は約13.1m²を測る。中央部での標高は601.0m、小曲輪7との比高は0.8mである。斜面が削られて平坦部に登る傾斜角は30°である。

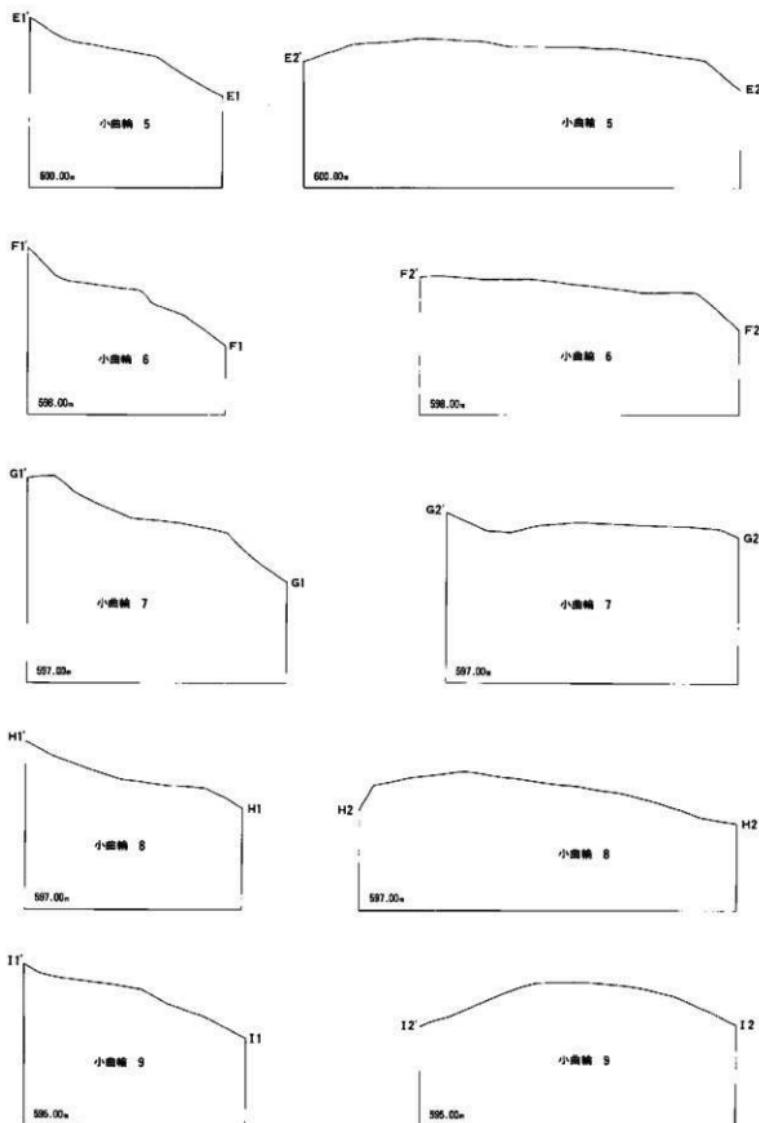
⑨小曲輪9（第48図、図版13）

小曲輪9は、小曲輪8の北で尾根上に位置し、斜面を掘削して平坦部を生み出している。曲輪3から約16m離れて小曲輪9が位置し、それより主郭に向かい小規模な曲輪が連続する。平坦部に登る傾斜角は28°である。

遺構は、東西5.9m、南北3.0mの半円形を呈し、面積は約12.1m²を測る。中央部での標高は、599.7m、小曲輪8との比高は1.3mで斜面が掘削されている。



第48図 小曲輪5~9・ビット



第49図 小曲輪断面5~9

⑩小曲輪10（第50図）

小曲輪10は、尾根上の小曲輪11・12と連続しており、曲輪として利用された可能性が高いため中世の遺構として小曲輪10を設定した。

遺構は東西7.5m、南北3.3mの半円形を呈し、安定した平坦部を築き面積は約22.9m²を測る。中央部での標高は186.5mである。また、平坦部に登る傾斜角は30°である。

⑪小曲輪11（第50図）

小曲輪11・12は調査区域外であったが、曲輪の連続性があるため掘削調査は行わず、計測のみ実施した。

遺構は、小曲輪10の北に位置し、尾根を掘削して平坦部を生み出している。東西6.1m、南北1.7mで細長く面積約7.8m²を測る。中央部での標高は583.3m、小曲輪10との比高は3.2mである。平坦部に登る傾斜角は28°である。

⑫小曲輪12（第50図）

小曲輪12は、小曲輪11の北に位置し、尾根を掘削して平坦部を生み出している。この平坦部に登る傾斜角は33°であるが、徐々に傾斜を増して麓近くでは64°の急勾配となり登りが困難である。小曲輪12より北下には城郭遺構は存在しないと思われる。

遺構は、東西8.6m、南北3.5mの半円形を呈し面積は約21.8m²を測る。中央部での標高は578.5m、小曲輪11との比高は4.8mである。

⑬小曲輪13（第51図、図版13）

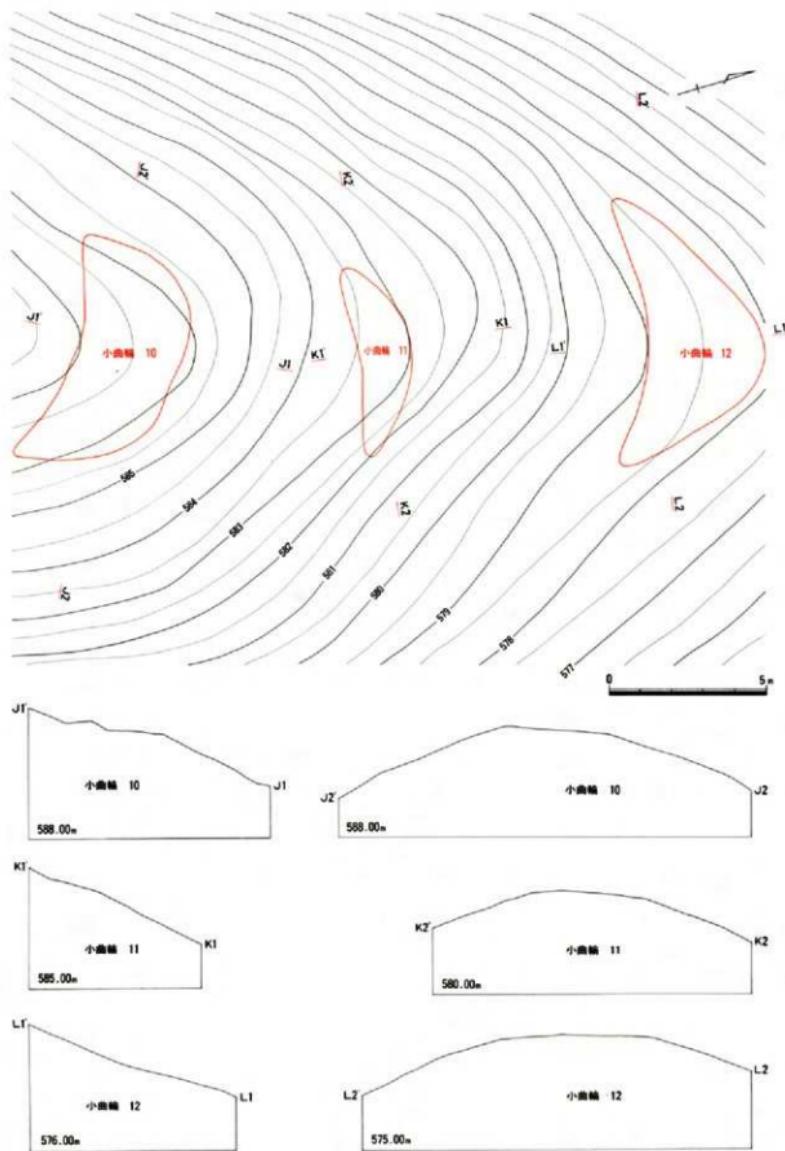
小曲輪13は、尾根上ではなく主郭の西に位置している。西斜面の一部を盛り土した部分で、斜面は岩盤まで掘削し平坦部を生み出している。

小曲輪13は、東西1.8m、南北6.8mで細長い三角形を呈している。面積は約7.0m²を測る。中央部での標高は609.7m、主郭との比高は2.3mである。平坦部に登る傾斜角は35°である。

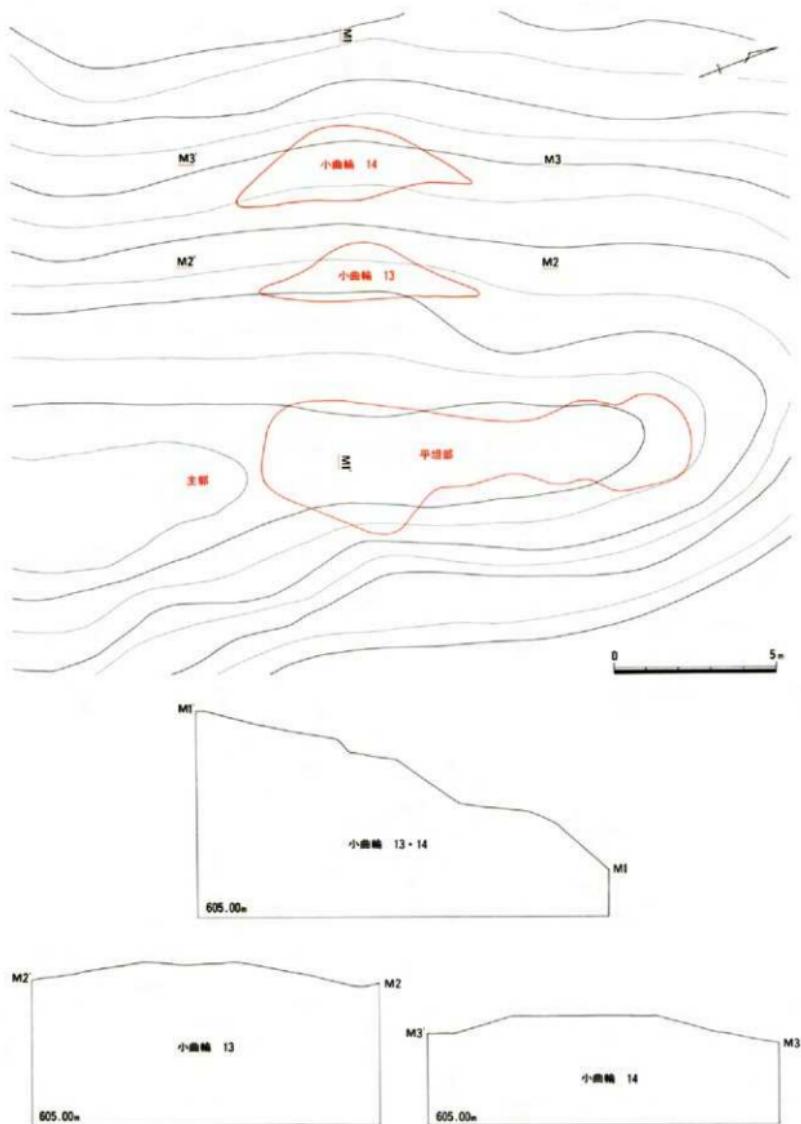
⑭小曲輪14（第51図、図版13）

小曲輪14は、小曲輪13の西に位置し、13と連続して2段の曲輪を築いている。盛り土をして急斜面や平坦部を作り出している。

遺構は、東西2.4m、南北7.3mで丸みのある三角形を呈している。面積は約10.7m²を測る。中央部での標高は608.3m、小曲輪13との比高は1.4mである。平坦部に登る傾斜角は41°で急勾配である。



第50図 小曲輪10~12、断面10~12



第51図 小曲輪13・14、断面13・14

(5) 不明遺構 (S X-1・2・3)

不明遺構とした3つの遺構は調査区の南に位置する。不明遺構1は主郭の南側半分である。不明遺構2は主郭南側の凹状に掘削された場所であり、不明遺構3は不明遺構2の東側の中腹に位置する。

不明遺構1 (S X-1) (第40・53図)

不明遺構1とした場所は、城郭遺構の主郭として使用された南半分の位置である。主郭は、前述したように細長く北側と南側ではわずかに標高が異なる。主郭周辺には石材が多く出土しているが、主郭の南側半分(不明遺構1)から川原石が出土したことや20トレンチ③～⑤に自然の堆積層とは異なる層を確認したこと、石材が混入する層から土師器片が出土したことから山上古墳の可能性はあるが、主体部となる場所が削平されているため不明遺構とした。また、不明遺構2を挟んだ南側の調査区外にも古墳と思われるマウンドがある。

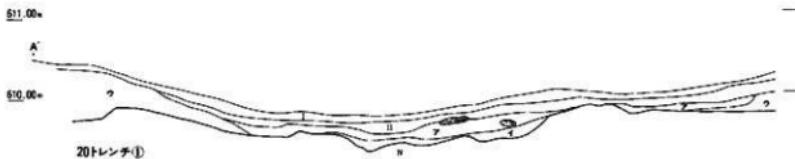
不明遺構1の西側は19°の傾斜地である。地盤の5～10cm程上に表土が堆積している。東側の急斜面には大型の石材が多数出土した。また、南西部には約30cmの川原石が多く出土した。

不明遺構2 (S X-2) (第52・53図、図版10)

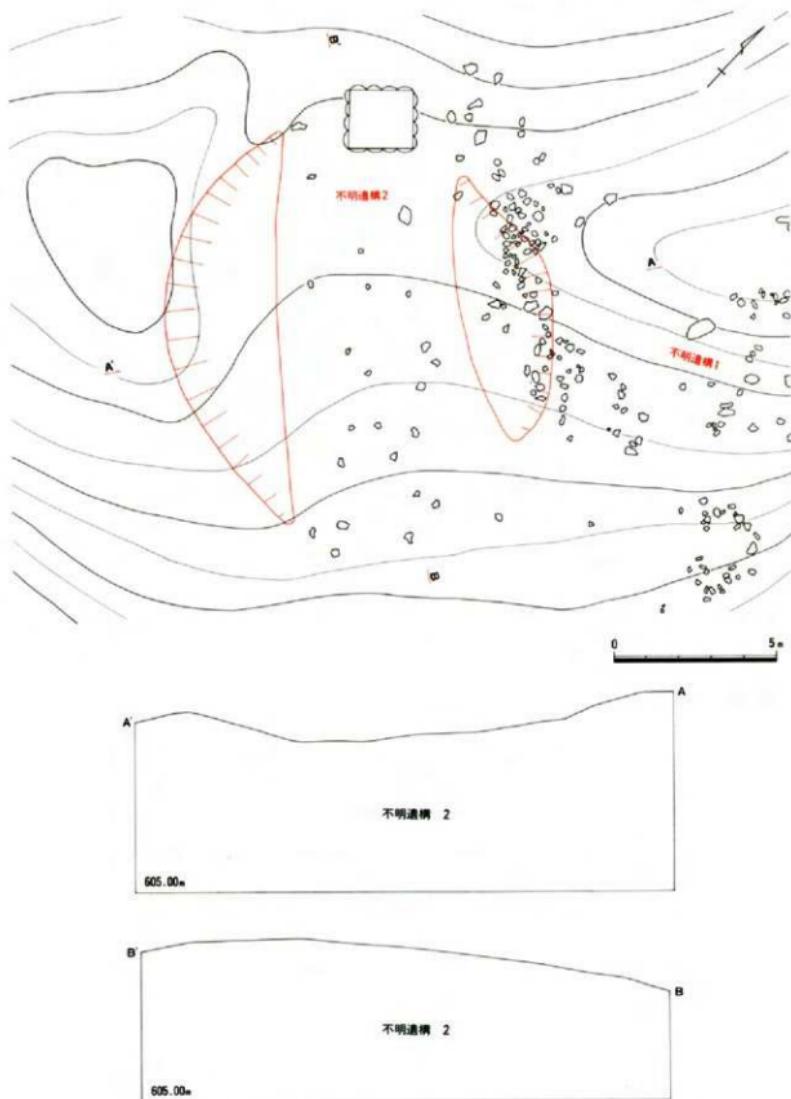
不明遺構2は、主郭の南側に位置する掘削された場所である。不明遺構2の北西側に墓があり、墓碑に「慶応元年佐助」と記し西側の冬頭村に向けて建てている。この墓は、不明遺構2の一部を掘り下げているため不明遺構2が近世以前に掘削されていたことは明らかである。形状は中世の箱塼のように掘られているが深さが浅く幅も広く傾斜も緩やかなことから城郭遺構とはいえない。

不明遺構3 (S X-3) (第54図、図版15⑥)

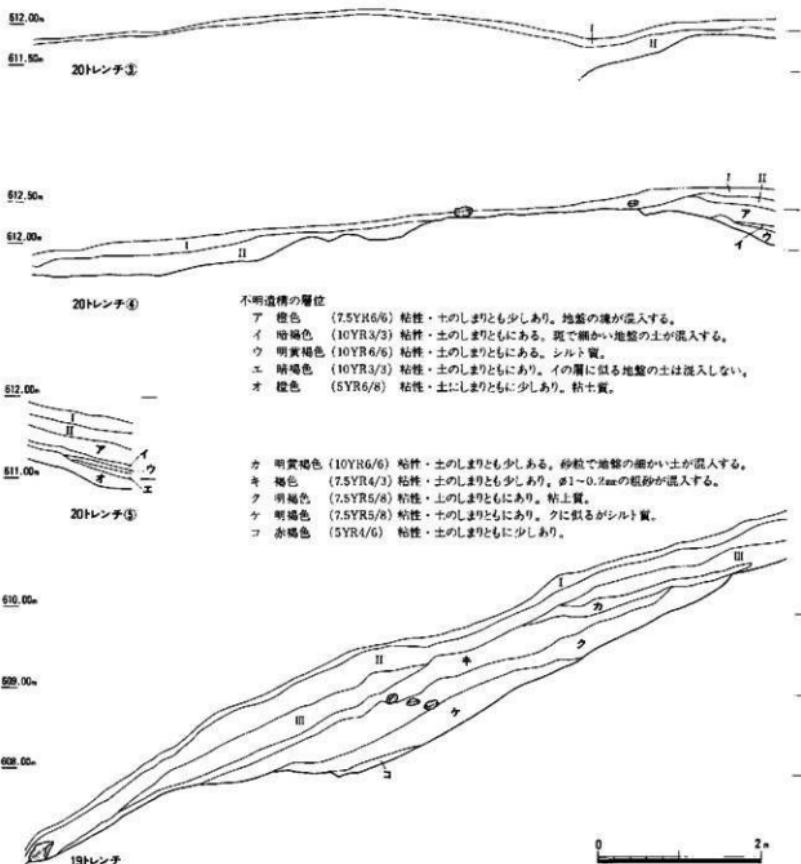
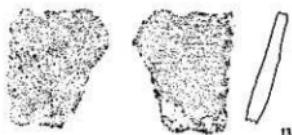
不明遺構3は、不明遺構2の東側の中腹に位置し凸状に膨らんでいた。19トレンチにて試掘し土層を観察した。遺物は出土しなかったが、周辺より冬頭山崎2号古墳と同じ板状石材が数点出土した。



第52図 不明遺構2



第53図 不明遺構1・2



第54図 不明遺構1・3、不明遺構1 出土遺物

第6節 冬頭城跡について

第1項 冬頭について

冬頭城は、戦国時代の城で城主は小瀬六兵衛冬任とされ、中山豊前守の代官とも言われているが定かではない。¹⁾

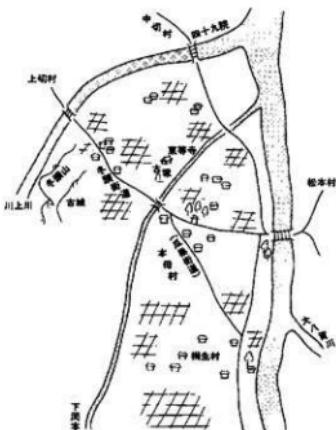
冬頭城や城が位置する冬頭の地について記載された文献は少なく、中世の冬頭については前述(12頁)の通りであるが、江戸中期の飛驒国中案内や明治初期にまとめられた斐太後風土記には、近世の冬頭の様子が記されている。冬頭村について飛驒国中案内は「冬頭村に古城跡山あり、城主は不相知る古き事なり」と記し、城の存在を伝えている。

「斐太後風土記」では、挿し絵(第55図)と共に「民家36戸、村人210人、産物として米525石、稗、大麦、小麦、大豆、菜種、桑、楮、藍、大蘿、小蘿、布、雜魚、蜆を収穫している。」と記載し、江戸時代の冬頭村の様子がうかがえる。また、冬頭城跡について「村名義は、口碑に傳云。古此里に郷士ありて(姓氏不詳)冬任と云、此の南の山上に城壁を築いて住ける故、村名をも冬任と唱へしに、其後世間にては任字を頭字に代えて(假字のたかへるをもしらず)書により、終に冬頭とのみかくこと成ぬとぞ。」と記し、「冬任」という人物の存在を示し城を築いていた事を伝えている。

冬任については、小瀬山の麓の東等寺18代目住職恩了師(明治初～昭和初)が、寺宝をもとに下記のように記している。東等寺は、現在真宗大谷派として20代目を引き継いでいるが、東等寺の開基「釈善智」は、もとは飛驒国司跡小路基綱の家臣で俗名を「七郎冬任」といった。当時、照蓮寺の開基嘉念坊善俊上人の教えは白川村、荘川村、清見村、川上川沿いへと広まり、冬任は基綱のすめで善俊上人より教えを受けて出家し法名「淨善」を賜り、基綱のもとを去った。基綱から主従の御形見として親鸞上人直筆の六字名号を賜った。冬任は、これを寺宝として草庵に安置して念佛と農業に励む生活をおくった。その後、冬任は越前吉崎で蓮如上人の教化を受け、上人の六字名号と「釈善智」の法名を賜り1474(文明6)年現在の冬頭の地に道場を開いた。しかし、冬任は、控え目で自分の姓をあかさなかったため、村人は冬任を名前で呼び、やがてこれが村名「冬任村」になった。後に、金森長近が飛驒を支配したとき冬任村は、冬頭村に改称された。

冬任の息子七郎兵衛も父と同じく信心深く、京都山科の本願寺九世実如上人のもとを訪れ善正の法名と上人裏書きの方便法身尊形を賜り、東等寺の開基仏となった。1683(天和3)年には、東本願寺より木仮本尊と東等寺の寺号を賜り、1729(享保10)年本堂が建立されて現在の20代目竹田雅文師に至っている。東等寺の寺名「東等」も「冬頭」の音をとっており「冬頭」とよばれる地名の始まりが、この冬任の名から付けられた可能性は高いと考える。

1) 森本一雄 1987 『定本 飛驒の城』

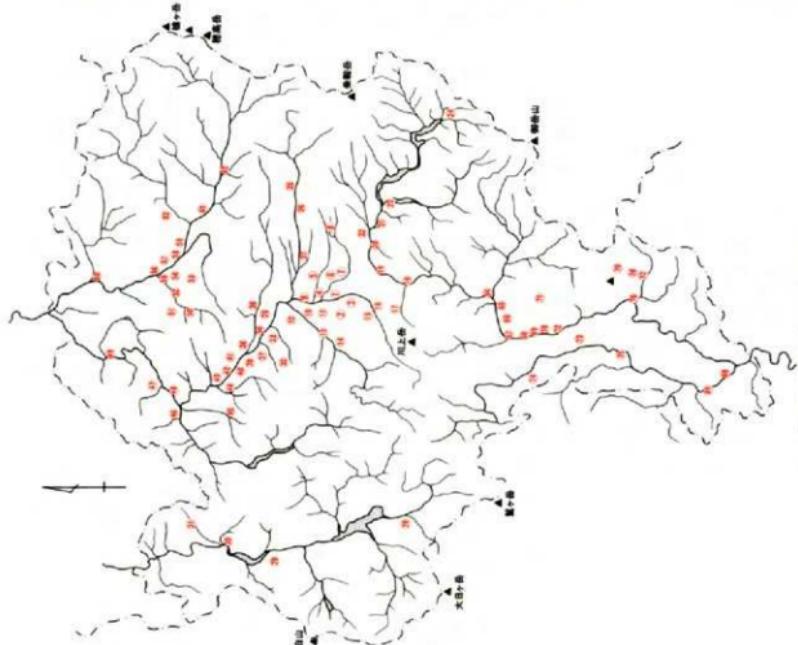


第55図 冬頭村「斐太後風土記」を加筆修正

第12表 飛騨の主な城砦

① 高山城	高山市西山城	下矢多城	吉城郡古川町上気多
② 松倉城	西之一色町	小島城	○ 沢河
③ 板山城	○ 千鳥町	野口	○ 野口
④ 黒崎城	○ 大新町	○ 小島(後深九城)	○ 野口
⑤ 溝山城	○ 浅田内町	○ 小島城	○ 信包
⑥ 岩城	○ 山口町	○ 小黒引城	○ 河村角川
⑦ 保原保義	○ 江名子町	○ 角谷	○ 宮川(西忍)
⑧ 佐藤	○ 井手町	○ 忍城	○ 小谷
⑨ 三豊寺城	○ 三豊寺町	○ 指望城	○ 燐谷
⑩ 三乳寺城	○ 各須町	○ 通田(山田)城	○ 神岡町西
⑪ 三重城	○ 中山町	○ 八賀城	○ 伏方
⑫ 三柱城	○ 上切町	○ 寺林城	○ 寺林
⑬ 三田城	○ 三田町	○ 伸長(田代)城	○ 金崎
⑭ 知佐城	○ 大野郡高村治谷	○ 金森左近城	○ 朝浦
⑮ 白坂城	○ 岩下城	○ 八幡山城	○ 魔
⑯ 地蔵城	○ 久々野町無数河	○ 高尾源治城	○ 町
⑰ 野坂城	○ 日見山城	○ 林生野	○ 魔生野
⑱ 野坂城	○ 甲幡	○ 石神答(一松)城	○ 石神
⑲ 上ヶ見城	○ 甲幡	○ 土(奥ケ)城	○ 土
⑳ 青崖(和田)城	○ 上ヶ見	○ 天元城	○ 上宝村井戸
㉑ (黒川)城	○ 井戸	○ 学生及城	○ 幸生茂
㉒ 亂多城	○ 黒川	○ 尻高城	○ 田代(忠野)城下
㉓ 乱根城	○ 井生川村北方	○ 抜戸城	○ 亂原宮田
㉔ 林ヶ城	○ 木曾町	○ 井戸城	○ 六ヶ瀬
㉕ 尾崎城	○ 尾崎	○ 中郷城	○ 田淵洞
㉖ 児白城	○ 町方	○ 今城	○ 上呂
㉗ 遠賀城	○ 伊那村牧戸	○ 坪之守城	○ 桂溝
㉘ 保可城	○ 白川村保木體	○ 保可城	○ 板洞
㉙ 保可城	○ 保可	○ 桜谷城	○ 萩原
㉚ 丁井谷城	○ 牛首	○ 旗瀬城	○ 古岡
㉛ 高金城	○ 古城郡古伊豆町	○ 横尾山古闇城	○ 旗瀬中切
㉜ 広瀬城	○ 伊那村	○ 伊達合城	○ 下山
㉝ 山崎城	○ 伊那村	○ 駒繩城	○ 下野山
㉞ 賀輪城	○ 伊那村	○ 落城	○ 森城
㉟ 駒輪城	○ 伊那村	○ 八日町	○ 宮地
㉟ 駒輪城	○ 古川町高野	○ 萩町	○ 小野寺城
㉞ 境城	○ 境町	○ 高野	○ 稲敷城
㉟ 通内山(足見)城	○ 通内山(足見)城	○ 上野	○ 保木山城
㉞ 通内山(足見)城	○ 通内山(足見)城		○ 所野城
㉞ 通岩城			○ 戸部

出典：飛騨全史

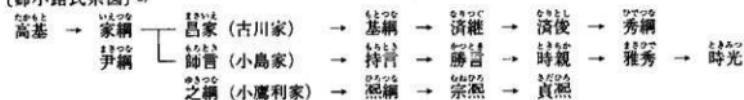


第56図 飛騨の主な城砦分布図

第2項 南北朝～戦国時代の飛驒

南北朝時代の飛驒は、南朝から国司、北朝から守護が置かれて互いに勢力を争うことになった。

1334（建武元）年、姉小路家綱は南朝から国司に任じられ、小島城に居を構えて北飛驒において勢力を伸ばした。1378年、家綱は従三位・参議に叙任されたが、翌年、自らその職を退いて弟の尹綱に譲っている。この頃から伊勢国北畠、土佐国一条とともに飛驒国姉小路が三国司として力を増している。室町時代は国司の守護化や国衛領の守護分領化が進み、国司は名目のみとなり武家によって称せられていた中で、この三国司が、南北朝から織田期まで公家出の国司として続いたのは異例である。¹⁾

〔姉小路氏系図〕²⁾

1359（延文4）年、足利幕府は、近江国の守護佐々木道誉を飛驒国の守護に任命し、それ以後、守護は京極氏が世襲した。京極氏は、出雲・隠岐の守護も兼職していたために在国せず、守護代として家臣の多賀氏・高山氏・三木氏を派遣して南飛驒に勢力を伸ばした。

高山氏は天神山城に居城し、多賀氏は飛驒の守護代として三仏寺城に居城したが、やがて衰え、三木氏が台頭してきた。三木氏は京極氏の被官で、守護代多賀氏を祖とするとも伝えられているが、1521（大永元）年、三木直頼が三仏寺城に拠って瀧郷、三枝郷、大八賀郷を攻めて大野郡に進出し、多賀氏をしのいで実権を握った。²⁾

〔京極守護系図〕 高氏 → 高秀 → 高詮 → 高光 → 高数 → 持光 → 政高 → 経秀

〔三木氏家系図〕 正頼 → 久頼 → 重頼 → 直頼 → 良頼 → 自綱 → 秀綱

1399年の応永の乱後の飛驒は、江馬氏が神岡を中心とした高原川流域に勢力を伸ばし、姉小路が古川盆地に、三木氏が南飛驒に領地を持ち三者が互いに勢力を競っていた。

1411年（応永18）年、幕府は、飛驒国の守護京極高光に姉小路尹綱の討伐を命じ、弟の京極高数が越前の斯波氏や信濃の小笠原氏の協力を得て姉小路を攻めた。姉小路尹綱は、後龜山法皇の勅命を受け土豪広瀬常登入道の協力のもと向小島城・小島城で戦うが、この戦いに敗れている。（応永十八年の役）その後、姉小路は、師言が飛驒国となり小島家（嫡流）と称して小島城に住み官川右岸の勢力を保持し、姉小路の支流小鷹利之綱は、向小島城を根拠地として官川左岸に勢力を伸ばした。師言の弟昌家は古川城を拠点として古川盆地を中心に北飛驒に勢力を伸ばすことになった。

16世紀前半の飛驒の戦国期には、南飛驒益田郡の三木氏、北飛驒高原郷の江馬氏、白川郷の内ヶ崎氏が比較的大きな力を持ち、その間にあって高山・古川盆地を中心に小豪族が勢力を競い合っていた。その主な者は、中山城の岡本豊前守、三枝郷の山田紀伊守、江名子の畠六郎左衛門、大八賀郷の鍋山豊後守、小八賀郷の大谷蔵人や森人守、久々野郷の一宮氏、古川盆地には姉小路氏から分かれた小島・小鷹利・古河の三家、姉小路の家臣から台頭した牛丸重親、広瀬郷の広瀬氏である。³⁾

飛驒の諸豪族は、周囲の戦国大名上杉・武田・織田等の動静をみながら割拠していたが、1558年、三木自綱が天神山城を攻めて高山氏を滅ぼし、三仏寺城を落として自分の城としたのをはじめ、永禄

～天正年間までの間に飛騨の諸豪族を支配下としていた。1582年、織田信長が本能寺で討たれると江馬輝盛は三木を倒そうと国府町八日町に出陣するが、三木はこれをむかえ討つて飛騨を平定した。

織田に代わり豊臣秀吉が天下統一を進めていたが、三木はこれに従わず越中の佐々成政と手を結び秀吉に対抗したため、秀吉は1585（天正13）年、越前の金森長近に飛騨攻めを命じ三木を攻め落とした。これにより飛騨の群雄割拠の時代は終わった。

- 1) 岐阜県 1969『岐阜県史』飛騨の国司と守護
- 2) (財)金森公頤彰会 1986『金森史』室町時代から戦国時代へ
- 3) 高山市教育委員会 1986 高山城跡発掘報告書Ⅰ 高山城の歴史



写真25



写真26



写真27



写真28

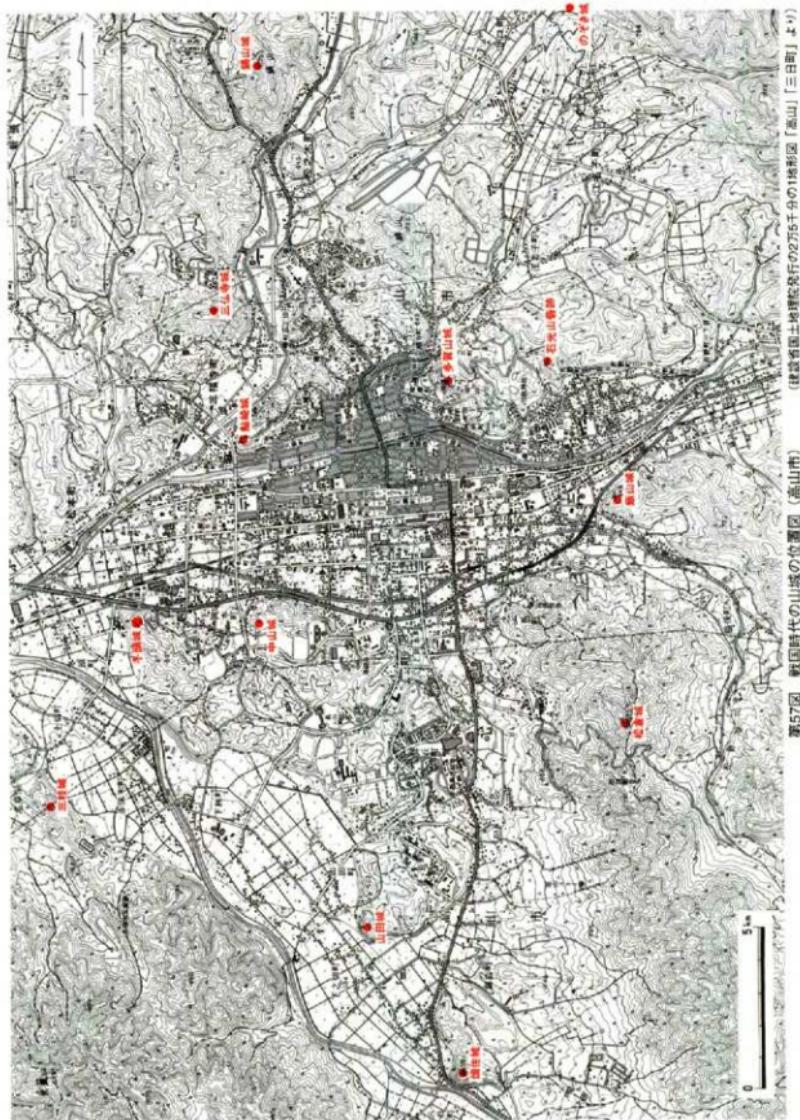


写真29



写真30

写真 高山市の城



第3項 冬頭城跡の縄張りについて

岐阜県中世城館跡総合調査委員会 調査員 佐伯哲也

(1) 冬頭城跡の概要

冬頭城跡は、川上川と宮川との合流点付近の通称小瀬山山頂に位置する山城である。標高約612m、比高は約60mと在地土豪が領地支配をするには適当な高さで、小瀬六兵衛尉冬人が居城したと伝えている¹⁾。また、川上川往来と宮川往来が合流する交通の要衝でもある。

それでは縄張り（平面構造）はどうであろうか。冬頭城址の縄張図を第58図に示す。重要な位置に築城されながら、縄張りはいたって簡単かつ曖昧で、不明瞭な削平地（郭）と小規模な堀切と切岸を尾根上に配置しているだけである。尾根続きの西端を小規模な堀切1で遮断しているものの、かなり離れて（約100m）不明瞭なA郭がある。最高所に位置し、普通なら主郭に相当するものの、B郭に比べて付属施設が少なく、単に最高所に位置しているだけの従郭と解釈できよう。明確な切岸2を設けて尾根続きを遮断している。A郭と堀切1とは連動性に乏しく、堀切1は城郭施設ではないかもしれない。

A郭からさらに約200m離れてB郭がある。A郭に見下ろされる形になるが、付属施設の多さからB郭が主郭（本丸）と解釈できよう。B郭も削平が甘く、ほとんど自然地形である。B郭の後方に堀切3があるが、深さも浅く、幅も広すぎ、さらに角度も鈍すぎることなど城郭の遺構とは考えられない。

B郭に続くC郭は、唯一きちんと削平されており人工的な郭と呼ぶことができるものである。さらに高さ約2mの鋭角の切岸で完全に尾根続きを遮断している。C郭の存在によって冬頭城は城郭と断言できると言っても過言ではあるまい。以降、北東側の尾根続きに不明瞭な小郭が続いている。

以上が冬頭城の縄張りの概要である。不明瞭な遺構がほとんどで、しかも尾根の上に散在しているにすぎない。A郭とB郭との間にはほとんど遺構が存在せず、連動性は全くない。両郭は独立していると言えよう。

(2) 考察

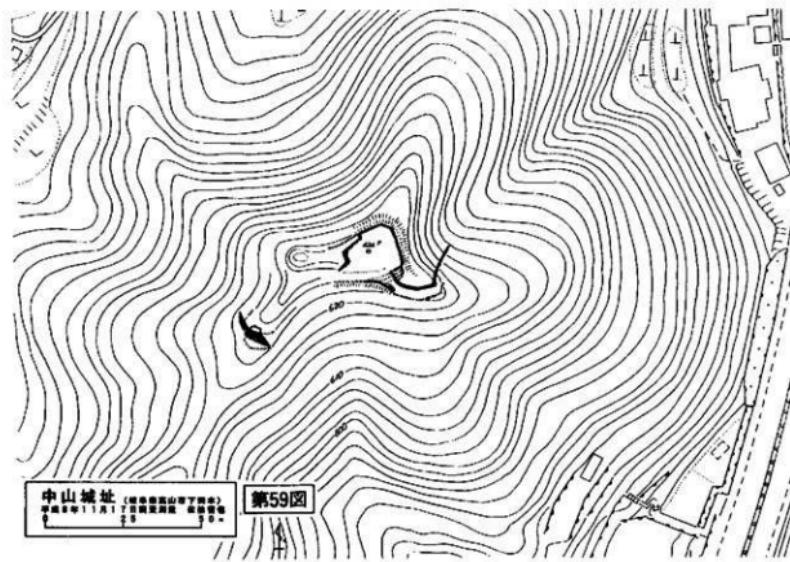
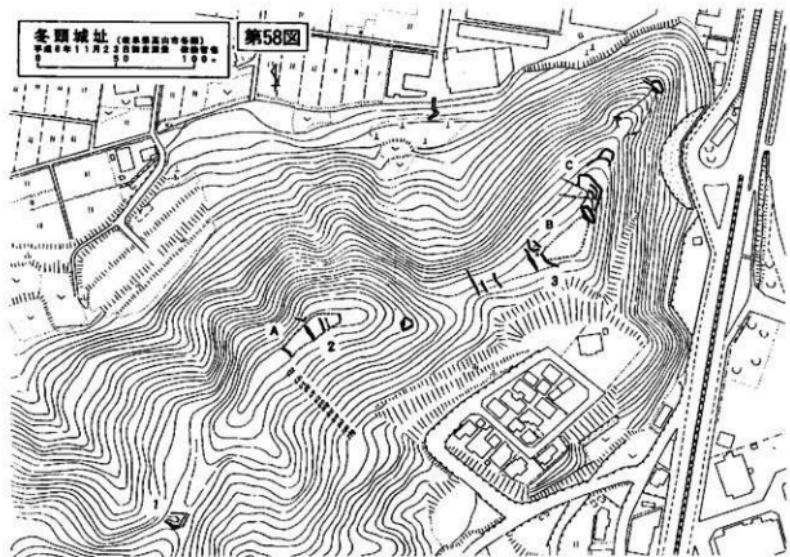
冬頭城の縄張りの特徴として、下記三点のことが言える。

①遺構が不明瞭で、縄張りがほとんど発達していない。また小規模である。

②遺構が散在しており、各郭が独立している。

③鋭角の高切岸で尾根続きを遮断している。

まず第1点目だが、明瞭な遺構（軍事施設）がほとんど無いと言うことである。普通は尾根に堀切を設けて敵の攻撃を遮断するのだが、何故かそれをしていない。堀切1も軍事施設とは断言できない。つまり山城最大の特徴である軍事化をしておらず、縄張り技術が未発達のままである。軍事施設としての性格が極めて強い山城としては、特異なことと言えるが、実はこれが飛驒、特に大野郡・益田郡の山城の特徴なのである。



第58・59図 冬頭城址・中山城址拡張図

飛驒国は、1585（天正13）年、金森長近が三木討伐に進行するまで外部勢力がほとんど侵入せず、土豪達がぶつかる小競り合い程度の合戦しか行われず、しかも益田郡・大野郡は三木氏以外に突出した土豪は現れなかった。この結果、城郭に立て籠る籠城戦もあまり行われず、また、外部勢力がもたらす新技術も導入されなかった。従って城郭の繩張りは発達する必要もなく、巨大化して敵からの攻撃を防ぐ必要性もなかったのである。そして未発達のまま、飛驒の戦国時代は終結する。大野郡・益田郡の城郭の規模が小さく繩張りがほとんど発達していないのは、このためと考えられよう。冬頭城の他にも、山田城（高山市山田）・畠佐城（高山市新宮）・中山城（高山市下岡本）の繩張りはほとんど発達しておらず、飯山城（高山市飯山）は全くの自然地形である。三木自綱は1582（天正10）年、宿敵・江馬輝盛を倒して念願の飛驒統一を達成し、わずか三年余りだが、飛驒一国の国主として君臨する。その国主の一族・重臣クラスが在城する三仏寺城（高山市三福寺）・鍋山城（高山市松之木）も繩張りはほとんど発達していない。さらに自綱が跡を譲った嫡男・秀綱の居城・松倉城（高山市西之一色町）もあまり繩張りは発達していない²⁾可能性がある。三木氏の金城湯池とも言うべき大野郡・益田郡は、合戦らしい合戦はほとんど無く、従って城郭の繩張りも未発達のままで良く、発達する必要も無かったのである。特に三木氏の居城・松倉城周辺の城郭において、その傾向が著しい。

それに対して、飛驒の霸権を最後まで争い、江馬氏と三木氏が激突した吉城郡、特に古川盆地周辺の城郭は、城郭の巨大化・繩張りの発達が著しい。小唐利城（古川町信包）・小島城（古川町杉崎）・蛤城（古川町高野）・野口城（古川町野口）・向小島城（古川町信包）・広瀬城（国府町名張）・高堂城（国府町瓜巣）・梨打城（国府町八日町）と飛驒の名城は、ほとんどが吉城郡に集中する。最後まで生き残った飛驒の二大国人が、財力と当時の最新技術を導入して城郭を大改修して飛驒の霸権を争い、最終的には金森長近の飛驒侵攻に備えて国運を賭けて改修しているのだから当然と言えよう。上記のように、冬頭城の繩張りの不明瞭・未発達及び小規模化は、大野・益田両郡の軍事的安定化を端的に表した特徴と言えるのである。

第2点目は、A郭とB郭があまりにも離れすぎており、その間に明瞭な造構が無いことである。付属している造構の多さからB郭が主郭と考えられるが、両郭の間には、明確な主・従郭の関係は見当たらず、というよりも完全に独立しており、郭主の身分関係を伺うことができる。すなわち主郭（B郭）の郭主と、従郭（A郭）の郭主との間には明確な主従関係ではなく、ほとんど対等の関係にあったと考えられる。土豪連合体や一族連合体が築城すると、いずれが主郭か従郭かわからない無秩序な郭の繩張りになってしまうことが多い。旧態依然とした中世土豪にこの形態の城郭が多く、冬頭城も土豪単独の城郭ではなく、土豪連合体の城郭か、一族連合体の城郭だったということが、繩張りから推定することができるのである。

第3点目は、鋭角の高切岸で尾根続きを遮断していることである。C郭の先端を高さ約2mの鋭角の切岸で、完全に尾根続きを遮断しており、冬頭城で唯一明確な軍事施設である。この存在によって冬頭城が城郭であることが確認できる。普通、切岸をさらに深く切り込んで堀切とし、尾根続きをより強固な遮断線を構築するのだが、何故かそのようにしてない。しかし、これも冬頭城周辺の城郭に共通して見られる軍事施設なのである。



第60、61図 山田城址・彦佐城址調査図

冬頭城跡から南へ約1.1kmの至近距離に位置する中山城は、三木氏の一族・岡本豊前守が居城した³⁾と伝えている。中山城跡の縄張図を第59図に示す。小規模かつ不明瞭な遺構で、三木氏一族の城郭なのに不明瞭な郭と切岸しか設けていない。尾根の先端に郭を配置しているが、削平は甘い。郭には通路のような施設が付属しているが、城郭としての施設なのか検討を要する。中山城で注目したいのは冬頭城と同様、尾根続きを高切岸で遮断している点である。普通なら尾根続きを堀切で遮断すべきなのに、何故か高さ約3mの鋭角の高切岸で遮断している。切岸の内側（城側）に土塁を設けて防御力を増強し、軍事施設としての位置付けを強めている。

冬頭城跡から南西へ約3kmに位置する山田城は、郡上長瀧寺代官山田紀伊守が居城した¹⁾と伝えている。山田城跡の縄張図を第60図に示す。冬頭城同様小規模かつ不明瞭な遺構で、小規模な削平地・堀切・切岸しか残っていない。堀切といつても溝程度のもので、ほとんど役にたたない。伝承がなかつたら、表面観察のみでは城郭遺構と判断できない遺構である。山田城でも注目したいのは、冬頭城と同様、尾根続きを高切岸で遮断している点である。ここも何故か堀切で遮断せず、高さ約2mの鋭角の高切岸で遮断している。

冬頭城跡から南西へ約4.3kmに位置する畠佐城は、山田城と同じく山田紀伊守が居城していた¹⁾と伝えている。畠佐城跡の縄張図を第61図に示す。冬頭城同様小規模かつ不明瞭な遺構で、小規模な削平地・堀切・切岸・堅堀が残っている。堀切は小規模なもので、完全に尾根を遮断していない。畠佐城も冬頭城と同様、尾根続きを高切岸で遮断しており、最も注目したいのは、切岸と堅堀とをセットで用いている点である。畠佐城の場合、堅堀の設置目的は、堀切等だけで防ぎきれなかった尾根の両斜面を移動してくる敵を遮断するためであり、堅堀とセットで使用しているということは、軍事施設（遮断施設）として切岸を設けているということが判明するのである。なぜ、より強力な遮断線と考えられる堀切に加工せず、切岸にとどめておいたのか不明とせざるをえないが、切岸も堀切と同じ性格・目的で構築されていたのである。

以上のように、冬頭城・中山城・山田城・畠佐城に設けられている鋭角の高切岸は、城郭施設（軍事施設）として、敵の攻撃を遮断するために設けられたと考えられる。なぜ城主達は堀切にせざり切岸にしたのか結論は不明にせざるをえないが、冬頭城周辺の城郭に共通して見られる防御施設として位置付けられよう。

(3) まとめ

以上、冬頭城の縄張りを考察した。冬頭城の縄張りは、飛騨の軍事的緊張の度合いを強く反映した城郭であることが判明した。しかしそれは益田郡、特に大野郡に多く見られる縄張りで、冬頭城特有の縄張りではなかった。従って冬頭城の縄張りだけでは、城主や築城年代を特定できないのである。

一般的に言えることは、冬頭城の縄張りは周辺の城郭にも多く見られる通常のもので、しかも戦国末期に大改修された形跡も全く見られない。城主は在地の上豪で、まとまりの無い縄張りから土豪連合体か、あるいは一族連合体が築城した可能性もある。築城年代は大野郡の軍事的緊張が若干高まつた1530（天文初）年頃から、軍事的緊張が極度に高まり始めた1570（天正初）年頃までの間に絞ることができよう。郭の削平もあまく、きちんと土木工事が施されていないことから、長期間使用された

とは考えられず、短期間の使用で廃城になったと考えられる。恐らく軍事的緊張が高まった結果築城し、戦闘状態が緩和された結果放棄されており、純軍事的な目的だけで築城・使用されたと考えられるのである。

余談になるが、飛驒にも縄張りだけで改修年・改修者が判明する城郭がある。例えば神岡町の高原諏訪城は、単独で派生する長堅堀があるので1578～82（天正6～10）年に江馬輝盛が改修したことが判明する。国府町の広瀬城は敵形阻塞があるので、1584～85（天正12～13）年に三木自綱が改修したことが判明する。さらに古川町の小島城・始城は石垣で固めた内折形虎口があるので1585（天正13）年に金森長近が改修したことが判明する。

冬頭城の縄張りは、益田郡・大野郡に広く普遍的に存在するものであり、残念ながら上記城郭のように改修年・改修者が判明するものではない。しかしそれは、益田郡・大野郡には三木氏以外に突出した国人が出現せず、比較的無事平穡に戦国時代が終結した証拠なのである。このことは従来の文献史学や考古学では判明しなかったことであり、縄張り研究の成果と言えよう。冬頭城だけでは何も語ってくれないが、飛驒全体を見渡して考えるなら、こうも雄弁に物語ってくれるのである。

城郭の調査は、文献史学・考古学研究の他に縄張り研究も必要不可欠だということがわかっていただいたいと思う。今後は三者が一体となった調査を実施していくことが大きな課題となり、城郭研究を大きく飛躍させる鍵となるであろう。

参考文献

- 1) 森本 一雄 1987 『定本飛驒の城』
- 2) 佐伯 哲也 1999 「愛城研報告第4号」『松倉城の縄張りについて』
- 3) 長谷川忠崇 1829 『飛州志』

第4章 自然科学分析

第1節 半球状金銅製品・赤色顔料・骨質物の蛍光X線分析

藤根 久（パレオ・ラボ）

1. 試料と方法

蛍光X線分析を行った試料は、5世紀末の冬頭山崎2号古墳から検出された空玉破片・赤色顔料・骨質物である。半球状金銅製品は、金属光沢が明瞭に認められる剥離試料であるが、水洗い後セロハンテープに貼りつけ測定試料とした。また、赤色顔料および骨質物は、潰してセロハンテープに付着して測定試料とした。

試料は、蛍光X線分析計を用いて定性的に元素組成を調べた。分析装置は、セイコー電子工業（株）製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電流20~25μA、電圧50KV、試料室内は真空である。

測定結果は、蛍光X線スペクトル図を示し、各ピークのX線名称を示した。なお、ロジウム（Rh）のピークはX線管球ターゲットに由来するピークであり、試料成分とは関係がない。

2. 結果および考察

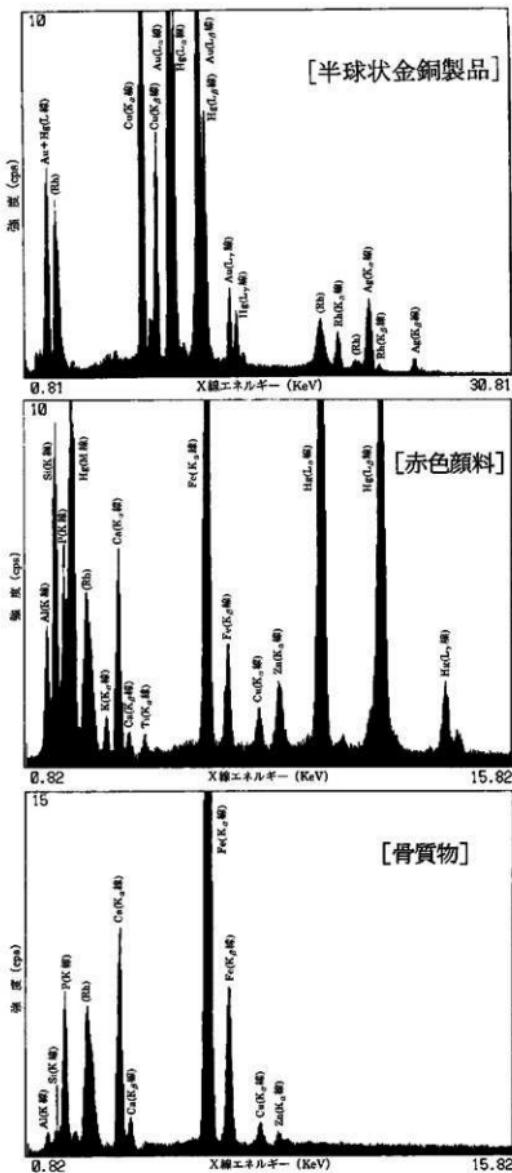
蛍光X線分析の結果は、第62回に蛍光X線スペクトル図として示した。以下では、各試料の定性分析の結果と若干の考察を行う。

[半球状金銅製品]

測定の結果、金（Au）および銅（Cu）が高率で検出され、水銀（Hg）と銀（Ag）も検出された。こうしたことから、金属光沢をもつ半球状の金銅製品は、地金の銅に水銀を用いたアマルガム法により鍍金されたものと推定される。同様の分析例として兵庫県三田市高川古墳群から出土した6世紀後半の金銅製中空の耳環などが知られている（村上、1995）。なお、この耳環の断面のEPMA分析から、地金接合部に銀（Ag）と銅（Cu）の2成分系からなるいわゆる銀錫が使われていることが分かっている。ここで検討した金銅製品においても銀（Ag）が検出されていることから銀錫が利用されたことが予想される。

[赤色顔料]

測定の結果、水銀（Hg）と鉄（Fe）が高率で検出され、他にアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、リン（P）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、銅（Cu）、亜鉛（Zn）なども検出されている。このうち赤色顔料に関係する成分は、水銀（Hg）と鉄（Fe）であるが、鉄は土壤中にこの程度の検出率で含まれることから、主に水銀（朱）と考えられる。水銀朱は、主成分が硫化水銀（HgS）からなる辰砂（cinnabar）から磨り潰して作られる（山崎、1987）。



第62図 半球状金銅製品・赤色顔料・骨質物の蛍光X線スペクトル図

[骨質物]

測定の結果、土壌中に比べてリン（P）とカルシウム（Ca）が高率で検出され、他にアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、鉄（Fe）、銅（Cu）、亜鉛（Zn）なども検出されている。こうしたことから、骨の主要な成分であるリンとカルシウムが高率で検出されることから、骨と推定される。

冬頭山崎2号古墳の弓に塗られていた黄土色の漆様膜（弓の握り部分に樹皮か繊維質のものが巻かれ塗られていた）を用いて成分分析（塗か否か）及び膜面観察を行った。

1 使用機器の原理および分析条件

- フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR）（（株）日本電子製 JIR-6000）

試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を固定する。

*分析条件 KBr 錠剤法（極微量の試料をKBrと混ぜ合わせプレスして錠剤にする。）

分解能 4cm⁻¹ 検出器 TGS

- 生物顕微鏡（（株）オリンパス製 BX50）

- ミクロトーム（（株）日本ミクロトーム研究所製 ST-201）

2 分析結果

(1) 成分分析

土壌が多く付着していたため、超音波洗浄を行った後KBr錠剤法でFT-IRによる分析を行った。その結果、土壌分析などの吸収と共に漆の吸収が見られた。（第63図・64図参照）

(2) 膜面構造

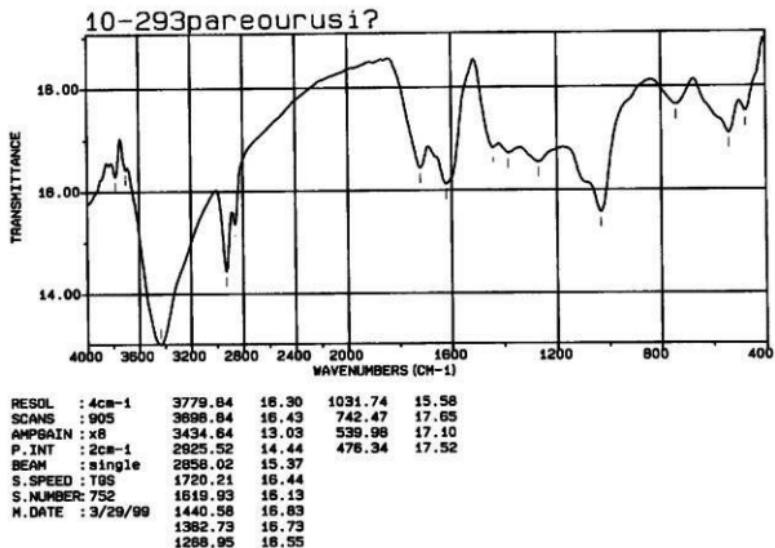
微量の漆様膜を樹脂に包埋し、ミクロトームを用いて膜断面の切片を作成した。永久ブレバラーントにした後、生物顕微鏡で観察および写真撮影を行った。（巻頭写真4）

試料の採取状況が不明であり、層構造に関して考察できないが茶褐色系の透明な漆様の層が観察された。

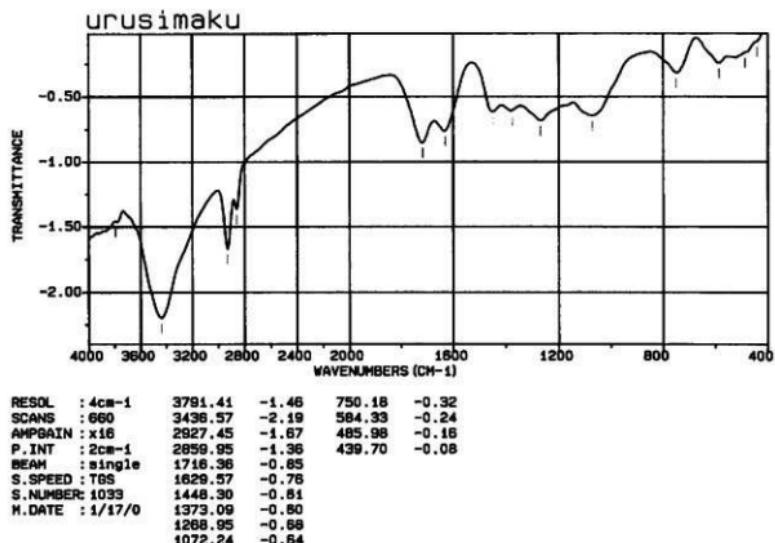
以上より、冬頭山崎2号古墳の弓には漆が塗られていたと考えられる。

引用文献

- 村上 隆 1995 「古代金工のハイテク」『古代に挑戦する自然科学』 クバプロ 109p～120p
 山崎一雄 1987 「古文化財の科学」 思文閣出版 352p



第63図 弓に塗られていた漆様膜のFT-IRチャート



第64図 漆のFT-IRチャート

第2節 冬頭山崎2号古墳の鉄剣及び鉄鎌付着木質部の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここで同定を試みた試料は、鉄剣の把と鞘の部位に付着した材片、鉄剣柄の装飾部分から出土した角形で半球状金銅製品の木芯と思われるものとそれを囲っていた薄い木棒状のもの、鉄鎌の矢柄を囲んでいた植物質のものである。当古墳の時期は5世紀末と推定されている。古墳から出土した刀剣類の木質部の樹種調査は、近畿地方と関東地方のものが多く、把は広葉樹材で鞘は針葉樹が使われており樹種選択性が明瞭であることが知られている。しかし、当遺跡周辺域ではこのような調査例は少なく、まして鉄鎌矢柄部を囲む材質の調査はあまり知られていない。今回、試料を採取し組織学的検討を行うことにより、樹種を明らかにし、近畿地方や関東地方の報告事例と比較検討することにより、当古墳から出土した鉄剣関連の付属部位の樹種選択性を明らかにすることができた。

2. 同定の方法

試料は剣からの鉄分が染み込み固結した状態であったため、走査電子顕微鏡で組織を観察した。材試料については、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、各断面を5mm角以下に整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を乾燥させた後、金蒸着を施し走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

採取試料は便宜的にNo1～No7の番号を付け、第13表に同定結果をまとめた。

第13表 2号墳出土の遺物付着木質部の同定結果

試料	採取部位	分類群	備考
No1	No3の裏側付近	カエデ属	剣から遊離し、床面の敷石に付着していた破片
No2	剣把	カエデ属	
No3	剣鞘	針葉樹	ヒノキの可能性あり
No4	鉄鎌柄周囲	タケア科	
No5	金銅製品の木芯？	不明	中心部空洞の柱状構造、金属ではない
No6	金銅製品の木芯？の木棒	広葉樹	
No7	剣把	カエデ属	

No1はカエデ属で、剣から遊離し敷石に付着していた木片であり採取位置はNo3の裏側に近い部分であった。No2は剣把の部位から採取し、カエデ属であった（図版23、2a-2c）。No3は剣鞘の部位から採取し、針葉樹でありヒノキ属の可能性が高い（図版65図）。No1はNo3の剣鞘部の裏側付近から採取されたが、No1はカエデ属でありNo3は針葉樹で樹種は異なっていた。No1とNo3は近い位置から採取されたが樹種が異なっていた原因として、No1は剣から遊離していたことから剣の鞘とは異なる部分から移動していた可能性が考えられる。No4は鉄鎌の柄の周囲にある植物質を採取した。これは維管束の特徴

から材ではなくタケ亜科（いわゆるタケ・ササ類の仲間）であった（図版23.3）。No5は剣把の装飾部である半球状金銅製品の飾りの木芯らしい部分で、整った角形で外見は材のようであった。しかし、組織の状況が悪いためか、中心部が空洞の柱状のものが観察されたが、材構造は認められなかった（図版23.4a-4b）。その断面は中心が空洞の柱状の構造が見られたことから、金属などの無機質ではないことは判明した。この角形の木芯らしいものの3側面には木棒らしきものが付いており、この一部No6を採取して調べた。この枠は材構造を示し広葉樹であることは確認できた（図版23.5a-5b）が、微破片で充分な特徴がつかめず樹種は不明である。No7はNo2とは異なる位置から採取した剣把部である。

No7もNo2と同様にカエデ属であった。

以下に同定の根拠となった組織の観察結果を分類群ごとに記載する。

(1) 針葉樹 conifer 図版23.1a-1d (No3剣鞘)

主な軸方向要素が仮道管からなり、晩材部の量は少ない針葉樹である。樹脂道は無く、仮道管にらせん肥厚はない。分野壁孔の輪郭は丸くやや小型で、一分野に2~3個が見られた。分野壁孔の特徴は大型で楕円形の分野壁孔を持つスギとは異なり、晩材部の量が少ないとからもヒノキ科のヒノキの可能性が考えられる。

(2) カエデ属 Acer 図版23.2a-2c (No2剣把)

横断面は小型で孔口の丸い管孔が単独または2~3個が複合して散在し、年輪界は不明瞭である。放射組織は1~3細胞幅で平伏細胞からなる同性である。道管の穿孔は單穿孔で、道管には明瞭ならせん肥厚が見られ、放射組織は平伏細胞からなる。このような3断面の観察から広葉樹のカエデ属Acerであると同定した。

カエデ属は北半球の温帯に広く分布し、日本では約26種と多くの変種が知られているが材構造は類似している為に種を識別することはできていない。

(3) 広葉樹 broad-leaved tree 図版23.5a-5b (No6空玉飾り木芯？の木枠)

横断面の組織は融合しており状況は悪い。放射断面の観察から、かろうじて材構造を成すことが判った。放射組織は平伏細胞のみが見られ、道管の破片らしきものにはらせん肥厚が見られた。非常にわずかな破片であり保存も悪いので、広葉樹であるここまでしか判らない。

(4) タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 図版23.3 (No4鉄錐柄周囲)

試料は1mm以下の微破片であるが、タケ亜科に特徴的な維管束が観察された。維管束は、向軸側に原生木部がありその左右にやや大きな後生木部の管孔があり、背軸側には節部に相当する空洞が見られ、全体として4個の穴の集合が厚壁の纖維細胞からなる厚い維管束鞘に囲まれている。

タケ亜科はタケ・ササの仲間で約12属があり、中国や東南アジアから移入され広まったものが多い。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があると言われている。組織の一部から属や種を識別することは出来ていない。

4.まとめ

鉄剣の把はカエデ属、鞘は針葉樹でありヒノキの可能性が高く、鉄錐柄周囲の木質部はタケ亜科、

金銅製品飾りの木芯?は状況が悪く不明であり、その飾りの木芯?の木枠は広葉樹材であった。

当遺跡の樹種を今までの調査結果と比較した。奈良県生駒郡の藤ノ木古墳から出土した刀剣類は、詳細な部位ごとに残存木質部の樹種調査が報告されている(林ほか、1993)。その結果は、大刀・剣・刀子の鞘にはヒノキが多く、ほかに二葉マツ・シイ属が使われている。彫り模様がほどこされている大刀・剣・把頭・把間・把縁・鞘口・鞘尻はすべてツゲであり、刀子の把もツゲであった。林ほか(1993)は関連する既往の刀剣類関連木質の樹種報告もまとめており、全般的にヒノキの出土例が多いこと、特に鞘本体と特定できるものにはヒノキが普遍的に使用されていることを指摘している。その後、千葉県上総地方の3~7世紀の古墳から出土した木質遺物105点の樹種調査結果がまとめられている(鈴木・能城、1994)。上総地方では、大刀・小刀・剣の鞘はスギとヒノキの2種類の針葉樹が多く、特にスギが多く使われていたのが近畿地方とは異なる特徴であった。一方、把は複数の針葉樹と広葉樹が使われていた。把に使われていた針葉樹はスギとヒノキが多い点は鞘の樹種利用と同様であるが、把にはこのほかにカヤやイヌガヤも使用されていた。把の広葉樹は未確定なもの(カエデ属?)も含めるとカエデ属が圧倒的に多く、その他にガマズミ属?・ヤブツバキ・クリ・コナラ節・アカガシ亞属・スダジイなどが使われていた。千葉県成東町の古墳時代末期の駄ノ塚古墳から出土した大刀の鞘尻はクリでつか頭はカエデ属であった(鈴木、1996)。以上の今までの主な資料によると、鞘本体にはヒノキとスギの針葉樹が多く、把の部位や鞘口・鞘尻は複数の広葉樹が使われている。また鞘は、近畿地方ではヒノキが多く、関東地方ではヒノキと共にスギも多いことが知れている。

当古墳の剣の把(カエデ属)と鞘(針葉樹)の樹種利用は、近畿地方や関東地方の調査例と一致しており、鞘の針葉樹はスギではなくヒノキの可能性が高い点は近畿地方の樹種選択性に類似していると思われた。

当古墳から出土した鉄錆の柄周囲の材質を組織学的に調べた結果、タケ亜科(タケ・ササ類)であることが判明した。今回、遺物から検証された事例を探すことは出来なかったが、古墳事典(大塚・小林編、1996)によると矢柄には篠竹が多く用いられているそうである。篠竹は全体が細く小さい竹筆類の総称である。当古墳から出土した鉄錆の柄部もタケ亜科を使用していたことが確認できた。

引用文献

- 林 昭三・島地 謙・福田さよ子 1993 「石棺内出土刀剣類等の木質部の樹種」『斑鳩 藤ノ木古墳 第2-3次調査報告書』
- 鈴木三男・能城修一 1994 「千葉県上総地方古墳出土木質遺物の樹種」『土筆 第3号』土筆倉
- 鈴木三男 1996 「駄ノ塚古墳出土刀剣具木質部と木棺の樹種」『国立歴史民俗博物館研究報告 第65集』国立歴史民俗博物館
- 大塚初重・小林三郎編 1996 VI副券品3 武器 『古墳事典』 東京堂出版



出土遺物採取位置①
第65図 2号古墳出土木質部採取位置



写真31 出土遺物採取位置②



写真32 出土遺物採取位置③

第5章 結語

冬頭城跡とよばれる中山丘陵北部の小瀬山が、今回の発掘調査により古代には古墳群として、中世には城郭として使われたことが明らかになった。

調査中に発見された2基の古墳と1基の横穴墓は、丘陵中腹の狭い範囲に存在しながらも時代を異にし、特徴的な姿を見せていく。

冬頭山崎1号古墳は、6世紀末～7世紀初の横穴式石室であり、玄室の平面形は両側壁が膨らむ脛張りで飛驒地域の初見となった。構築方法においても掘り方掘削後に腰石や樋石を配置する特殊な石室である。その手法から北部九州とのつながりを強く感じさせるものがあり、美濃地域から影響を受ける以前の横穴式石室と考えられる。

冬頭山崎2号古墳の内部主体は、埴丘の流失により南東側の壁面をなくしているが、基底石と床面の一部を残し5世紀末の竪穴式石室（竪穴系横口式石室の可能性もあるが）の様相を呈している。前述したように壁面や排水溝に簡略化が見られることや板状石材の使用方法から5世紀代の竪穴式石室から6世紀代の横穴式石室へ移る転換期の古墳と考えられる。

また、冬頭山崎1号横穴は、高山市三福寺地区に見られる横穴墓と異なり、小規模で簡略化された造りから7世紀後半以降の横穴墓と推定されるが、この発見により横穴墓の分布が三福寺地区以外に広がる可能性が出てきた。

これら3基の埋葬施設は、狭い範囲に造営されて「古墳群」としながらも、およそ200年という時代差がある。それは単に年代の差だけではなく異なる技法のもとに築造された埋葬施設であり、中山丘陵を含める冬頭地域における同一共同体の繋がりを考えせるものである。しかし、横穴墓は冬頭山崎1・2号古墳とは別の家族体と考えられることから、同一共同体の終焉が考えられる。

冬頭山崎2号古墳から出土した遺物には、弓具一式（漆塗りされた弓や胡簾に入っていたと思われる鉄鎌）と半球状金銅製品の装飾が施された鉄劍など兵杖と儀杖の二面を合わせ持ち、首長墓としても埋葬者の権力の片鱗を見る思いである。漆塗りされた弓、胡簾に納められていた鉄鎌、鉄劍の把を飾る半球状金銅製品は極めて稀な出土事例といえる。

これらの出土遺物や埋葬施設は、滅失した冬頭地域の古墳について考える重要な資料を得ることができたと思う。また、今回の調査の大きな意義は、飛驒地域転換期における古墳の様相が明らかにされたことである。しかし、その転換前後の様相は現在のところ不明である。今回の調査結果が、今後の飛驒地域における古墳調査の一問題提起となれば幸いである。

中世の冬頭については1256（建長7）年、後嵯峨天皇が長瀧寺に飛驒国の河上庄を与えてから室町幕府が滅びるまでの約300年間、代々の将軍により長瀧寺領を保護してきた。しかし、戦国の乱世に土豪が勢力を伸ばし、三木が寺領を侵しはじめると長瀧寺領も保護しきれず、いつしか河上庄も長瀧寺の手から離れてしまっている。その後、この宮川と川上川をはさむ土地について、1488年の桐生買地帳に宮川左岸の桐生・ふいと・本母・・・と「ふいと」の地名がみられる。東等寺に残る資料からも冬任の存在が明らかにされており、斐太後風土記による「ふいと」という地名は冬任という人物名からついた事を否定できないが、出家したとされる冬任が小瀬山に城壁を築いて生活していたとは考え

にくい。

確かに小瀬山山頂の主郭や曲輪2・3には、平坦地や緩やかな斜面に削平された痕跡を確認したが、城館跡といえる柱穴や礎石は認められなかった。検出したビット（柱穴）は、簡易的な建物、もしくは柵の痕跡と思われる。

冬頭城は、他の土豪との関わりで砦のような城として築城されたとすれば十分な役割を果たしているが、中世の城主が単独で治めた城にしては土木的な防御施設が整っていない。城は築城する前に目的にあった土地を選ぶ「選地」と、どのような区画で城を構成するかという「地取り（縄張り）」が重要な条件となる。

「地取り」と言う点で冬頭城跡を考えると東西両側は、自然の急斜面になっているため敵の侵入は困難である。そのため、防御施設は主に北側の尾根部に集中してつくられている。中世の築城は、土木的な防衛施設を多く築いているが、冬頭城跡の防衛施設は、小規模な曲輪が配置しているだけである。主郭となる山頂部では、丘陵の幅が狭く建物を建てるには十分な場所を確保されていない。

高山盆地に築かれた同時代の三枝城や三仏寺城は、山城の最大の特徴である堀切を築いて敵の侵入を困難にしているが、冬頭城跡には明確な堀切が築かれていない。これは、佐伯氏が語る城郭に立て籠もある戦が少なかったため軍事施設（防御施設）が発達しなかったのか、兵農分離以前の軍兵の多くが専業武士ではなく農民であったため小規模な防御施設で十分であったのか、堅固な防御施設を必要としない砦の働きをした城であったと考えられる。

「選地」という点では、冬頭城は次の点で優れた場所である。

①三木自綱が松倉に城を構える以前の高山盆地が一望できる城は、盆地の中央より南側の天神山城や飯山城等に限られているが、北側より高山の町や盆地周辺の城を一望することができる。

②姉小路氏や江馬氏が勢力を伸ばしている吉城方面（北飛騨）からの侵入を監視できる場所である。冬頭城跡は吉城につながる瓜巣街道や宮川、川上川往来が合流する交通の要衝である。

③三枝城は川上川流域の様子はつかみやすいが、高山盆地は見にくく宮川に沿う街道を見ることができない。三仏寺城は大八賀川を真下に見ることはできるが、盆地の北東に位置する北山のために高山の様子がつかめない。また、小瀬山や松本町の丘陵に隠れて瓜巣街道や宮川沿いの道の様子がつかめない。つまり冬頭城は、これらの死角となる吉城方面からの侵入を監視すると共に川上川流域や高山盆地の様子をつかむことができる場所である。

冬頭城が、北飛騨（吉城）を監視する場、また、三枝城・三仏寺城とともに伝達の場として使われた可能性は高く、主郭が位置する頂上の先端部には狼煙痕と思われる焦土が残されており、伝えの城や砦としての働きをしていたと思われる。つまり、冬頭城が単独の城郭としてではなく土豪連合体の城郭、もしくは一族連合体の城郭として築城し、軍事的緊張が高まった時期に於いて城郭として活用されたと考える。

引用・参考文献

- 岐阜県
高山市
上村木曾右衛門源満義
富田 禮彦
長谷川 忠崇
森本 一雄
財団法人金森公顕彰会
高山市教育委員会
高山市教育委員会
高山市教育委員会
高山市教育委員会
高山市教育委員会
田中 彰
成瀬 正勝
中井 正幸
飛騨考古学会
末永 雅雄
朴 美子
安濃町教育委員会
能登島町教育委員会
京都府大宮町教育委員会
島根県教育委員会
倉敷考古館
大垣市教育委員会
岐阜県吉城郡国府町
岐阜県吉城郡国府町
岐阜県吉城郡国府町
能登島町教育委員会
羽咋市教育委員会
岐阜県文化財保護センター
岐阜県文化財保護センター
- 1969 「飛騨国の地頭」「飛騨国の国司と守護」『岐阜県史』
1981 「中世」『高山市史・上巻』
1746 「飛騨国中案内」
1873 「斐太後風土記」
1829 「飛州志」
1987 「定本 飛騨の城」
1986 「飛騨金森史」
1999 「三枝城発掘調査報告書」高山市埋蔵文化財調査報告書第24号
1989 「桧山第1~3号横穴発掘調査報告書」高山市埋蔵文化財調査報告書第16号
1985 「赤保木5号古墳」「高山市内遺跡発掘調査報告書」高山市埋蔵文化財調査報告書第22号
1971 「冬頭王塚発掘報告書」
1993 「堅穴式石室をもつてゐる赤保木古墳」「現存する高山市内の古墳」会報『斐陀』第3号
1998 「美濃における後期群集墳形成の一契機」『岐阜史学』
1992 「飛騨の後期古墳」「美濃の後期古墳」美濃古墳文化研究会
1985 「飛騨と考古学」
1991 「太刀と外装」「日本の武器」第4巻
1985 「埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察」「宇陀北原古墳」大宇陀町文化財調査報告書第1集
1987 「中大谷13・16号墳発掘調査報告書」
1987 「史跡須曾蝦夷穴古墳」
1984 「小池古墳群」
1967 「造山第三号墳調査報告書」
1959 「金蔵山古墳」
1992 「花岡山古墳群」
1988 「飛騨の古墳と古代寺院」「北陸から見た飛騨」「古代の飛騨」飛騨国府シンポジウム
1994 「日本歴史の中の飛騨」第3回飛騨国府シンポジウム
1997 「古墳から寺へ」「北陸の古墳文化」「美濃の古墳文化」「飛騨の古墳時代」第4回飛騨国府シンポジウム
1997 「史跡須曾蝦夷穴古墳」
1984 「柴垣ごぜん塚古墳」
1997 「与島古墳群」岐阜県文化財保護センター調査報告書第33号
1992 「鶴尾山城跡・深戸遺跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書第6号

図 版



冬頭城跡 遠景



冬頭城跡 近景

図版2



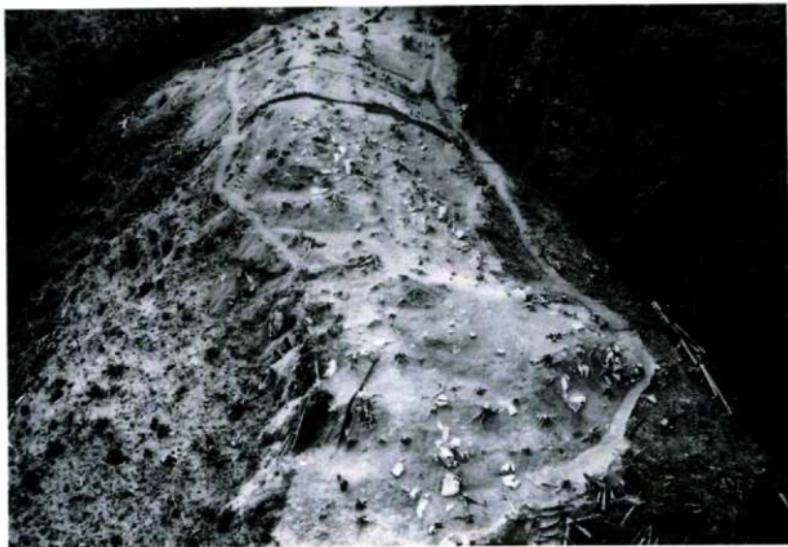
冬頭山崎1号古墳



冬頭山崎2号古墳



冬頭城跡 主郭（本曲輪）



冬頭城跡 小曲輪

図版4



1. 冬頭城跡 調査前



2. 冬頭城跡 調査後



3. 主郭 調査前



4. 小曲輪 調査前



5. 作業風景①



6. 作業風景②



7. 作業風景③



8. 三柱小学校見学会



1. 調査前



2. 調査中



3. 玄室



4. 通道



5. 墳丘



6. 前庭部前のピット



7. 石室裏①



8. 石室裏②

冬頭山崎1号古墳 (1)

図版6



1. 框石



2. 石室内部



3. 右側壁石



4. 左前庭部裏



5. 閉塞石



6. 遺物出土状況①



7. 遺物出土状況②



8. 遺物出土状況③

冬頭山崎1号古墳 (2)



1. 調査前（石室の真上）



2. 調査中



3. 墓石



4. 床面出土状況



5. 石槨（上から）



6. 床面下の溝①



7. 石槨南東側



8. 床面下の溝②



1. 遺物出土状況



2. 鉄鎌①



3. 半球状金銅製品①



4. 鉄鎌②



5. 半球状金銅製品②



6. 刀装具（箱形）



7. 漆塗りされた弓の残欠①



8. 漆塗りされた弓の残欠②



1. 調査前



2. 表土掘削後



3. 石組遺構とピット



4. 石組遺構断面



5. ピット



6. ピット(掘削後)



7. 出土遺物①



8. 出土遺物②

石組遺構

図版10



1. 横穴（正面）



2. 横穴（内部より）



3. 奥壁



4. 横穴（上から）



5. 不明遺構2 ①



6. 不明遺構2 ②



7. 不明遺構1（南西侧）



8. 不明遺構3

冬頭山崎1号横穴・不明遺構



1. 調査前



2. 掘削後



3. 調査前（南西側）



4. 掘削後（南西側）



5. 掘削後（北側）



6. 焼土



7. 掘削後（東側）



8. 掘削後（北東側）

冬頭城跡 主郭（本曲輪）



1. 曲輪2 調査前（南東側）



2. 曲輪2 調査前（北西側）



3. 曲輪2 塹削後（南東側）



4. 曲輪2 塹削後（北西側）



5. 曲輪2 ピット1



6. 曲輪2 ピット4・6



7. 曲輪3



8. 曲輪3

曲輪2・3



1. 小曲輪1



2. 小曲輪8



3. 小曲輪2



4. 小曲輪8・9



5. 小曲輪5・6



6. 小曲輪13



7. 小曲輪6



8. 小曲輪14

小曲輪



1. 1トレンチ



2. 6トレンチ



3. 2・3トレンチ



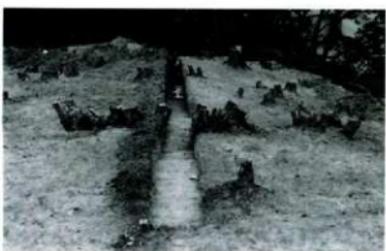
4. 7トレンチ



5. 3・4トレンチ



6. 8トレンチ



7. 5トレンチ



8. 9トレンチ

トレンチ (1)



1. 10・11トレンチ



2. 16・17トレンチ



3. 11・12トレンチ



4. 18トレンチ



5. 13トレンチ



6. 19トレンチ



7. 14トレンチ



8. 20トレンチ

トレンチ (2)



2

有蓋高杯の蓋



1

短頸壺



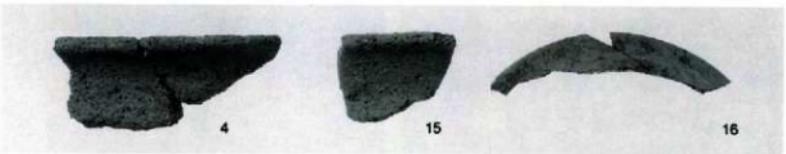
3

有蓋高杯



10-1

石組遺構 出土遺物 足

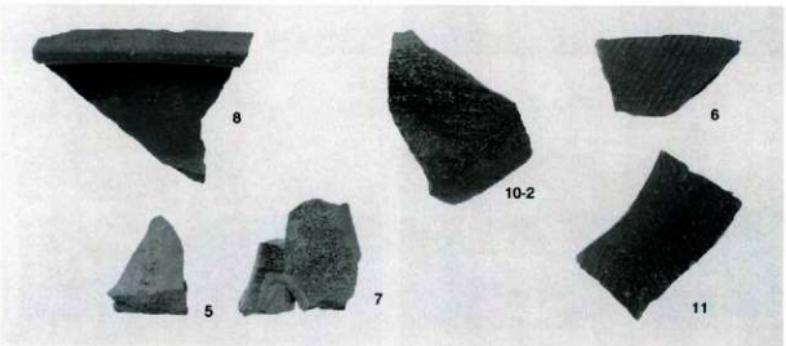


4

15

16

1号古墳出土遺物



8

10-2

5

7

11

2号古墳・石組遺構 出土遺物

1・2号古墳・石組遺構 出土遺物



半球状金銅製品1



半球状金銅製品2



半球状金銅製品3



半球状金銅製品4~6 箱型刀装具



刀装具 (木部)



刀装具全体

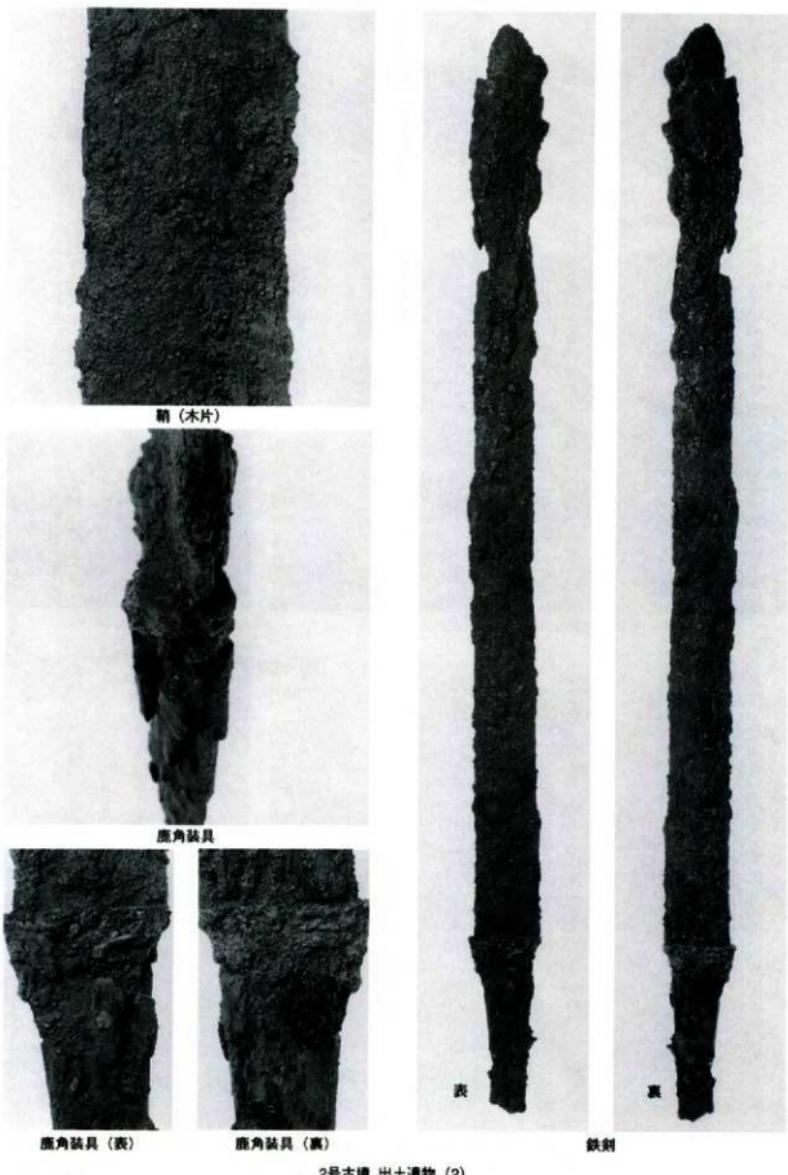


鉄鎌9



鉄鎌12

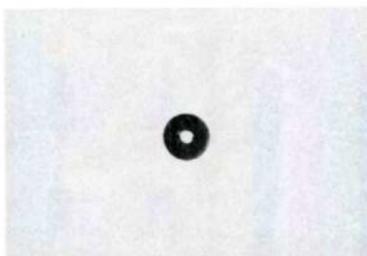
2号古墳 出土遺物 (1)



2号古墳 出土遺物 (2)



漆塗りされた弓の残欠



2号古墳出土遺物 小玉



13



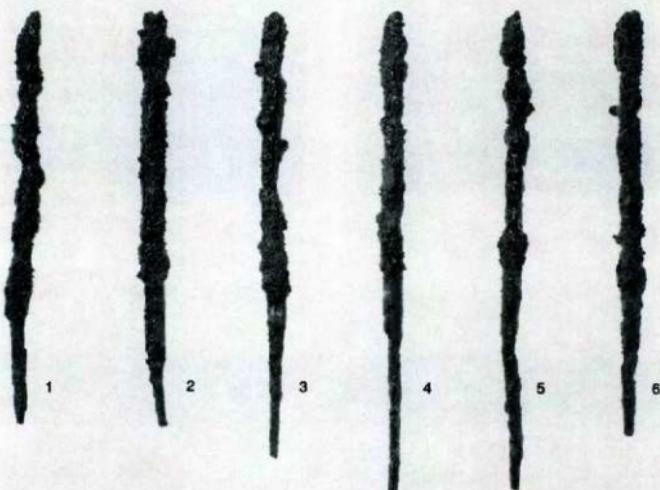
1号横穴出土遺物 管玉



14

不明遺構出土遺物

2号古墳・1号横穴・不明遺物 出土遺物



2号古墳 出土遺物 鉄旗1



2号古墳 出土遺物 鉄旗2



X線写真 鉄鎌

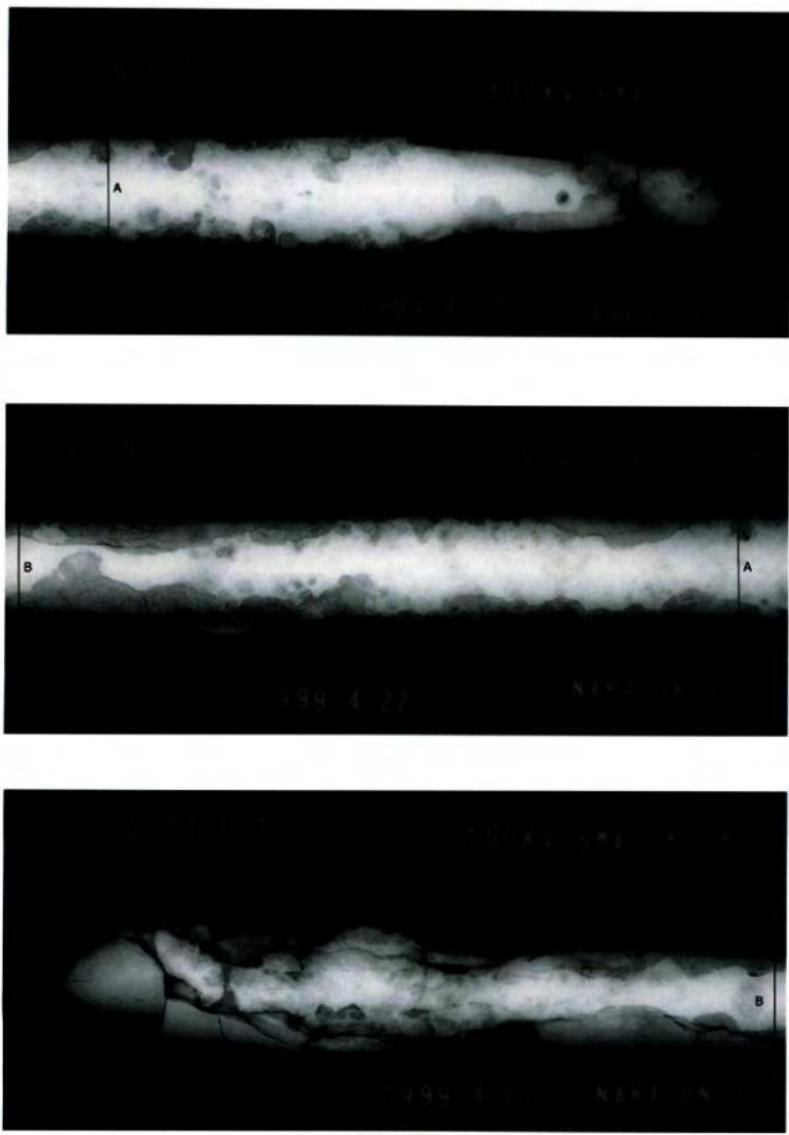
61 FU-F-T 100KV・5MA・1M・IM

1999.4.23-NARA-UNIV-

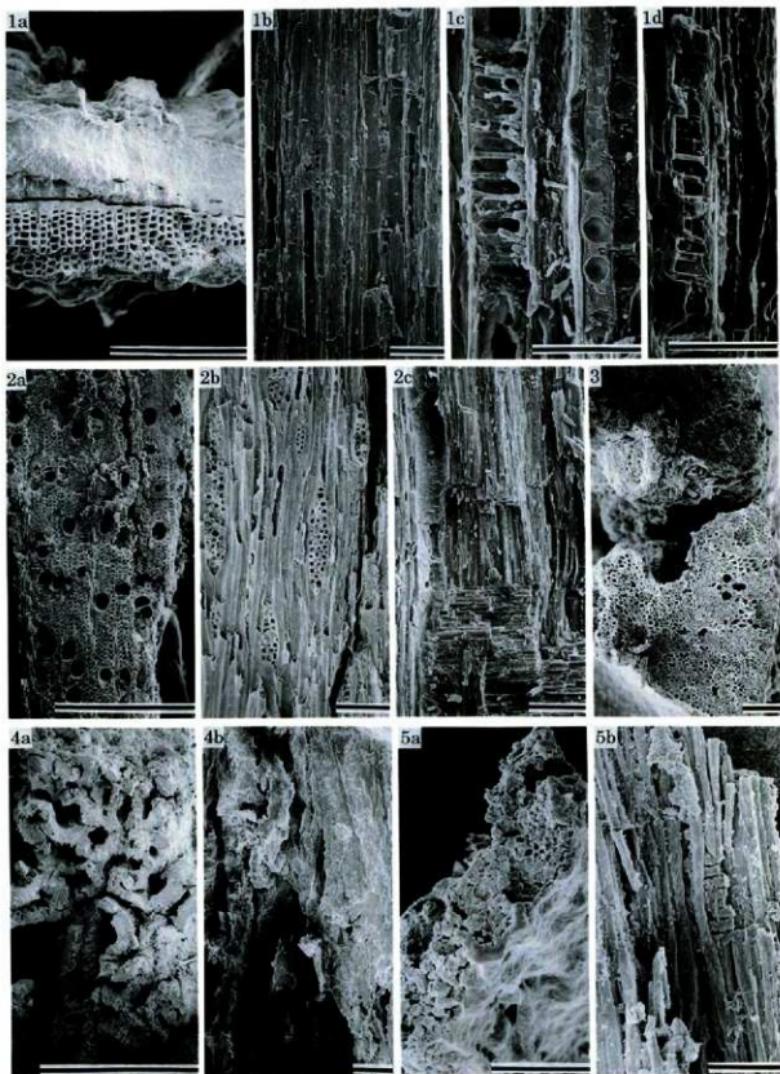


X線写真 鉄鎌・刀装具

図版22

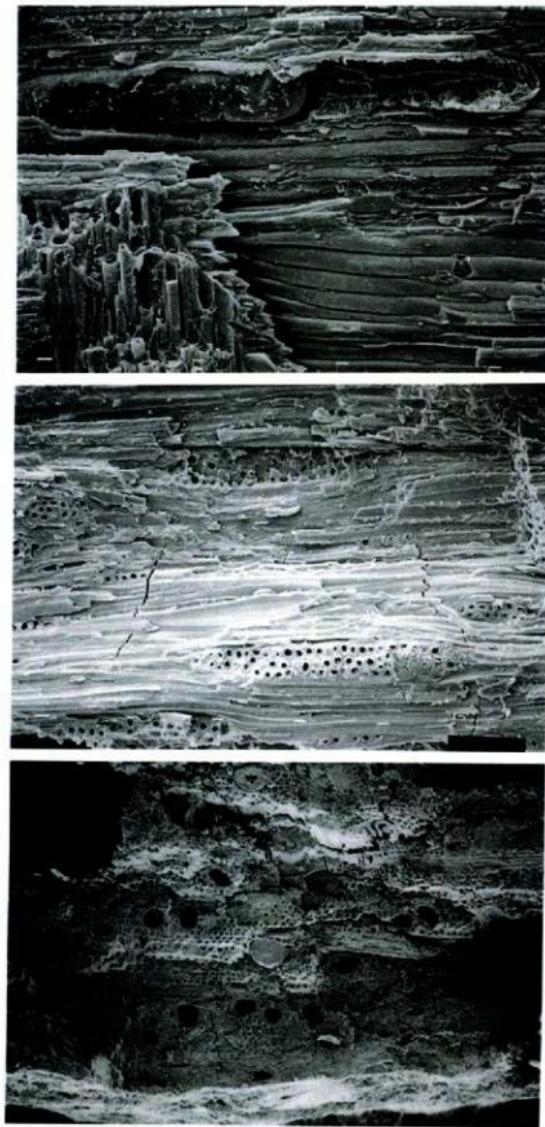


X線写真 鉄剣



2号古墳出土遺物の付着木質部の電子顕微鏡写真

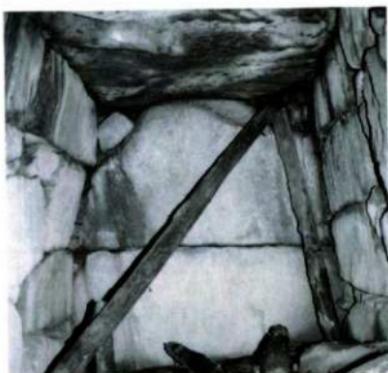
1a-1d: 鈎葉樹 (剣鞘、1a折線断面 1c,1d: 放射断面) 2a-2c: カエデ層 (剣把 2a横断面 2b: 折線断面 2c: 放射断面) 3: タケアシ科 (鉄錐柄周囲 横断面) 4a-4b: 同定不可 (金銅製品の台座 4a横断面 4b: 横断面) 5a-5b: 広葉樹 (刀装具の木枠 5a横断面 5b: 放射断面)
 1a,2a,4a±0.5mm, 1b,2b,2c±0.1mm, 1c,1d±bar:0.05mm, 3,4b±bar:0.1mm, 5a,5b,4b±bar:0.1mm



2号古墳 銅削付櫛材



1. 高野光泉寺古墳



2. 高野光泉寺古墳（石室）



3. 高野光泉寺古墳（石室）



4. 大洞平1号墳



5. 大洞平1号墳（石室）



6. 大洞平2号墳



7. 大洞平2号墳

飛驒の古墳 (1) 古川町



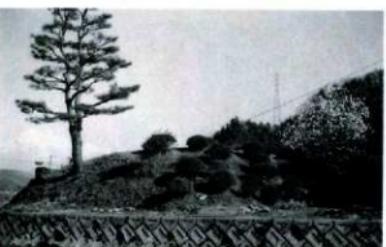
1. 高野水上古墳（古川）



2. 丸山古墳（古川）



3. 五阿弥塚古墳（古川）



4. 高野巾ノ上古墳（国府）



5. 深ノ洞古墳（国府）



6. 深ノ洞古墳（石室）



7. ウシロゴ3号古墳（国府）



8. ウシロゴ3号古墳（石室内より）



1. こう神口古墳



2. こう神口古墳（石室）



3. 広瀬古墳



4. 広瀬古墳（石室）



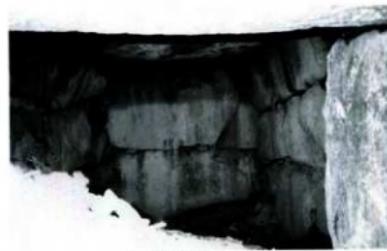
5. かうと洞1号古墳



6. かうと洞1号古墳（石室）



7. 海具江古墳



8. 海具江古墳（石室）



1. 岩屋古墳



2. 岩屋古墳（石室）



3. 小丸山古墳



4. ねずみ跡古墳



5. ねずみ跡古墳（石室）



6. 千島古墳



7. 千島古墳

報告書抄録

ふりがな	ふいとうじょうあと・ふいとうやまざきいちごうこふん・ ふいとうやまざきにごうこふん・ふいとうやまざきいちごうよこあな						
書名	冬頭城跡・冬頭山崎1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山崎1号横穴						
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第61集						
編著者名	上出巳吉・成瀬正勝・佐伯哲也・岩田修・藤根久・植田弥生						
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間 調査面積	調査原因
冬頭城跡 冬頭山崎1号古墳 冬頭山崎2号古墳 冬頭山崎1号横穴	岐阜県 高山市 冬頭町 1516はか	市町村 21203	遺跡番号 00518 09083 09084 09085	36° 09' 27"	137° 14' 47"	19980629 ~ 19981225 2000m ²	一般国道41号 高山国府バイ バス建設事業 に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
冬頭城跡	城館跡	中世	曲輪・切岸	・		・尾根上に簡素な切岸や削平地の防護施設をつくる 中世の城郭遺構を検出	
冬頭山崎1号古墳	古墳	古墳	横穴式石室	有蓋高壙・短頭口		・	
冬頭山崎2号古墳	古墳	古墳	竪穴式石室	鉄剣・鉄鎌・弓		・底部に溝を有する竪穴式 石室を検出し、床面より 金銅製の刀装具をもつ鉄 剣、鉄鎌などが出土した	
冬頭山崎1号横穴	横穴墓	古墳	横穴	菅玉		・	

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第61集

冬頭城跡

冬頭山崎1号古墳

冬頭山崎2号古墳

冬頭山崎1号横穴

2000年3月31日

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター

岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 たけもとプロジェクト